



公立大学法人

静岡文化芸術大学

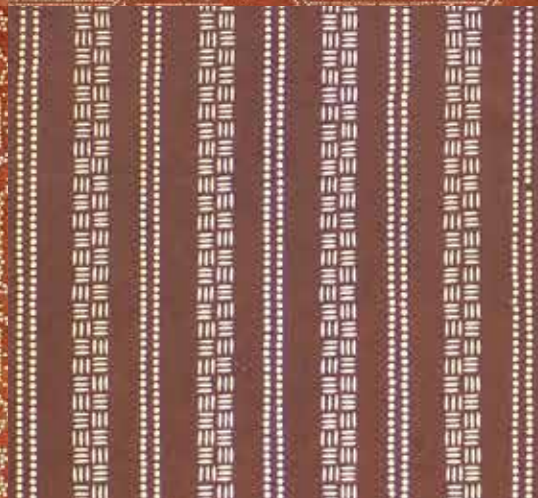
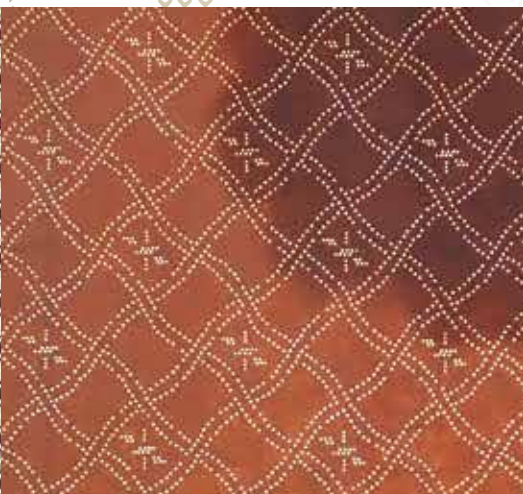
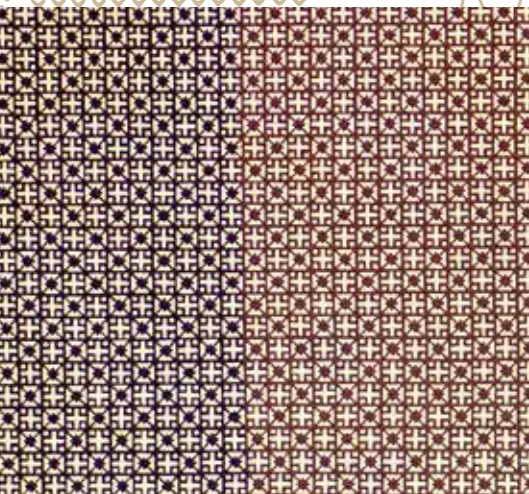


浜松市

報告書

〔事業報告編〕
〔資料編〕

相曽形染機械 関係資料 共同研究 染色



はじめに

本報告書は平成28年（2016）、株式会社相曽形染から浜松市博物館へ寄贈された約18,000点におよぶ機械染色関連資料に関する共同研究の成果である。本研究は静岡文化芸術大学と浜松市博物館の協定（覚書）に基づき平成29年（2017）から始まった。浜松市博物館が所蔵する染色関係資料を本学に運び込み、毎週水曜日に学生たちがボランティアとして資料整理に従事してくれた。その調査結果の中間報告として大学の西ギャラリーや市民ミュージアム浜北で展示を開催するなど、内外に資料の価値と活動の意義を発信することに努めた。

本研究は本学の教員特別研究費の助成を受け、その成果を世に問うべく編集された一書である。静岡文化芸術大学の研究費から支出された「事業報告編・資料編」と、浜松市博物館から「論考編」が刊行され、2分冊の構成となっている。本学内外の研究者による調査と研究の知見を集めて刊行された本書であるが、資料整理は道半ばであり、令和7年（2025）3月現時点での経過報告という性格を帯びていることをご理解いただきたい。

本研究と資料整理プロジェクトは元静岡文化芸術大学の立入正之先生が立ち上げ、令和5年（2023）から同大学の田中裕二が引き続き、同大文化政策学科の四方田雅史先生、デザイン学科の荒川朋子先生、新妻淳子先生、非常勤講師の星野順啓先生、青山学院大学の天内大樹先生、武庫川女子大学の加茂瑞穂先生、静岡県労働者福祉基金協会の富田晋司先生の研究分担者による。その中でも浜松市博物館の元館長の栗原雅也氏は、本共同研究の立ち上げから資料整理に従事する学生たちへの指導に至るまで中心的な役割を担い、本報告書の刊行も同氏の存在なくては実現できなかった。本書の編集執筆は栗原氏に加え、浜松市博物館学芸員の鈴木奈々氏にご担当いただいた。記して感謝申し上げる。

最後に、本研究報告書「事業報告編・資料編」並びに「論考編」を通じて、染色型紙が持つ価値と意義を共有して、文化財として認識され、保存と活用について考えるきっかけになれば望外の幸せである。

静岡文化芸術大学
文化政策学部 芸術文化学科
研究代表 田中裕二

例 言

本書は、「浜松市と静岡文化芸術大学との相互協力及び連携に関する協定書」に基づき「浜松を結実点とする機械染色型紙の近代産業と美術における重要性の研究 ―国内外の影響を探る―」（研究代表 元静岡文化芸術大学教授立入正之、平成29年（2017）から令和5年（2023）3月まで、静岡文化芸術大学准教授田中裕二、令和5年（2023）4月から令和7年（2025）3月まで）と題した教員特別研究費により実施した、静岡文化芸術大学と浜松市博物館の共同研究の報告書である。

本書は、「事業報告編・資料編」（静岡文化芸術大学刊行）と「論考編」（浜松市博物館刊行）の2分冊よりなる。

本書に掲載した「株式会社相曽形染機械染色関係資料」は全て浜松市博物館の所蔵資料であり、掲載資料目録には収蔵資料番号を表示した。

研究に参加し、資料の調査整理を推進した静岡文化芸術大学の学生諸君の名簿を巻末に掲載し、熱意あふれる活動に敬意を表する。

「事業報告編・資料編」の執筆者は次のとおりである。

事業報告編 1 章、3 章、6 章	鈴木奈々（浜松市博物館学芸員）
事業報告編 2 章、8 章－3	田中裕二（静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科准教授）
事業報告編 4 章、5 章	鈴木奈々、栗原雅也（浜松市博物館元館長）
事業報告編 7 章、8 章－1・2、資料編	栗原雅也
掲載作品写真撮影	栗原雅也、高嶋直人

目 次

【事業報告編】

第1章 「株式会社相曽形染の機械染色関係資料」の寄贈経緯とカゴヅケに関わる資料群の概要 …	1
第2章 共同研究の概要と経緯	7
第3章 浜松の機械捺染とカゴヅケ	11
第4章 調査整理作業	13
第5章 型紙の修復	17
第6章 展覧会開催報告	22
第7章 マスコミ取材	29
第8章 工場見学	29

【資料編】

第1章 カゴと型紙	35
第2章 図案と絵刷	56
第3章 彫刻師の道具	63
第4章 カゴヅケの製品	67
第5章 柄と彫刻技法の分類	73
第6章 書き付けの分類と集成	90
第7章 商印の分類と集成	98
第8章 掲載作品目録	102

第1章 「株式会社相曽形染の機械染色関係資料」の寄贈経緯とカゴヅケに関わる資料群の概要

1. 株式会社相曽形染の機械染色関係資料

(1) 株式会社相曽形染の機械染色関係資料の寄贈経緯

本書で紹介する資料は、現在の浜松市中央区野口町に所在した株式会社相曽形染（以下「相曽形染」とする）のカゴヅケに使用されたカゴや型紙、型紙彫刻の資料、製品を中心とした資料群である。

平成28年（2016）9月、浜松市博物館に相曽形染のカゴヅケの型紙の保存について、繊維業関係者から相談を受け、詳細を聞くため相曽形染へ連絡を取り、資料の確認を行った。

相曽形染があった敷地に染色工場は既になく、間口2間、奥行き4間ほどの倉庫が片隅に建っていた。倉庫内には、木製の平箱や段ボール箱の中、包装紙に包まれるなどして型紙が収納されていた（1-1～4）。箱に収納されていたものはカゴを作るために使用された型紙であり、包装紙に包まれていたものは、商印や検印が捺された伊勢型紙、「籠付用」「籠付 手付 両用」「手付 籠付 両用」といった書付のある型紙、大正11年（1922）の「都新聞」、昭和11年（1936）の「三重県商工時報」が見られた。

相曽形染から受け入れた資料の大半は型紙であり、その数18,110点。型紙は大正期から昭和の戦前までのものと昭和20年代から50年代前半までのものに大きく分けることができる。その他は、カゴ（籠、籠）11点や、図案、ハギレ、メモなどがある。

(2) 相曽形染の概要

相曽形染は相曽光太郎が創業し、昭和8年（1933）から平成24年（2012）まで、小幅織物の加工やカゴヅケによるマンガ加工で「浜松白緋マンガ」を製造していた染色工場である。

光太郎は、大正4年（1915）、15歳の時に東京府南足立郡湊江村六月（現在の東京都足立区）の竹村形付工場で修行をした。竹村形付工場の竹村松三郎は日本形染の糊付機の開発者、池谷七蔵の門下であり、イギリスより技術を導入し、捺染ロール彫刻法エッチングを真鍮板に応用し、取り入れていた。光太郎は竹村のもとでカゴヅケ加工技術を修得した（註1）。大正13年（1924）に日本形染株式会社（現在の浜松市中央区船越町）に入社、ローラー捺染機の彫刻部でローラー製作に従事。

丸福工場に招かれ、遠州地方におけるカゴヅケ加工技術を始めて実施し、機械染色の染緋の量産に成功（繊維復興協会1956）。その後、技術者不足により再び竹村形付工場に招かれている。

相曽形染工場設立後は、カゴヅケ加工によるマンガや米琉大島の製造で業績を上げた。戦災にあり、工場は焼失したが、戦後復興後は、昭和29年（1954）に新たなプレス彫刻機が完成し、新柄を白緋マンガに応用。そして、研究と改良を重ね「浜松白緋マンガ」を製造した。昭和35年（1960）に相曽武志が取り組んでいたウールマンガ加工が完成。同年に株式会社に改組した。また、麻織物の白緋の製品化にも至っている。

昭和60年（1985）にカゴヅケによる生産を中止し（池川2019）、平成24年に廃業した。

(3) カゴヅケに関わる資料群

(ア) 相曽泰子寄贈株式会社相曽形染の資料

相曽形染二代目社長であった相曽武志氏の妻である泰子氏寄贈の、林型紙彫刻所から昭和34年（1959）9月に納品された型紙の絵刷。



1-1 相曽形染の倉庫内の様子



1-2



1-3



1-4



1-5 株式会社相曽形染跡地

(イ) 鈴木啓仁寄贈株式会社相曽形染関係資料

相曽形染に勤めていた啓仁氏寄贈の、相曽形染のカゴヅケで染色された反物。啓仁氏は昭和25年(1950)から60年(1985)まで相曽形染で加工を専門としていた。

(ウ) 林茂寄贈林型紙彫刻所資料

相曽形染の使用する型紙のほか、手拭いや注染の型紙などを彫っていた林型紙彫刻所で使用していた型紙彫刻の道具類。林型紙彫刻所(現在の有限会社林スクリーン印刷)初代社長は、明治32年(1899)栃木県佐野の生まれで、足利で型紙彫刻を修業。東京で独立後、大正13年(1924)に現在の浜松市中央区馬込町にあった西遠染色株式会社(現在の大和染工)に呼ばれた。大正末期頃から昭和13、14年(1938、39)頃まで林型紙店を開く。昭和26年(1951)頃に林型紙彫刻所、昭和58、59年(1983、84)頃から現在の有限会社林スクリーン印刷となる。林氏は昭和26年から彫刻所で働き始めた。

(エ) 竹内重行寄贈型紙彫刻資料

元林型紙彫刻所の型紙彫刻職人であった竹内重行氏が使用していたコホンほか、型紙彫刻の道具。現在は画家として活躍。

(オ) 三幸株式会社寄贈資料

三幸株式会社(現在の浜松市中央区卸本町)から寄贈された反物。三幸は、遠州織物産地の卸売商として注染の浴衣や手拭い反物を扱う、浴衣やリネン資材の卸売商社であり、相曽形染の製品も取り扱っていた。昭和5年(1930)に現在の浜松市中央区馬込町で綿布業を創業。戦後は三幸商店とし、昭和25年(1950)、浜松市中央区板屋町に移転、株式会社三幸商店へ改組、昭和25年に現在の名称に改称した。

(カ) 煙山稔寄贈株式会社煙山形染関係資料

株式会社煙山形染(現在の浜松市中央区丸塚町)で染色加工された製品。創業者の煙山勝浩は相曽光太郎とともに竹村形付工場で修行し、昭和20年(1945)に有限会社煙山形染(現在の浜松市中央区馬込町)を創業(のちに株式会社に改組)。寄贈者である煙山稔氏は型紙やカゴの製作を行っていた。

(キ) 鈴木福一寄贈資料

平成3年(1991)、舞阪郷土資料館に福一氏から寄贈されたカゴになる前の真鍮の型とカゴ、銅線。福一氏は現在の浜松市中央区舞阪町舞阪でカゴの製作をしていた職人。真鍮板はロール機で筒型にしてハンダ付けをし、筒の両端に歯車をつけカゴにする。

【註】

- 1 株式会社相曽形染『浜松特産 白緋マンガ』パンフレット(発行年不明)

【参考文献】

- 栗原雅也 2019「浜松の機械染色史概観」『浜松市博物館特別展浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館
- 池川恵子 2019「相曽形染の思い出～相曽泰子一人語り～」『浜松市博物館特別展浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館
- 繊維復興協会 1956『遠州織物発達史』
- 三幸株式会社ホームページ「会社概要」<http://www.sankoukk.com/company/#history> (令和7年3月8日確認)

(ア) 相曾泰子寄贈株式会社相曾形染の資料



1-6 絵刷り



1-7

(ウ) 林茂寄贈林型紙彫刻所資料



1-8 型紙之通 (型絵刷り)



1-9



1-10 突き彫り板



1-11 彫刻刀



1-12 定規



1-13 布地見本

(工) 竹内重行寄贈型紙彫刻資料



1-14 型紙、おもり、彫刻刀

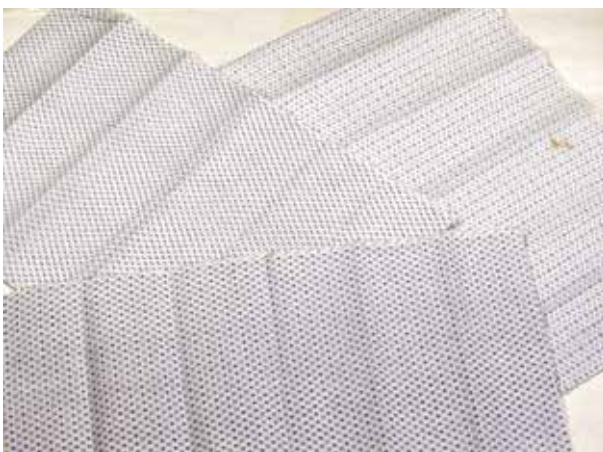


1-15 絵刷り



1-16

(才) 三幸株式会社寄贈資料



1-17 白緋

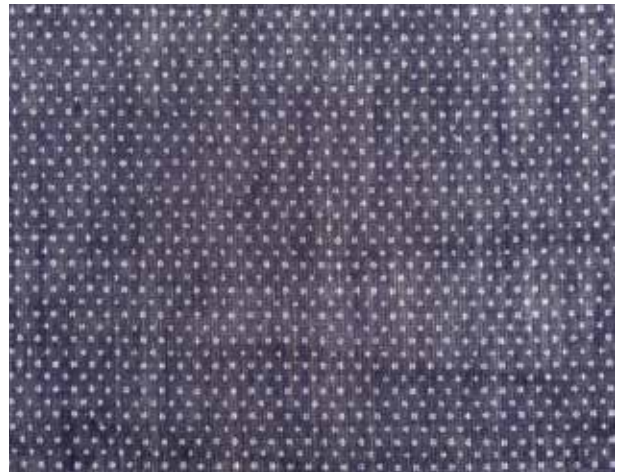


1-18 布見本

(カ) 煙山稔寄贈株式会社煙山形染関係資料



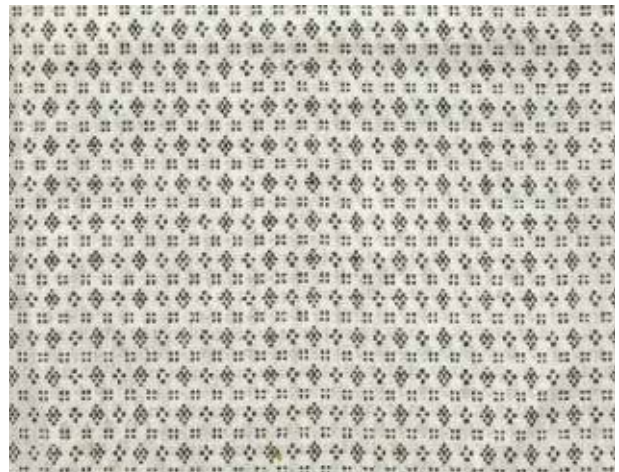
1-19 ウール着尺



1-20 綿着尺



1-21 半纏（横縞）



1-22 白紵の浴衣

(キ) 鈴木福一寄贈資料



1-23 真鍮ドラム



1-24 真鍮板

第2章 共同研究の概要と経緯

1. 研究の背景

浜松市が相曽形染より寄贈を受けた機械染色関係資料について、浜松市と静岡文化芸術大学が覚書を締結して、大学で共同研究のため一時保管している。これらの型紙は、戦前・戦後の希少な型紙を中心に、浜松で培われた機械染色の技法と意匠を解き明かすことができる資料群である。さらに、膨大な量の型紙を類型化し、デザインを彫刻、技法、製品、流通といった視点から、デザイン史、産業史、技術史といった学際的な研究が求められる。そして、地場産業の歴史を記録し顕彰することによって、急速に失われつつある近現代資料の保存と継承のモデルケースとなり、シビック・プライド醸成に資する可能性を秘めている。

2. 研究の目的

地場産業として浜松の繊維染色産業の発達と歴史は年表などで辿れるが、浜松の染色の「技法、デザイン、流通」についての学術的調査は、本学特別研究費（平成29年度～令和3年度）を得て初めて着手されたと言っても過言ではない。この共同研究が開始される以前は、体系的にまとまった成果に乏しく、史料も散逸した状態であった。本研究は、浜松における染色型紙を彫刻と染色の技法、デザイン、製品と流通の面から分析し明らかにすることに加え、いまだ保存や保管方法が確立していない型紙の修復方法を検証し、型紙を所蔵する国内外の大学や博物館施設等のネットワークを構築することを目指した。

（1）「型紙のデザインと流通」

染色の型紙といえば「伊勢型紙」が有名である。浜松のカゴヅケの型紙は、浜松の型紙彫刻師によって制作された。「型紙地」は、美濃和紙を柿渋で貼り合わせたもので、彫刻技法の多くは、半円形の刃先の彫刻刀で、大小の丸い穴を彫る「錐彫り」と、長短の紡錘形を彫る「道具彫り」の2通りある。

染色型紙について、京都工芸繊維大学や立命館大学アート・リサーチセンター、鈴鹿市、東北歴史博物館、東北生活文化大学等の研究者によって進められ、各地域（地方）の技法やデザインには触れているものの、デザインの類型化や全国規模かつ浜松と遠州への流通や因果関係は明確になっていない部分が多い。

（2）「型紙関連資料の収集」

型紙の研究は柄や類型化を行うことが従来の研究方法であるが、関連資料とりわけ当時の絵葉書や雑誌、引札、注文書など、地域博物館が所蔵する歴史資料の所在調査は行われておらず、デザインの特徴や製品としての流通を明らかにするだけに留まらず、生活の中で受容されてきたことを検証するために不可欠であるが、まだ収集の途上にある。

（3）「型紙資料のアーカイブ化」

立命館大学アート・リサーチセンターに収蔵された型紙は劣化が進んでおり、デジタル・アーカイブ化を進めるに際し、破損が懸念されたため修復が施された。型紙の修復方法は確立された訳ではなく、静岡文化芸術大学と立命館大学の共同で型紙の修復方法を試行錯誤しながら実践を試みた。詳細

は本論をご覧いただきたい。本書が国内外の大学・博物館等で保管されている型紙の、長期保存の一助となれば幸いである。

3. 研究の方法

(1) 「学内保管資料（史料）の整理」（令和3年度より継続実施）

「文献等参考資料の収集」（令和4～6年度）。

寄贈資料を、版元、時期、製作者に分けて整理し、資料の保存整理に努めるとともに、調査に用いる型紙情報の抽出を実施。データベース化も視野に入れて資料の情報を調査カードに記入する作業を続けた。

(2) 「染色関係者へのインタビュー」

「カゴヅケの発展段階の解明」（令和4年度～6年度）。

主に浜松市内にご存命の、染色職人（技師）へのインタビューを実施し、資料データとの照合をおこない、その利用状況の実態を把握することに努めた。なお、相曽形染より提供を受けた文書資料には従業員の所在を示すものも存在する。

(3) 立命館大学アート・リサーチセンター

2016年に大量の型紙が収蔵されてから資料整理とデータベース化を推進してきた。保管している型紙の保存方法、博物館資料として永く保存・保管・公開まで一連の流れでアーカイブ化のノウハウを共有。

4. これまでの研究活動

浜松の町工場で使用された機械染色型紙は、産業史の中での位置付けが定まっておらず、長期保存の方法や文化財として認識されていなかったため、適切な保存環境で保管されていなかった。相曽形染から寄贈を受けた染色型紙も同様で、ほぼすべてに汚れや黴が見られ、半数以上は折れ曲がったり破れるなど、保存状況が良好とはいえず、調査の前に熨蒸をする必要があった。

2020年度（令和2）はコロナ禍により活動が大きく制限されたが、経年劣化した型紙の修復と保存も不可欠であるため、洗浄と修復作業を同時に実施し、その成果を口頭発表や展示会で報告をおこなってきた。またヨーロッパ美術とジャポニスム研究の中で、染色の型紙を所蔵する海外の機関や、研究者との協力も検討した。以下、これまでの研究活動で主なものを掲載する。

- ①立入正之「染色型紙の模様、唐草に見る浜松の美」（浜松市博物館展覧会図録『浜松の染色の美』、平成30年）。19世紀ヨーロッパ版画における日本の影響を、その技法と模様（特にカラクサ）を中心に論じた。
- ②立入正之「型紙から見る浜松と遠州における染色の技法とデザイン」（口頭報告）。公開シンポジウム、静岡文化芸術大学、平成31年2月、パネラーは以下のとおり。



大学搬入時の資料（奥が丸められた型紙の束）

四方田雅史（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

天内大樹（静岡文化芸術大学デザイン学部准教授、令和5年4月より青山学院大学准教授）

富田晋司（公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会研究員）

加茂瑞穂（立命館大学アトリサーチセンター研究員、現在武庫川女子大学講師）

竹内重行（二紀会会員、日本美術家連盟会員、元型紙彫刻師）

栗原雅也（浜松市博物館元館長）

- ③立入正之「博物館と大学の連携について－浜松市博物館と静岡文化芸術大学の共同研究活動の成果報告を中心に」（静岡文化芸術大学研究紀要21号、pp.53-58、令和3年3月）

- ④「型紙修復展」パネル報告と「浜松の機械染色型紙」紹介展示

令和3年度より着手した型紙修復作業の進捗状況と重要性を紹介する展示会を実施した。

・令和3年12月1日～10日、会場は本学1階中央エントランスホール。

・令和4年9月～11月、会場：浜松市水窪民俗資料館、浜松市春野歴史民俗資料館、浜松市姫街道と銅鐸の歴史民俗資料館

- ⑤田中裕二「博物館と大学の連携 資料整理と展示、広報分野における教育と実践」全日本博物館学会 第49回研究大会。2023年7月2日（日）於國學院大學

- ⑥栗原雅也「機械染色『カゴヅケ』概観」（『浜松市博物館報』、2024年）

- ⑦田中裕二「地域博物館と大学の連携」（金山喜昭編『改正博物館で博物館はどうなる』所収、2025年）

5. 研究の展開

（1）研究資料（史料）の存在・確保

浜松市が相曽形染より寄贈を受けた、膨大な量の染色の型紙や器材の調査が本研究の発端である。浜松市博物館学芸チームとの共同調査・研究を平成29年6月より継続しており、コロナ禍の令和2年度以降も、可能な限り週1回大学に集まり、修復・整理作業を実施。令和7年現在、型紙と器材の一部を本学で調査保管中であるが、型紙の相曽形染創業者である相曽光太郎は、明治30年代、日本形染の創業とともにローラー捺染真鍮の型（型紙とともに現在本学で調査保管中）の彫刻部で修業をし、昭和初め独立した人物であることが判明した。型紙は、真鍮の型を作るための原型であることも調査の結果明らかとなった。また、戦前・戦中の型紙が含まれているが、日本形染創業以来の浜松の機械染めの技法とデザインの記録が含まれている。さらに、染色型紙の元彫師が浜松市内在住で、日本形染と相曽形染の創業当時の見本帳所有者の所在も判明しており、今後の調査次第では型紙のデザインや、彫刻、染色技法、製品と流通など、様々な展開が期待される。

（2）研究場所の確保

主たる研究場所は、大学内の教室や研究室である。静岡文化芸術大学の一室（面積約50㎡、照明装置および空調設備完備）を、本研究での長期使用許可を得て実施してきた。同室に研究史料と器材等備品を置き、調査研究をおこなっている。設備は、写真機材（光学機器）、照明機器、中性紙保管箱等を揃えている。また、型紙の修復用の機材、材料も常備している。

（3）研究協力者との密接な連携

本研究は研究協力者の栗原雅也（浜松市博物館元館長）が中心となり、学内外の研究者との研究協

力体制下で実施された。

①京都工芸繊維大学（美術工芸資料館にて、「京都における機械捺染研究」「京都の染色デザイン研究」を実施）

②立命館大学アート・リサーチセンター（「型紙を学術資料として位置づけた調査」「京都の近代捺染産業の軌跡の調査」を実施）の染色・型紙の研究者

上記2機関と合同調査、京都工芸繊維大学美術工芸資料館にて研究会議等をおこなった。コロナ禍で延期になったが、令和5年1月より、加茂瑞穂氏（立命館大学アート・リサーチセンター研究員、現武庫川女子大学講師）と、本学にて、共同調査・研究を再開。

③浜松の型紙に影響を与えた東北地方（主に宮城）と、北関東（主に群馬、栃木）における型紙調査と報告をおこなっている、平成30年に仙台における染色型紙の調査報告展覧会をおこなった東北歴史博物館との研究協力は今後の課題である。

なお、浜松における染色業の関係者として、型紙彫刻の林茂氏（旧林型紙彫刻所）、竹内重行氏（元型紙彫刻師）、カゴヅケ工場の相曽泰子氏（旧相曽形染）、染色技術の煙山氏（旧煙山形染）、さらに株式会社クロスリードの佐藤秀男氏（現存唯一のマンガン染め工場経営）には、継続的に研究協力及び調査を依頼している。

5. 研究の方向性

浜松および遠州地方の繊維産業における機械染色の歴史的経緯と特徴を明らかにし、特に、機械染色型紙の近代産業史の中に位置付けることが求められる。近畿、東北各地の大学や博物館等研究機関との研究連携も推進する必要がある。

染色型紙の技法とデザインは、その起源を京都と伊勢に見るが、江戸末期から明治初期にかけて遠州に多くの職人が集まり、製造が盛んになったという経緯がある。染色型紙の中核地域である京都と伊勢からの技法とデザインの流通を重視しつつ、関東・東北からの流通も勘案して、日本各地から東海へ型紙の相互交渉について解き明かすのが今後の課題である。本報告書は浜松の繊維・染色加工企業の「歴史と独自性」、全国各地との関係と「日本における重要性」を認識する契機とし、各地で眠る染色型紙のネットワーク構築とデータベースの公開によるシナジー効果を期待したい。

19世紀英国ジャポニスムに染色型紙のデザインが果たした役割について、英国ミドルエセックス大学建築デザイン博物館が所蔵する型紙コレクションを用い、英国の研究者と日本の研究者宮城学院女子大生活文化デザイン学科大久保尚子教授による研究が始まっている。（「型紙文様の可能性を考えるーロンドンに渡った江戸の型紙、東京に生きる型染めの水脈」日英芸術文化交流公開シンポジウム、於東京和晒創造館3階ギャラリースペースT3, 2018年12月1日）。ジャポニスムに代表される、国外への影響を追求することは大きなテーマであるが、本研究成果が公開されることで、国内外の型紙研究者のネットワークが構築され、型紙アーカイブ構築による研究の進展、そして文化財としての認識が高まることを願っている。

第3章 浜松の機械捺染とカゴヅケ

1. 機械捺染のはじまりと浜松

機械における捺染は、凹版型、凸版型や平版型（印刷式捺染機の類）や孔明型（ステンシル捺染機やスクリーン捺染機の類）などに分類され、型の形状には平面型や円筒型などの種類があり、運転方法や加工品の材質、形態などによっても様々な捺染機が考案されてきたが、最も広く用いられたのは、銅ローラーを使用した凹型円筒捺染機である（明石1943）。日本で導入された捺染機もこの種類のものであり、明治31年（1898）、京都の捺染工場を営んでいた堀川新三郎が、イギリスから捺染機を輸入し、モスリン及び綿ネルの捺染を開始したのが最初だとされている。その後、大阪、和歌山、名古屋、東京の染色会社も海外から捺染機を輸入し、機械捺染に取り組み、実用化していった。

浜松では、現在の浜松市中央区船越町の日本形染株式会社（以下「日本形染」という）が明治39年（1906）にイギリスから捺染機を2台輸入し、それまでのカゴヅケによる捺染から脱し、ローラー捺染機の採用に踏み切った（日本形染1920）。これより、浜松では大正期にいたるまで、機械捺染は日本形染がほとんど独占的に行うようになっていく。

当時、捺染工場はまだ少なく、多くの染色会社は捺染技術や彫刻技術を学ぶため、技術者を渡欧させたり、海外から技師を招聘したりし、技術者を養成した。日本形染も捺染機を輸入したが、熟練の技術者がいなかったため、京都から技術者を雇い入れ、その後、社内に彫刻部を設けた。

日本形染は、織緋の代用となるものを機械捺染の染緋でつくるため、着尺物の捺染に注力し、明治40年（1907）に「幾世紺緋」を完成させ売り出した。紺緋の柄が流行していた中、捺染機で大量に生産でき、安価で入手可能な幾世紺緋は好評を博し、他方でも機械捺染による緋や中形が生産されるようになっていった。



日本形染株式会社（昭和5年頃）
（浜松市立中央図書館蔵）

2. カゴヅケ

カゴヅケは、浜松町元城（現在の浜松市中央区元城町）の鉄砲鍛冶であった池谷七蔵が考案したとされる。それを当時、元城で丸三呉服店を経営していた宮本甚七が支援し、明治33年（1900）に日本形染の前身である木綿中形株式会社を設立した。池谷は明治33年に「片面形糊付機」、明治34年（1901）に「両面形糊付機」を考案した。それらは、模様を彫り抜いた真鍮の板を円筒状にし、それを回転させながら内側から糊を出して型付けをする仕組みである。「片面形糊付機」や「両面形糊付機」は、その後の文献資料では、「籠附捺染」（明石1943）や「円筒押出形付機」（山本1966）と呼ばれ、相曽形染創業者である相曽光太郎が修行していた竹村形付工場では、エッチングした真鍮の型を使用した機械を「形付機」と呼んでいた（註1）。

いつからカゴヅケという名称で呼ばれるようになったかは判然としない。相曽武志氏によると、相曽形染創業の昭和8年（1933）の頃には既にカゴヅケによる染色技法はあったが、名称については、戦時中の企業統合の際、籠のようになっているものを使う捺染機だから「籠染め」と名づけられたと



語っている（菊池1992）。しかし、寄贈された型紙の整理をする過程で、具体的な年代は不明だが、大正11年（1922）の「都新聞」が挟まっていた型紙資料群の中に「籠付用」「カゴ」「籠付 手付 両用」との書き付けがある型紙があったこともあり（栗原2024）、相曽形染の創業より以前から「カゴヅケ」という名は既にあったと考えられる。

【註】

- 1 株式会社相曽形染『浜松特産 白緋マンガン』パンフレット（発行年不明）

【参考文献】

- 菊池昌治 1983「遠州の籠染めの白緋－相曽形染・相曽武志さん」『月刊染色 a』26号 染織と生活社
- 栗原雅也 2019「浜松の機械染色史概観」『浜松市博物館特別展浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館
- 栗原雅也 2024「機械染色「カゴヅケ」概観」『館報』第36号 浜松市博物館
- 山本又六 1966『遠江織物史稿』遠江織物史稿刊行会
- 日本形染株式会社 1920『日本形染株式会社概覧』
- 明石厚明 1943『日本機械捺染史』日本捺染史刊行会
- 日本形染百周年記念誌編集委員 2000『日本形染百年史』日本形染株式会社

第4章 調査整理作業

1. 受入番号（資料番号）の体系

（1）浜松市博物館の受入番号（資料番号）のルール

受け入れた資料群は、まず年度の何番目に受け入れた資料であるかという数字で表す。次に資料の分類や受け入れ前の保管や帰属の状況を枝番号で示し、最後に資料1点毎の通し番号を与える。

「株式会社相曽形染の機械染色資料」は、2016年度の52番目に受け入れられた資料群であるので“2016-052”と表記する。

（2）「株式会社相曽形染の機械染色資料」と関連資料の受入番号（資料番号）

調査整理の進展とともに、かつての相曽形染の職人、型紙彫刻所の経営者や彫刻師、カゴヅケの産元（問屋）、染色工場の技術者の皆様からお話を伺い、資料を拝見し、それとともに様々な関連資料の寄贈を受けた。それらの受入番号を「株式会社相曽形染の機械染色資料」とその関連資料の受入番号（資料番号）一覧（4-1）にまとめた。

（3）「株式会社相曽形染の機械染色資料」の受入番号（資料番号）の体系

「株式会社相曽形染の機械染色資料」の内容はカゴヅケのカゴと、カゴを作るための型紙が主で、そのほかに図案や絵刷り、染色した布の端切れ、新聞紙などが型紙の間に挟まれていた。そこでそれらの分類番号をカゴは1、型紙を2、その他は3とした。

これらはかつての染色工場の敷地の一角に建てられた倉庫に収められていた。カゴは倉庫の隅の棚に並べられていた。型紙は、木の平箱や、家電製品の段ボール箱に入れられたり、束ねて丸めて包装紙に包まれたりして、棚に積まれていた。それぞれの箱や包みの型紙は分散しないように、他の箱や包みの型紙と混同しないように、箱番号という名称で管理することにした。さらにそれぞれの箱や包みの中には小分けした束が認められるものもあり、それには枝番号を付けることとした。

すなわち、“受入年度”-“受入順”-“分類番号”-“箱番号”-“枝番号”-“資料ごとの通し番号”となる。

例) カゴ : 2016-052-1-〇〇〇

箱番号1の型紙 : 2016-052-2-1-〇〇〇

箱番号25の中の小分けに挟まれていた図案

: 2016-052-3-25-〇-〇〇〇

以上により「株式会社相曽形染の機械染色資料」の受入番号（資料番号）の体系」（4-2）をまとめた。

2. 調査整理の方法

調査整理は、その大半を静岡文化芸術大学（以下「文芸大」とする）構内で、学生諸君が中心となつて行った。

（1）クリーニング

受入後、まず文芸大に搬入し、刷毛で埃や虫の死骸、クモの巣などを払い落とした。次に博物館内で、虫、カビの危険を減殺することを目的としてガス燻蒸を行った。薬剤はエキヒュームSを使用し、包み込み方式の燻蒸である。

4-1「株式会社相曽形染の機械染色資料」とその関連資料の受入番号（資料番号）一覧

受入番号	受入先	受入名称	内容	数量
2016-052	(株) 相曽形染	株式会社相曽形染の機械染色資料	カゴヅケのカゴ、カゴを製作する型紙、型紙の図案など	約19000点
2017-011	個人	株式会社相曽形染の機械染色資料	絵刷り	1冊
2017-012	個人	株式会社相曽形染の機械染色資料	白緋の布地	1枚
2018-023	個人	林型紙彫刻所の道具	小本、彫刻刀他、型紙彫刻の道具	704点
2018-007	個人	型紙彫刻資料	コホン他、型紙彫刻の道具	1147点
2019-006	三幸（株）	三幸株式会社寄贈資料	白緋反物、ハギレ	5点
2019-007	個人	煙山形染の製品	絹、ウール、綿の着尺、白緋の浴衣など	11

4-2「株式会社相曽形染の機械染色資料」の受入番号（資料番号）の体系

受入番号	種別	箱番号	枝番号	資料番号	年代、種類	数量
2016-052	1			1～58		58
	2	1		001～362	1950年台以降（戦後）	362
		2		001～211	1950年台以降（戦後）	211
		3		001～227	1950年台以降（戦後）	227
		4		001～272	1950年台以降（戦後）	272
		5		001～119	1950年台以降（戦後）	119
		6		001～135	1950年台以降（戦後）	135
		7		001～118	1950年台以降（戦後）	118
		8		001～233	1950年台以降（戦後）	233
		9		001～131	1950年台以降（戦後）	131
		10		001～314	1950年台以降（戦後）	314
		11		001～2416	1950年台以降（戦後）	2416
		12		001～3230	1950年台以降（戦後）	3230
		13		001～440	1950年台以降（戦後）	440
		14		001～520	近代のものと思われる型紙	520
		15		001～405	近代のものと思われる型紙	405
		16		001～1976	1950年台以降（戦後）	1976
		17		001～1089	近代のものと思われる型紙	1089
		18		001～384	近代のものと思われる型紙	384
		19		001～333	近代のものと思われる型紙	333
		20		001～1174	近代のものと思われる型紙	1174
		21		001～25	1950年台以降（戦後）	25
		22		001～630	近代のものと思われる型紙	630
		23		001～603	近代のものと思われる型紙	603
		24		001～340	近代のものと思われる型紙	340
		25		001～528	近代のものと思われる型紙	528
		26	1～6	001～	1950年台以降（戦後）	807
		27	1～5	001～	1950年台以降（戦後）	396
		28	1～4	001～	1950年台以降（戦後）	379
		29	1～7	001～	1950年台以降（戦後）	308
		30		001～003	1950年台以降（戦後）	3
		31	3	001～002	1950年台以降（戦後）	2
	3	1		001～004	図案、端切れ	4
		3		001	メモ	1
		4		001～002	チラシ、メモ	2
		5		001～038	図案、端切れ、チラシ、他	38
		8		001～003	メモ、カレンダー	3
		9		001～004	図案	4
		10		001	メモ	1
		12		001～002	図案、メモ	2
		13		001～003	新聞紙	3
		16		001～038	図案、メモ、端切れ、他	38
		17		001～013	図案、紙の帯、他	13
		19	1～8	001～	包装紙、新聞紙、チラシ	8束
		20		001～003	図案、紙の帯、新聞紙	3
		21		001～012	図案、端切れ	12
		23		001	図案	1
		25		001	新聞紙	1
		26	1～5	001～	新聞紙、包装紙、メモ	6
		27		001	メモ	1
		28	1～4	001～	新聞紙、カレンダー	4
		29	1～7	001～	新聞紙、包装紙	7
		31	1～3	001～026	地紙	166
		32		001～003	マンガン染の反物、包装紙	2
		33		001	新聞紙	1
		34	1～12	001～	新聞紙	13束

(2) マーキング

マーキング（ナンバリング、注記）は全ての作業のスタート地点であり、わかりやすく、読みやすく、しかし展示することも見越して目立たず、そして保存のためには消えないように書くことが原則である。カゴは歯車の裏側に、製図ペンと黒インクで記入した。型紙、コホン、図案、絵刷りは原則裏側の右下に、白のポスカ極細で記入した。新聞紙やメモ、彫刻刀などは材質や用途、資料性、活用方法などを考慮し、ペンとインクまたはポスカで、適切な場所に記入した。着物、反物、端切れなどの布地には、長さ5cm程の白いバイアステープに黒のマジックで番号を記入し、適切な場所に糸で縫い付けた。

(3) 台帳作成

A4、135kg上質紙で調査カード（4-3）を作成した。項目は文様の分類、彫刻の技法、書き付け、寸法などで、観察、計測を行った。文様は類型（パターン）と、それを構成する要素に分け、図鑑や文献を参考として記録した。文様の分類、彫刻技法、書き付けについては資料編で解説する。

(4) 写真撮影

型紙はコピースタンドを利用して、デジタル一眼レフカメラで撮影した。トレース台を撮影台として設置して、下からの照明も利用して撮影した。上下の照明のバランスが困難であった。

カゴ、着物と反物、彫刻刀や彫刻台といった彫刻師の道具など、立体物は文芸大の撮影スタジオを借用し撮影した。

撮影したデータは受入番号（資料番号）で整理し、パソコンに保存した。

3. 収納

マーキングが済んだ資料は、受入番号と箱番号ごとに、型紙と、図案や絵刷りなどは文書保管用の中性紙の箱に収納し、カゴや彫刻の道具などは形状、大きさに応じて段ボール箱に収納した。

(1) 文書保管用の箱

箱の大きさは次の2種類である。

縦730mm×横520mm×深さ155mm

縦1040mm×横735mm×深さ110mm

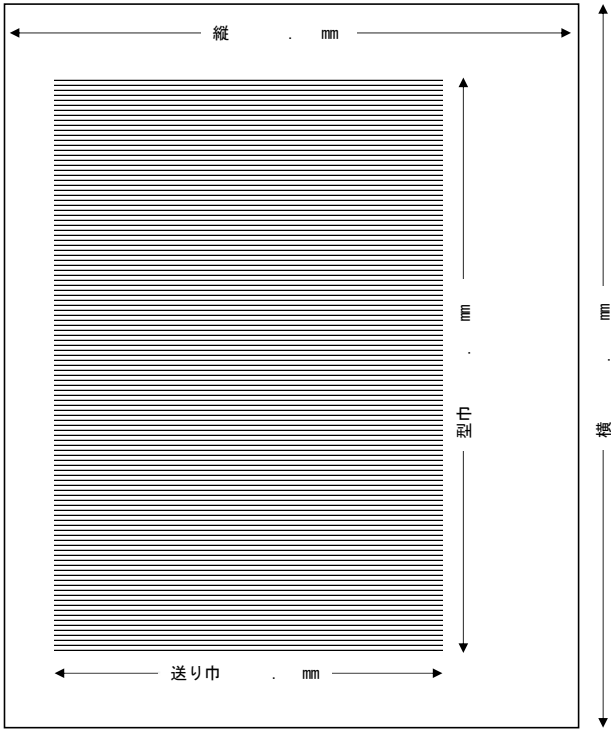
中形の型紙の大きさは、縦が650mm前後、横が450mm前後のため後者も用意したが、これは大きすぎた。大きく重いことは事故の誘因である。運搬の際に箱を傾けただけで、中の積み重ねた型紙が雪崩を起こし、劣化した縁が傷んだり、型紙同士が擦れて型が痛んだりしてしまう。とにかく箱を水平に持ち運ぶことがこれを防ぐ第一の手だてである。そして型紙を入れすぎないこと、さらに4、50枚ずつ薄葉紙を入れて簡単にくるむだけで安全性が高まる。

また見学にうかがった染色工場では、型紙は使わないと渋が抜けて劣化してしまうので、年に何度か出して風にあてていっていると言っていた。

4-3 調査カード

寸法・スケッチ・観察事項

寸法はmm表記で0.5mm読み



修復	傷み（有・無）	重度・中度・軽度	修復（要・否）
外周の劣化・外周の破れ・型の裂（キレ）・折れ・クセ（カール）			
その他（ ）			

機械染色の型紙調査カード

整理番号
登録番号 2016-052-2
資料番号

資料の総称 株式会社相曽形染の機械染色資料

資料の名称 型紙

文	種類	型	微塵柄・割付柄・連続柄・小紋・縞・絵画風 その他（ ）	
	構成要素		植物（ ）・動物（ ）・鳥（ ） 虫（ ）・器物（ ）・吉祥（ ） 空（ ）・地面（ ）・水（ ） 琉球絟（ ） その他（ ）	
	柄の名称			
	型の名称			
彫刻技法	彫刻の過程	錐彫・突き彫り又は引き彫り・道具彫り（絟・棒）・道具彫り		
書き付け	ピン穴、紙縫り穴	有・無	割付線	有・無
	絵刷（下絵）	有・無	ホシ	有・無
	彫刻の補修	有・無	絵刷（見本）	有・無
	その他観察事項			
	番号	間屋	刃数	
その他観察事項	色数		送り	
	年号	昭和 、 、	彫刻所	
	その他書き付け、スタンプ、染料、彫刻の補修、絵刷、割付線、その他観察事項			

第5章 型紙の修復

1. 修復の経緯と方法

(1) 修復に至る経緯 箱番号14、15、17～20、22～25は、丸めて包装紙で包み、棚に重ねられていたものである。巻き癖がつき、小口の部分は劣化が進み、ほぐすことも躊躇する状態で、他の箱に収められていた型紙はマーキングや撮影が進む一方で、クリーニングにも手がつかない状態であった。そこで、①開く手だてをとること、②開く際に破損が進んでしまったり、劣化が著しく現状のままで保管することが困難であったりする型紙は修復をすること、③そのための準備や技術を習得すること、を目的として修復に取り組むこととした。

この報告現在で、全ての箱を開き、必要に応じてアイロンをかけ、巻き癖をほぐしてマーキングが終了し、保管箱に収納した。とはいえ修復ができたのは、修復が必要な型紙のごく一部にすぎない。これまでに修復した型紙は、箱番号17の中から161枚である。

(2) 先進事例と博物館の指導 (5-1)

修復の計画や修復材料と用具の準備から実践まで、「立命館大学型友禅図案・型紙における修復作業の実践と課題」(枝木ほか2017)の実践の記録を参考とし、加茂瑞穂氏から指導、助言をいただいた。

浜松市博物館学芸員には、学生に対し、糊を調製し、喰い裂き紙を作り、型の破れを繕い、劣化した地紙の縁を裏打ちするなど、実地で指導をいただいた。



5-1 裏打ち作業

(3) 修復の方法と材料、道具

①作業台：縦横90cm、厚さ2.5cmの合板を机の上に置き、広く平坦でゆがみのない作業環境とした。

②不織布：糊で接着しないので、修復作業や乾燥の際に型紙が作業台に貼り付いたり、吸い取り紙が型紙に貼り付いたりすることを防ぐため、型紙の大きさや修復範囲に合わせて大小に切って、型紙の下に敷いたり上から当てたりした。

③アイロン、アイロン台：家庭用の電気アイロンである。巻き癖をとるために使用した。

④霧吹き：劣化と乾燥で割れやすい型紙にアイロンをかけたり、折れ曲がった型紙を広げたりする際、湿気を与えるために使用した。日用雑貨で購入した霧吹きはノズルから水滴が垂れてしまい、型紙を濡らさないように注意が必要であった。品定めが必要である。

⑤タオル：霧吹きやアイロンがけの際の当て布として使用した。

⑥文鎮、ベニヤ板：修復した型紙を延ばして、乾燥させるために使用した。修復範囲が大きく文鎮だけでカバーできない場合は、大小のベニヤ板を当てて文鎮で押さえる。また修復を終えた型紙を乾燥場所に運ぶ際には大きなベニヤ板を運搬台とした。

⑦和紙：極薄手でロールの機械漉き和紙と、やや厚手の美濃和紙を使用した。前者は、劣化した型紙の周縁部の裏打ちに使用した。後者は、定規で押さえて水を含ませ長短のリボン状にちぎり喰い裂き紙を作ったり、ピンセットで繊維を引き出したりして、型の破れや割れの繕いに使用した。型の繕いは、彫刻された型を喰い裂き紙で埋めてしまわないことを原則とし、破れた型を喰い裂き紙や和紙

の繊維でつなぎ合わせることに努めた。しかし細かい彫刻がもろく複雑に痛んでしまっているような場合のみ、やむを得ず傷んだ範囲に極薄の和紙で裏打ちをすることとした。

⑧カッター、はさみ、カッターマット、スチール定規 (5-2)

⑨メチルセルロース：温水で溶き糊を作る。水質や水温に関する情報も記録から得ていたが、整えることができなかったためか粘りがでなかったり、時間とともに粘りが強くなったり、糊の状態が不安定なことが多かった。(5-3)

⑩電気ケトル

⑪ピーカー

⑫吸い取り紙：修復後乾燥させる際、修復した部分に当てて水分を吸収させた。当てる際には型紙に貼り付いてしまわないように、必ず不織布を挟まないといけない。

⑬刷毛

⑭筆

⑮面相筆：細かな糊付けや、喰い裂き紙を作る際に使用した。

⑯ピンセット

⑰トレイ：型紙の汚損事故を防ぐため、糊や水を入れた容器、筆やピンセットなど、作業の手元で使用するものをまとめて入れられる大きさで深めのトレイを用意した。

⑱拡大鏡：細かい修復作業に使用するために大きく自立するものを用意したが、慣れないことなので視覚と手元の動きの感覚が一致せず、あまり使用する機会はなかった。



5-2 和紙を必要な大きさに切る



5-3 メチルセルロースの糊を作る

2. 修復の実践と今後に向けて

傷みの著しい多数の型紙を前にして、どのような傷み、どの程度の傷みの型紙を修復し、どの程度までなら修復するほどの必要はないのだろうか。また修復するとなれば、周縁部のわずかな破れまで修復しないとイケないものだろうか。今後の保存、活用に与える影響を考え判断することは難しい。

(1) 破損、劣化した型紙の記録と修復の計画 (5-4)

破れたり、切れたり、欠損した部分、折れたりしわになったりした場所は調査カードの裏面の図にスケッチし、劣化し脆弱な部分は囲みや斜線で範囲を示した。修復が必要な箇所を認識し、修復の計画を立て、修復を記録することは、将来的なコンディション管理や、再度の修復が必要になるような際にも有用であろうと思われる。

(2) アイロンがけ (5-5、5-6、5-7)

巻き癖がある型紙に直接霧を吹き、タオルをあて、絹



5-4 修復の記録

やウールのようなデリケートな素材に使用する約150℃でアイロンがけを行った。直接霧を吹くことについては心配もある。まず墨書や印、スタンプ、絵刷りの染料などがにじんだりシミになったりしないかである。これまでの作業ではシミになったり当てたタオルに色移りしたりするようなことはなかった。シミが生じる要因としては、クリーニングが不十分で埃が残っている場合も考えられる。こちらはアイロン台や敷いたタオルがシミになることがあったので、作業前の観察の際には、埃が残っていないかということも重要な点検項目である。そして湿気を残さないように乾燥、養生をすることが大切である。

(3) 繕いと裏打ち (5-8、5-9、5-10)

前項の和紙の項で説明したとおりである。作業にあたり注意する点が三つある。まず必ず不織布をしくこと。作業台に型紙が貼り付くことを防ぐためである。次に裏表を取り違えないこと。全



5-5 縁が劣化し巻き癖がついた型紙



5-6 アイロンをかける

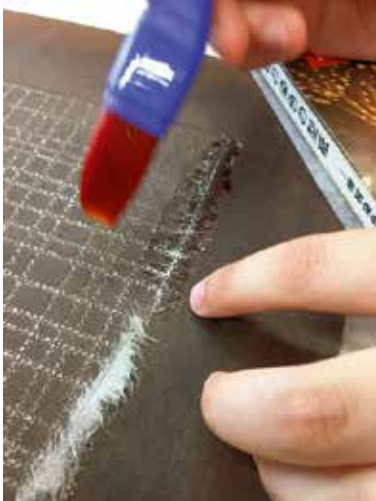


5-7 水を含ませた筆で折れ曲がりを治す

てマーキングした後に行っているものであり得ないことだが、まれに取り違えがあった。幸いメチルセルロースは水で簡単に溶かすことができるので、やり直しができた。もう1点はマーキングの段階での注意点である。周縁部の劣化が進んだ場所にマーキングをすると、その後の扱いの中でマーキングした部分が割れてしまい、資料番号がわからなくなるということが起こりかねない。それを防ぐために、結果的にはマーキングの上から裏打ちするということが何度かあった。極薄手の和紙ならばマーキングは透けて見えるが、しかしそのようなことは避けたい。マーキングだけでなく、型紙を取り扱う様々な場面で、コンディションには気を付けていきたいものである。



5-8 和紙の繊維で破れを繕う



5-9 喰い裂き紙で破れを繕う



5-10 劣化した縁を裏打ちする

(4) 乾燥と養生 (5-11)

アイロンがけや糊の水分が残っているので、吸い取り紙を当てて乾燥させる。その際にも必ず不織布を挟んで吸い取り紙をあてる。繕いの前に敷いた不織布のまま乾燥場所へ運ぶ。乾いて再び巻いてしまったり、波打ってしまったりすることを防ぐために、適当な大きさのベニヤ板と文鎮で押さえ、数日養生をした。

(5) 修復の課題

この章の始めに、これまでに修復ができた型紙は、修復が必要な型紙のごく一部にすぎないと述べた。修復が必要な型紙とはどのような型紙だろう。

クリーニングをしたりマーキングをしたりしていると、2、3枚の型紙を糸で綴じたものがしばしば見られる。色数ものや、一つの型を複数の型紙に分けて彫刻した遍数ものの型紙である。また糸で綴じてなくても、型を見て数ものの型紙の組み合わせであることがわかる型紙が重なり、連なっている場合も多い。また同型と思われる型紙が重なっていることもある。これらのような型紙は、書き付けも同じ番号や日付であったり、「二色」や「二遍」、「二枚彫り」などと書かれていたりする。これらのような型紙が綴じられていなくても連続して重なっているということは、束ねて収納されて以降バラバラにされることなく、収納時の状態を保っていると思われる。ひいては収納した人物がなぜ、何のために、どのように収納したのか、窺うことができるかもしれない。

これは一例ではあるが、一枚一枚の型紙を調査し整理することの必要性を示唆している。従って、丸まった型紙をほぐして、一枚ずつアイロンをかけ、傷みが著しいもの、そのままでは保存に耐えないものは修復をする必要があるということである。(5-12)

そうは言いながらも、何らかの傷みがあるものは全て修復を行うというのは現実的ではない。修



5-11 修復した部分に不織布と吸い取り紙を当て乾燥させる

復が必要な型紙に対する視点（基準ではない）の一つとして、型が破れたりちぎれたりしているものは修復をしてやりたい。持ち上げて全体がたわんだだけでも、細かい彫刻が割れて傷みが進行してしまう場合もある。視点の二として、書き付けや印、スタンプがある場所の傷みである。これは破れよりも劣化による割れが怖い、書き付けが判読できなくなっている場合もある。そして視点の三、周縁部分の著しい劣化である。書き付けが読めなくなるような例もあるが、取り扱うたびに細かい欠けが生じたり割れたり、そもそも全形が保てなくなってしまうので、修復は必要だと思う。

そして型紙の公開と活用を考えることが、保存と修復の大きな後押しになることを願いたいと思う。

【参考文献】

枝木妙子・金山正子 2016「立命館大学型友禅図案・型紙における修復作業の実践と課題」『国際ワークショップ「学術資料としての『型紙』－資料の共有化と活用に向けて」報告書』立命館大学アート・リサーチセンター



5-12 型紙を修復する



第6章 展覧会開催報告

共同研究期間中、中間報告として浜松市博物館（以下「博物館」とする）、博物館の分館、静岡文化芸術大学（以下「文芸大」とする）で展示を4回行っている。展示チラシ、ポスターは全て文芸大の学生が制作した。また、巡回展と「型紙修復」報告展では、学生が主体となり、テーマ設定や展示資料の選出、展示レイアウト、展示パネルの作成、展示作業に取り組み、そして、文芸大の会場で行われた展示では、期間中来場者の対応を行った。

平成30年度（2018）の文芸大と浜松市・市民ミュージアム浜北（以下「市民ミュージアム浜北」とする）で行われた巡回展示「浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－」は、資料整理開始時から携わった学生たちが参加し、これまで行ってきた整理・調査の中間報告と、その後に行われる特別展の先行イベントを兼ねて行った。その際、訪れた彫刻師の竹内重行氏に型紙の彫刻について話を聞くことができた。

同名の特別展では、寄贈された相曽形染資料のほかに、現存する型紙の中で最も古い型紙とされる「左縄目手綱」をはじめとした、伊勢型紙生産のまとまった資料である寺尾家関係資料「型紙」（鈴鹿市指定有形文化財）や、浜松市天竜区水窪町奥領家の紺屋だった守屋家のゆかりの型紙を借用（浜松市水窪民俗資料館蔵）。さらに、明治末期から大正期に縞と紺の図遠を手がけ「紺の技法」を考案した^{ふせつせん}布施結染に学んだ寺田哲郎の図案、立命館大学アート・リサーチセンターが寄託を受けている戦後から平成22年（2010）頃まで活動していた型染め業者の型紙コレクションを借用、展示した。関連事業のシンポジウムでは、設営、運営、管理は学生が行い、共同研究者に竹内氏を加え、講演とパネルディスカッションで多方面からの理解を深めた。

令和2年度（2021）「型紙修復」の報告展、「型紙レスキュー隊、始動。【機械染色の型紙】を保存修復する」では、型紙ではなく修復作業に焦点をあて、整理や修復作業の過程、なぜ型紙の整理事業に取り組んでいるのか学生たちの想いを計20枚の特大のパネルで示し、文芸大の中央ホールに並ぶ10本の柱を囲うように展示した。

令和3年度（2022）の巡回展「活躍、型紙レスキュー隊－浜松の機械染色の型紙－」は、令和2年度に行った「型紙修復」報告展の内容を踏襲している。この展示では、学生たちの修復の様子に加え、特別展でも展示された守屋家の型紙の中でも、静岡県指定有形民俗文化財になっている型紙を4点初公開し、守屋家のある浜松市水窪民俗資料館をはじめ、博物館の分館を3館巡回した。

(1) 平成30年度

■静岡文化芸術大学・浜松市博物館巡回展「浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－」

文芸大と博物館は、平成29年度（2017）からカゴヅケに使用された型紙を通して、浜松の染色の技法とデザインに関する共同研究を進めており、この巡回展は、学生を中心とした調査・研究の中間報告として実施した。

会 場 / 静岡文化芸術大学 西ギャラリー（6-1、6-2）

開催期間 / 平成30年 6月16日～7月1日

観覧者数 / 382人

会 場 / 浜松市・市民ミュージアム浜北 特別展示室（6-3、6-4）

開催期間 / 平成30年 9月8日～10月21日

展示作品 / 株式会社相曽形染の機械染色資料 型紙

（浜松市博物館蔵）

株式会社相曽形染の機械染色資料 カゴ

（浜松市博物館蔵）ほか

展示指導 / 立入正之、栗原雅也、佐野聖子（浜松市博物館学芸員）



■浜松市博物館特別展「浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－」

浜松のものづくりの根幹である繊維産業の中でも、寄贈された相曽形染の資料を中心にカゴヅケの型紙に焦点を絞り、近代から現代の機械染色の歴史を振り返った。（芸術文化振興基金助成事業）

会 場 / 浜松市博物館（6-5、6-6）

開催期間 / 平成31年 1月29日～3月3日

観覧者数 / 3,766人

展示作品 / 株式会社相曽形染の機械染色資料 型紙

（浜松市博物館蔵）

寺尾家関係歴史資料 型紙

（鈴鹿市教育委員会蔵/市指定有形文化財）

立命館大学アート・リサーチセンター型紙コレクション

（立命館大学アート・リサーチセンター蔵）

寺田コレクション 見本帳

（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）

ほか

展示担当 / 栗原雅也



関連事業

□シンポジウム「型紙から見る浜松と遠州における染色の技法とデザイン」

会 場 / 静岡文化芸術大学 講堂 (6-7、6-8)

開 催 日 / 平成31年3月9日

パネリスト / 四方田雅史 (静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

天内大樹 (静岡文化芸術大学デザイン学部准教授)

富田晋司 (公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会研究員)

加茂瑞穂 (京都工芸繊維大学研究戦略推進本部特別研究員)

竹内重行 (二紀会会員・日本美術家連盟会員)

栗原雅也 (浜松市博物館館長)

コメンテータ / 小針由紀隆 (静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

司 会 者 / 立入正之 (静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

※パネリスト、コメンテータ、司会者は当時の職位で表記しています。

参加者数 / 120人

□ギャラリートーク

会 場 / 浜松市博物館特別展展示会場

日 時 / ①平成31年1月29日、②2月2日、③2月16日、④3月2日

参加者数 / ①12人、②30人、③22人、④25人

(2) 令和2年度

■「型紙修復」報告展「型紙レスキュー隊、始動。【機械染色の型紙】を保存修復する」

博物館と文芸大が共同で研究に取り組む、染色型紙修復作業の報告展示。文芸大の学生が中心となった「型紙レスキュー隊」が修復に取り組み、その作業の成果の報告と型紙を展示した。

会 場 / 静岡文化芸術大学 エントランスホール (6-9、6-10)

開催期間 / 令和2年12月1日～12月10日

展 示 品 / 株式会社相曽形染の機械染色資料 型紙

(浜松市博物館蔵)

浴衣生地 (白緋) (浜松市博物館蔵) ほか

展示指導 / 立入正之、栗原雅也、久野正博



(3) 令和3年度

■静岡文化芸術大学×浜松市博物館 巡回展「活躍、型紙レスキュー隊－浜松の機械染色の型紙－」

前年度開催した、文芸大の学生による型紙の保存修復作業（レスキュー作業）の報告展の巡回展示。この展示では、修復作業の成果とともに、19世紀初頭に浜松市天竜区水窪町で藍染を営んでいた紺屋に伝わる型紙（県指定有形民俗文化財）のうち、4点を初公開した。

会 場 / 浜松市水窪民俗資料館（6-11、6-12）

開催期間 / 令和3年9月10日～9月28日

観覧者数 / 21人

会 場 / 浜松市春野歴史民俗資料館（6-13、6-14）

開催期間 / 令和3年10月1日～10月12日

観覧者数 / 16人

会 場 / 浜松市姫街道と銅鐸の歴史民俗資料館（6-15、6-16）

開催期間 / 令和3年10月28日～11月16日

観覧者数 / 215人

展示作品 / 水窪の型紙（個人蔵/県指定有形民俗文化財）

株式会社相曽形染の機械染色資料 型紙

（浜松市博物館蔵）ほか

展示指導 / 鈴木奈々、鈴木京太郎



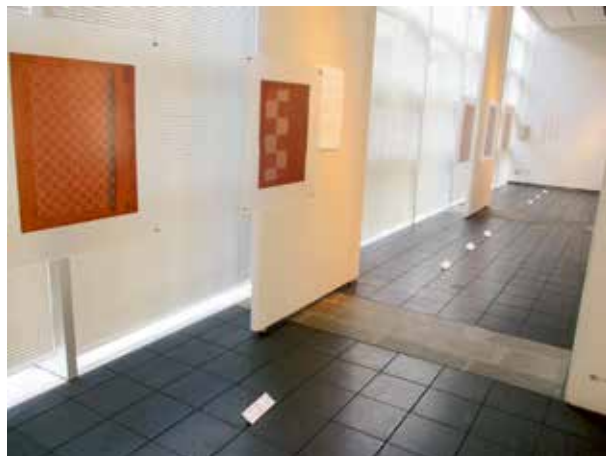


展覧会風景

静岡文化芸術大学・浜松市博物館巡回展「浜松の機械染色の型紙—機械染色の型紙を中心として—」（平成30年度）



6-1 静岡文化芸術大学 西ギャラリー 展示風景



6-2



6-3 浜松市・市民ミュージアム浜北 特別展示室 展示風景



6-4

浜松市博物館特別展「浜松の染色の型紙—機械染色の型紙を中心として—」（平成31年度）



6-5 博物館 特別展示室 展示風景



6-6 博物館 講座室 展示風景

特別展関連事業 シンポジウム「型紙から見る浜松と遠州における染色の技法とデザイン」（平成31年度）



6-7 文芸大 講堂



6-8

「型紙修復」報告展「型紙レスキュー隊、始動。【機械染色の型紙】を保存修復する」（令和2年度）



6-9 文芸大 エントランスホール 準備風景



6-10



6-11 浜松市水窪歴史民俗資料館 1階展示ホール 展示風景



6-12

静岡文化芸術大学×浜松市博物館 巡回展「活躍、型紙レスキュー隊ー浜松の機械染色の型紙ー」(令和3年度)



6-13 浜松市春野歴史民俗資料館 1階展示ホール 準備風景



6-14 展示風景



6-15 浜松市姫街道と歴史民俗資料館 2階特別展示室 展示風景



6-16

第7章 マスコミ取材

報道年月日		報道内容	社名	番組名、書名、ほか
平成30年 (2018)	7月20日	巡回展「浜松の染色の型紙」 浜松市市民ミュージアム浜北	R & M	
平成31年 (2019)	1月29日	浜松市博物館特別展 「浜松の染色の型紙」	静岡新聞	
	1月29日		中日新聞東海本社	
	1月31日		NHK静岡放送局	たっぷり静岡 み一つけた
	2月6日		浜松エフエム放送	JOY TO THE WEST (2月分)
	2月14日		静岡朝日テレビ	ニュース
令和3年 (2021)	3月10日	「特集型紙昨今 籠付型紙」	春夏秋冬叢書	季刊 そう 通刊70号 特集型紙昨今 飯田市の捺染工場、豊橋市の帆前掛型 紙とともに紹介
令和4年 (2022)	10月5日	巡回展 「活躍！型紙レスキュー隊」	浜松市役所広聴広報課	広報浜松9月号 巡回展の紹介とともに、カゴヅケや型 紙に対する学生の声も掲載
	10月13 ～15日		浜松ケーブルテレビ ウィンディ	型紙の修復作業と学生の声を紹介

第8章 工場見学

1. 日本形染株式会社

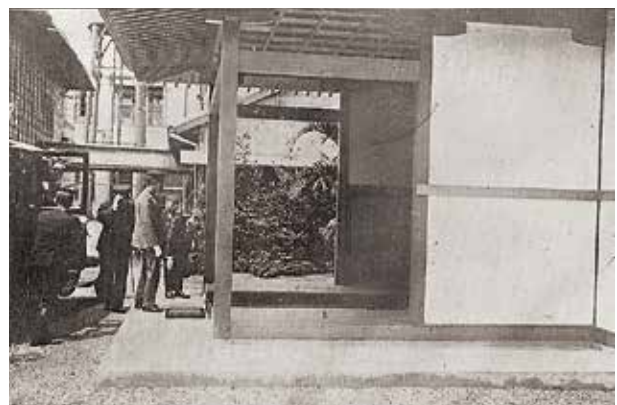
馬込川沿いの工場敷地に入ると、すぐ右側に「御便殿」と呼ばれる木造の建物がある。昭和5（1930）年、昭和天皇の巡覧を迎えた建物である。日本楽器製造株式会社、帝国製帽株式会社とともに、近代浜松の三大産業に数えられた日本形染株式会社を彷彿とさせる建造物である。

平成30（2018）年12月20日、日本形染株式会社を見学し、カゴヅケの誕生の歴史を感じるものがあった。ここでは日本形染株式会社の歴史を伝える「日本形染株式会社大要」（写真8-1～8-7）の紹介に替えたい。大正9（1920）年刊行の「日本形染株式会社概覧」はよく知られている。「日本形染株式会社大要」は奥付がなくはっきりとはしないが、記述からは昭和16（1931）年以降に編まれ、恐慌の時代から日中戦争、戦時統制経済下の日本形染株式会社が述べられている。

日本形染株式會社大要



8-1 工場全景



8-2 御便殿に着いた昭和天皇



8-3 ローラー彫刻の工場



8-4 ローラー彫刻の工場



8-5 捺染工場



8-6 浸染工場



8-7 工場全景

2. 中野形染有限会社

埼玉県越谷市の中野形染有限会社へは、令和元（2019）年11月2日、令和6（2024）年3月22日、11月22、23日の3回にわたりお話を伺い、調査を行った。中野形染の創業は明治41（1908）年、カゴヅケを始めたのは昭和10（1935）年頃である。創業者中野丑蔵が横浜方面の工場でカゴヅケを見学し、自ら機械を製作して始めたという。

写真8-8～8-21は、約2000本保管されているカゴである。中野形染のカゴヅケの特色は、裏変わりと言って表と裏、異なる柄のカゴを使用して、異なる柄を染めたこと（伊地知2015）で、カゴのエッチング、製作も自社で行っていた。3回目の見学では、110本のカゴの計測と撮影を行った。

【参考文献】

伊地知美知子 2015「籠付浸染の技法とその模様」『文教大学教育学部紀要』第49集文教大学



8-8 カゴの保管風景



8-9 紐で結ばれた裏変わりのカゴの組み合わせ



8
|
10

縦縞



8
|
11

縦縞



8
|
12

縦縞



8
|
13

格子縞



8
|
14

縞



8
|
15

格子縞と縦縞



8
|
16

割付柄
花柄



8
|
17

割付柄
紗綾形に二子山



8
|
18

割付柄
小紋つくし



8
|
19

連続柄
四季



8
|
20

連続柄
菊



8
|
21

連続柄
雪椿

3. 株式会社クロスリードが唯一のマンガン染色工場となるまで

新潟県の試験場がマンガン染色の技術を開発し、大正4年（1916）矢島丑松が新潟見附でマンガン染色に用いる「マンガン染め」を実用化した。大正時代に見附で生まれたこのマンガン染色の技術が浜松に伝えられ、浜松の特産といわれたマンガン白緋が「カゴヅケ」で生産された。高価な「織り緋」に比べて、手軽な「染め緋」としてマンガン白緋を中心に人気を博し、浜松、近江でも生産され、昭和の初め頃まで流行した。株式会社クロスリードの佐藤秀男社長によると、精緻な両面捺染を可能にした「カゴヅケ」は、繊維産業を背景とした金属機械の加工技術を持つ浜松だからこそ生み出された技術ではないかとみる。

マンガンで染めた糸と普通に染めた糸を織り上げて、中和剤をかけた糸だけ化学反応で白い糸に戻り、普通の糸は色がそのまま残る。その原理を利用して、マンガン染めの糸の織り込み方を工夫して柄のデザインを考案する手法。マンガン染色に酸化剤を糊付けすると黒く発色し、中和剤で糊付けすると白くなる。マンガンで先染めした糸で織った布に、酸化剤で糊付けした後に中和剤で処理すると、白地に黒い柄がつく。酸化剤はナフトールやアニリンなど種類は多い。マンガン染色の最初の目的は色を黒く抜くことだったという。

見附の繊維産業もかつては分業制で、多くの繊維産業従事者が存在した。小千谷縮や塩沢緋では、先染めの前の糸に撚りをかけたり、先染めした糸にさらに撚りをかけたりする撚糸の職があった。株式会社クロスリードでは、糸染、糸繰りから、織、染色、整理まで一貫して自社生産を行っている。かつての浜松がそうであったように、分業制を敷く繊維産業界では考えられないことだが、それは見附も同じで、繊維産業の再編、縮小のため止むを得ず行っている。しかも、現在は糸染めから織りあがりまで職人の技術が必要な工程は却って高価となり、後継者不足も相まって、現在では株式会社クロスリードが唯一のマンガン染め工場となってしまった。

浜松の「カゴヅケ」は糊の乗りがよく、ジワッとしっかり染まる。佐藤社長曰く、カゴを使った捺染は浜松で初めて見た。ズレがなく両面に捺染する技術は、優秀な金属機械加工技術がある浜松だからできたこと。両面を精密に染めることができる。そういった布の価値が理解されない時代になって、量産に負けてしまった。

株式会社クロスリードは平成16年（2004）7月13日の集中豪雨による水害から3ヶ月、工場が立ち直ろうとしていた矢先の同年10月23日中越地震に襲われ、工場も液状化現象により大きな被害を受けた。一時は廃業を考えたものの、浜松を始めとする受託産地から再建の要請と支援を受け立ち直った。支援の条件の一つがマンガン染めであった。同社の前身は広直産業株式会社と言い、先代社長は広井直治。クロスリードは現在、同じ見附にある浅記株式会社（明治2年創業）のグループ企業となり、マンガン染めの技術を絶やさぬように今でも定期的に機械を動かしている。

本クロスリードの頁は、令和4年（2022）11月24日（木）栗原雅也が実施した株式会社クロスリード工場見学と社長佐藤秀男氏によるインタビュー調査、令和6年（2024）9月9日（月）栗原雅也、田中裕二が撮影した画像を元に構成した。



8-3-1 銅製の柄が彫られたロールに塩化アニリン糊を用いて型置き、捺染する。



8-3-2 銅製のローラーと布の接地面積の距離や感覚は熟練の職人による作業



8-3-3 化学反応した布がモーターの動力によって上方に運ばれていく



8-3-4 中和剤で化学反応を起こした布の色が徐々に変わっていくが、早い段階で布におがくずをまぶす。



8-3-5 布にまぶしたおがくずによって、布の間に空気が入り、その空気によって糸の色の変化が進み、布の移染も防ぐ効果もある。



8-3-6 おがくずがついた状態だが柄ははっきりと浮き出ている。中段についた棒状のローラーが振り子のように動き、布が折り重なり蛇腹状に折りたたまれる。

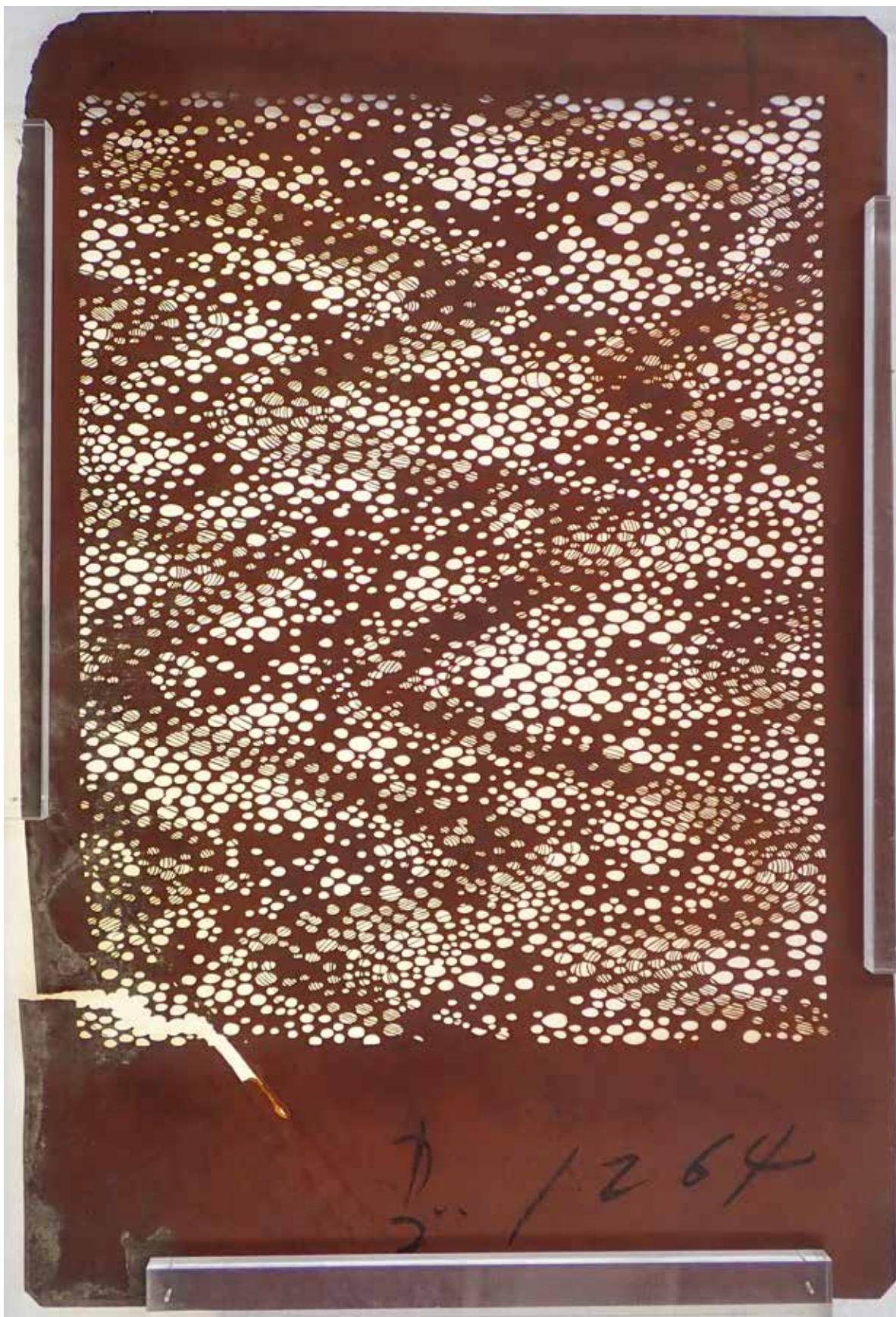


8-3-7 寝かせた布を温風で乾燥させる。



8-3-8 乾燥させたのち、亜硫酸ソーダ液に浸す。捺染した部分のみが残り、ほかは脱色する。







1-2



1-3



1-4



1-5



1-6

1. カゴ1264（写真1-1）

突き彫りで彫刻された流水である。流水紋様の間を満たす長円形の彫刻が水面のきらめきを想起させ、流水紋様の躍動感を感じさせる。大きく墨書された「カゴ1264」が、この資料群を象徴しているかのようである。

2. 菊慈童（写真1-15）

菊の葉に降りた露を飲んだ慈童が不老不死を得たという菊慈童の伝説を、一枚の型紙に彫刻したものである。慈童が持つ団扇と菊、菊の葉から流れ落ちる露を突き彫りで、光を四角の彫り口の道具彫りと錐彫りで表現する。

3. 雨上がり（写真1-16）

クモの巣に水滴が輝いているようである。雨で舞い落ちた木の葉も艶やかに揺れている。型紙の調査、整理を行った学生諸君が読み解いた、何とも爽やかなクモの巣の景色である。

4. カゴツケのカゴと型紙

カゴツケとは、型を透かし彫りしたカゴと呼ばれる真鍮製の円筒を回転させながら、内側から染色糊や防染糊を押し出し、小幅織物に連続的に柄（型）を糊付けする染色方法（機械）である。

真鍮板の透かし彫りは、型紙から転写した柄を薬品で腐食（エッチング）して彫刻する。型紙の大きさは、カゴ一つ分1枚の真鍮板に一度で転写できるものもあれば、一度ずらして（送って）2回転写する「二回送り」の型紙、二度送って3回転写する「二回半送り」と「三回送り」の型紙、三度送って4回転写する「四回送り」の型紙などがある。透かし彫りをした真鍮板は丸めてハンダ付けし、両端に歯車を付けるとカゴが出来上がる。

つまりカゴツケにおいての型紙は、真鍮板に型付け（転写）をするための道具であり、出来上がったカゴが手捺染における型紙に相当するといっていいただろう。いわば、職人が型紙とヘラで糊付けをする動作を、そのままカゴの回転に置き換えたといっても良いのではないだろうか。

以下に株式会社相曽形染のカゴと型紙を解説する。（表8-1、8-2、8-3）

5. カゴ

外周は487～489mm（一尺六寸）、歯車の端から端までの幅は457～458mmのもの（写真1-2、1-3、1-7、1-8）と、501mmのもの（写真1-4、1-5、1-9、1-10）がある。柄は絵画風（写真1-2）、割り付け柄（写真1-3）、微塵柄（写真1-4、1-5、1-7～1-10）である。

写真1-11～1-14は、透かし彫りをした平らな真鍮の板で、丸めていないカゴの未成品のようなものだが、大きさはどれも異なる。透かし彫りの縁は片面に突き出てい（写真1-11、1-13、1-14）たり、透かし彫りの周囲が圧されたように凹凸ができ（写真1-12）たり、突き出た透かし彫りの縁を擦り取ったかのような痕跡が観察できるもの（写真1-11の右半分、1-12）もある。エッチングによる透かし彫りではないようである。相曽形染創業者、相曽光太郎が書いた株式会社相曽形染パンフレット『浜松特産白緋マンガ』には、プレス彫刻機の研究開発を行ったことが記述されていて、それとの関わりも推察される。なお写真1-2～1-10のカゴには、このような痕跡は認められない。

6. 型紙を読む1

写真1-17～1-31は書き付けからわかるとおり、昭和29年から50年の型紙である。書き付けは“番号”“問屋”“年月日”“送りの手法”“遍数や色数”“染色方法や色”“彫刻所”が、この全ての項目で、



1-7



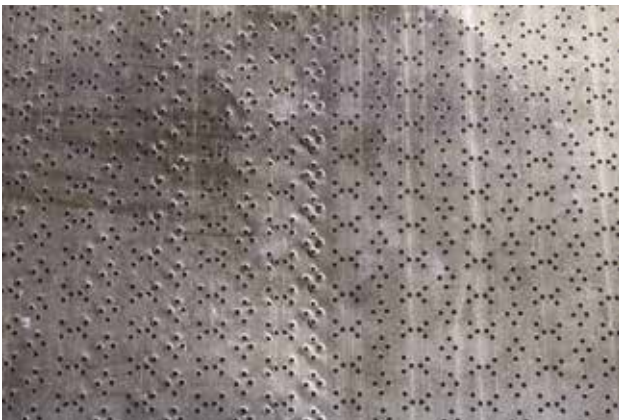
1-8



1-9



1-10



1-11



1-12



1-13



1-14

この順とは限らないが、ほぼ定型的に書かれている。これらの書き付けは、聞き取りによれば彫刻所で書かれたもののようである。

型の縁の両角近くに、送りの“ホシ”と言う、柄とは関係のない彫り込みがある。大半は錐彫りの丸い穴で、真鍮板に転写したり、丸めたりする時、柄がずれないようにする目安の穴である。そしてこのホシがある縁が型の上下、従って型紙の縦方向で、上下のホシとホシの間隔を“送り幅”、型の横幅を“型幅”と呼んでいる。写真は型の上下でレイアウトしているので、書き付けが横向きになっているものもある。

7. 型紙を読む2

この章の頭で既に“突き彫り”“道具彫り”“錐彫り”と呼んでいるように、彫刻技法は、浜松の彫刻所、彫刻師からの聞き取りでも伊勢型紙の“突き彫り”“道具彫り”“錐彫り”“引き彫り”と変わらないようである。しかし“縞彫り”と呼ばれる引き彫りは相曽形染の機械染色資料の型紙の中には皆無である。写真1-17～1-31は、錐彫りと「緋」という細長い紡錘形の彫り口の道具彫りで彫刻された、マンガン染色で緋柄を染め出すための型紙である。これらと同じ年台の型紙で、突き彫りと引き彫りの彫刻や、「緋」と「棒」以外の彫り口の道具彫りの彫刻はごくわずかである。一方写真1-32～1-41は、突き彫りと引き彫りの彫刻が目立つ。これらは浸染の糊付けのための型紙と思われる。

8. 型紙を読む3

写真1-1、1-15、1-16、1-32～1-41と同様の型紙は、箱番号14、15、17～20、22～25（事業報告編の表4-2）に収められている。これらの箱の型紙に年号が書き付けされた物は、マーキングを全て終えた現在確認していないが、型紙の年台を考察する幾つかの資料がある。

まず、江戸時代の終わりから近代にかけ、全国各地に型紙を流通した商人の商印が捺された型紙がある。「形甚仕入改」は伊勢白子の和田甚兵衛、「大伝馬二丁目亀屋」は江戸の亀屋儀右衛門（一戸町教育委員会1992）である。また「伊勢染型紙商業組合検査證」や「壹等印」といった同業組合等の検査印もあるが、団体の詳細はわかっていない。

次に、四寸送りの型紙が多いことである。箱番号17の場合、四寸送りから八寸五分の送りまで合わせて1087枚ある内、四寸と四寸二分の送りのものが596枚と半分以上である。型紙の送り幅は、江戸時代は四寸送りが多く、明治時代に入り五寸、八寸、一尺六寸と、次第に大きくなっていった（杉原1968）という。

三つ目に、箱番号18で1922（大正11）年10月27日付都新聞と1938（昭和13）年7月6日付け読売新聞、箱番号25で1928（昭和3）年10月18日付東京朝日新聞、箱番号17で1936（昭和11）年大幅が年5月15日付け、三重県商工時報、が挟まれていることを確認した。相曽形染工場の創業は1933（昭和8）年である。資料から考えられる型紙の年台の幅が江戸時代終わりから近代まで、このように広いのは、職人から職人へ、工場から工場へ、型紙が伝世されたことが考えられる。いつ頃使われたのか、いつまで使われたのか、まだわからないことばかりだが、写真1-1、1-15、1-16、1-32～1-41の型紙、また箱番号14、15、17～20、22～25の型紙を「近代のものと思われる型紙」と呼んでおきたい。

【参考文献】

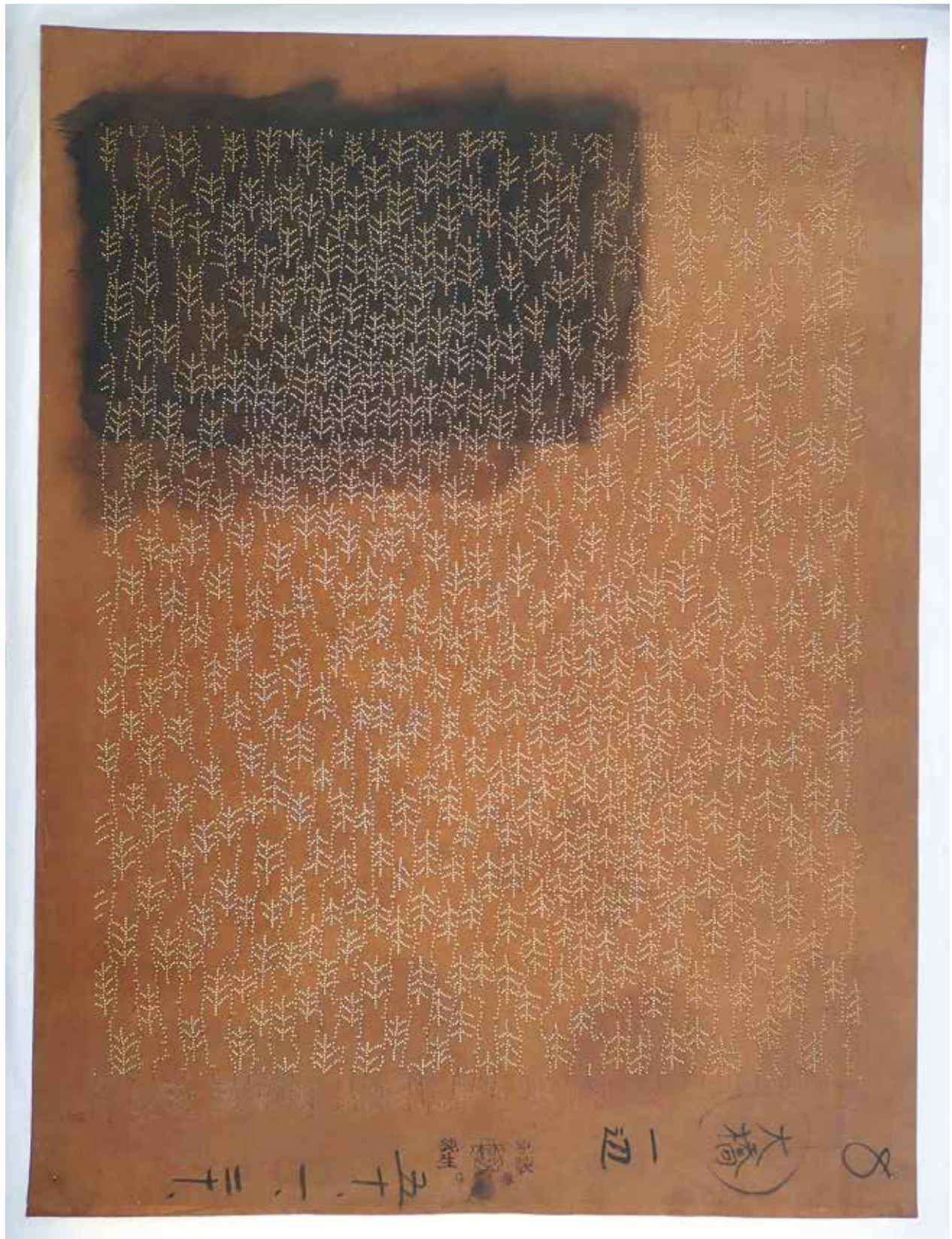
- 一戸町教育委員会 1992「一戸町文化財調査報告書第31集 いちのへの型紙」
 杉原信彦 1968「染の型紙」『染の型紙』京都国立博物館
 杉原信彦 1968「資料9 道具彫 彫り口見本」『染の型紙』京都国立博物館

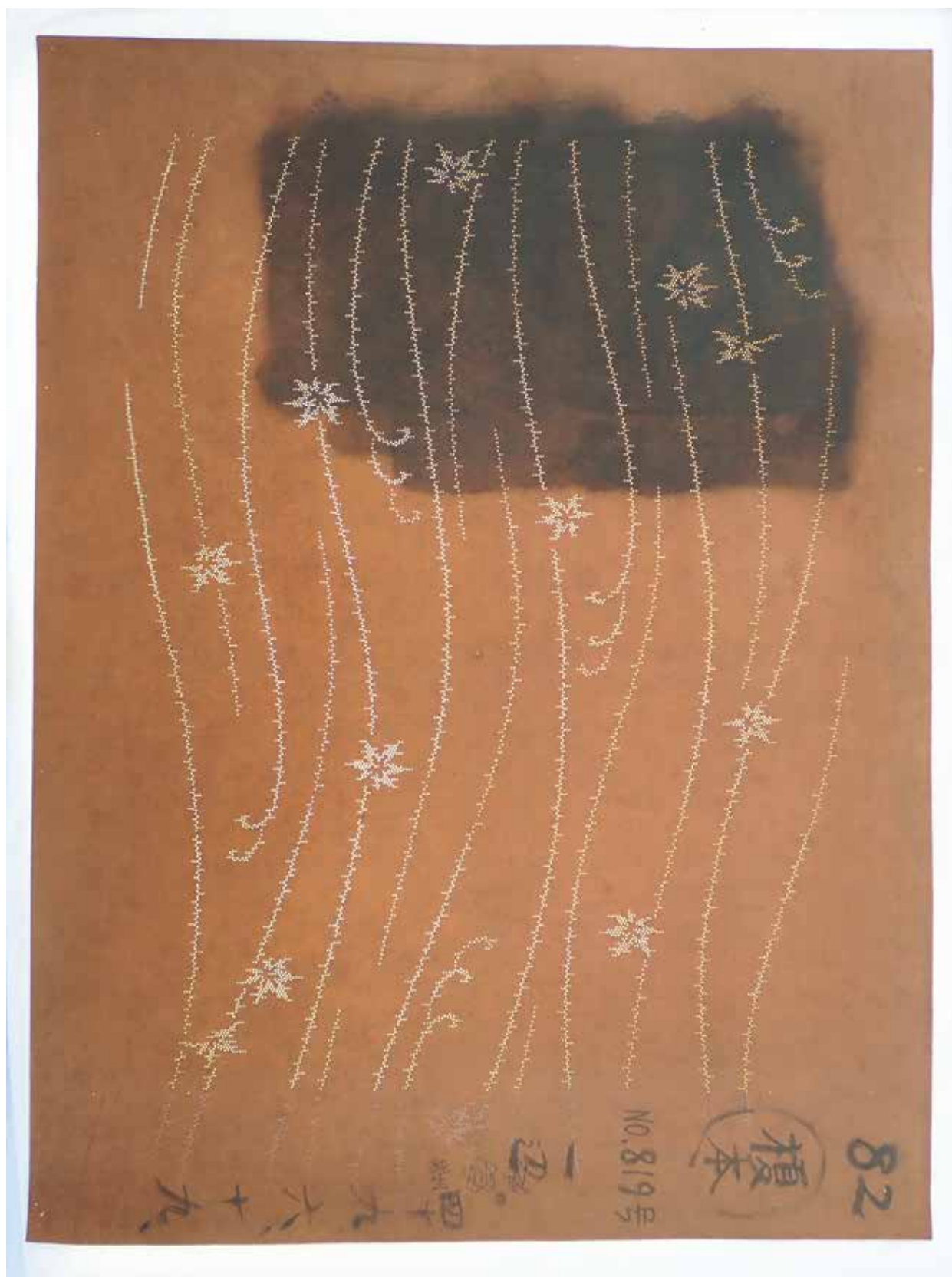
1-15



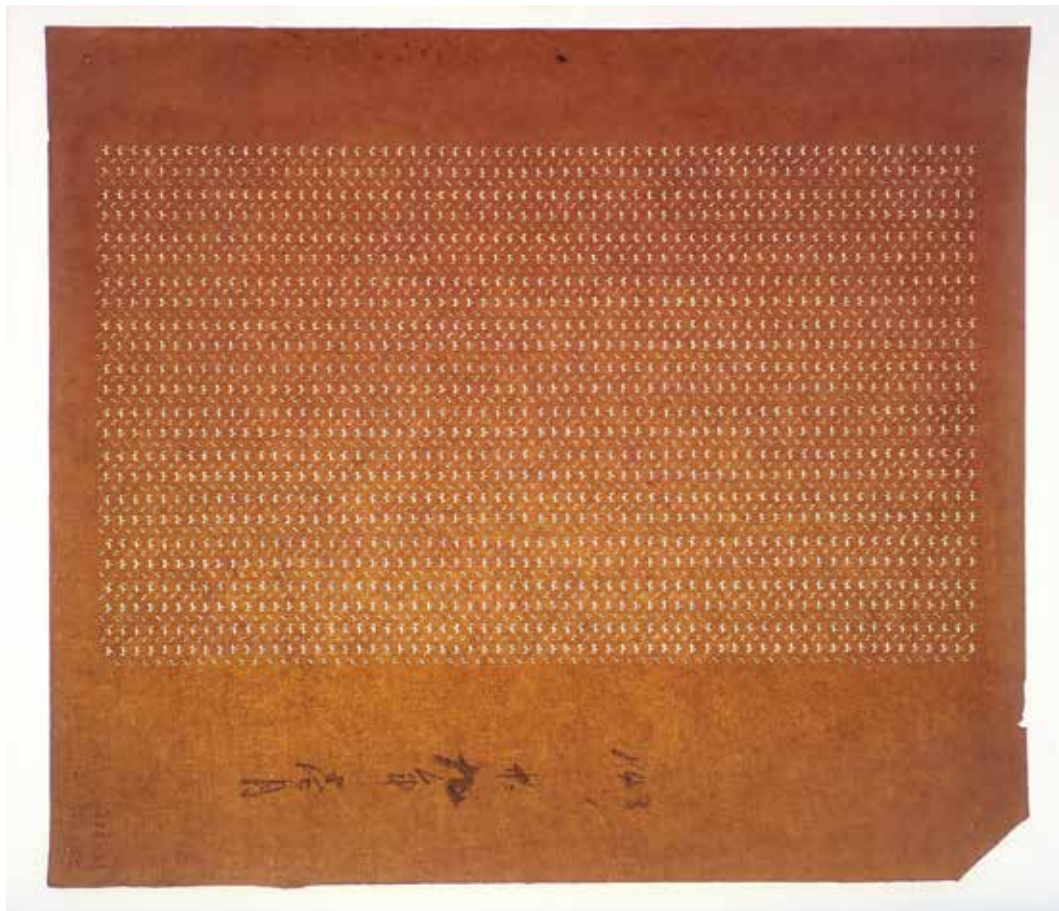


1-17

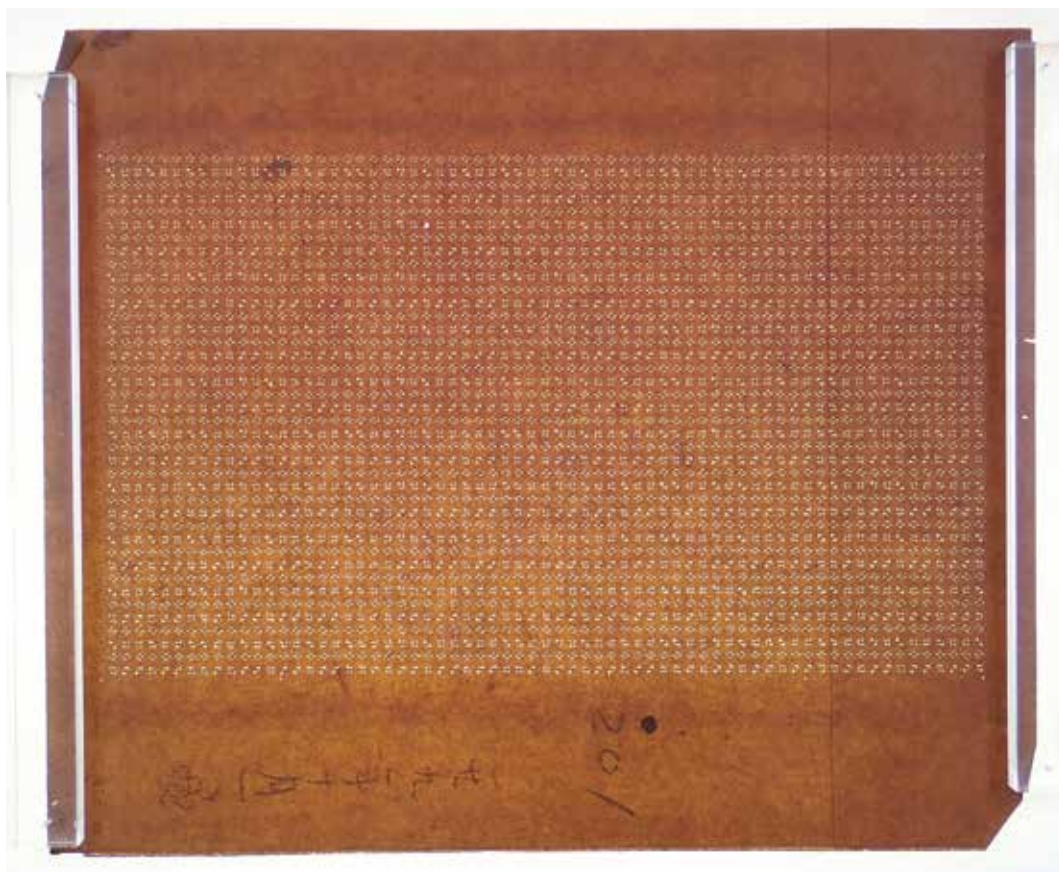




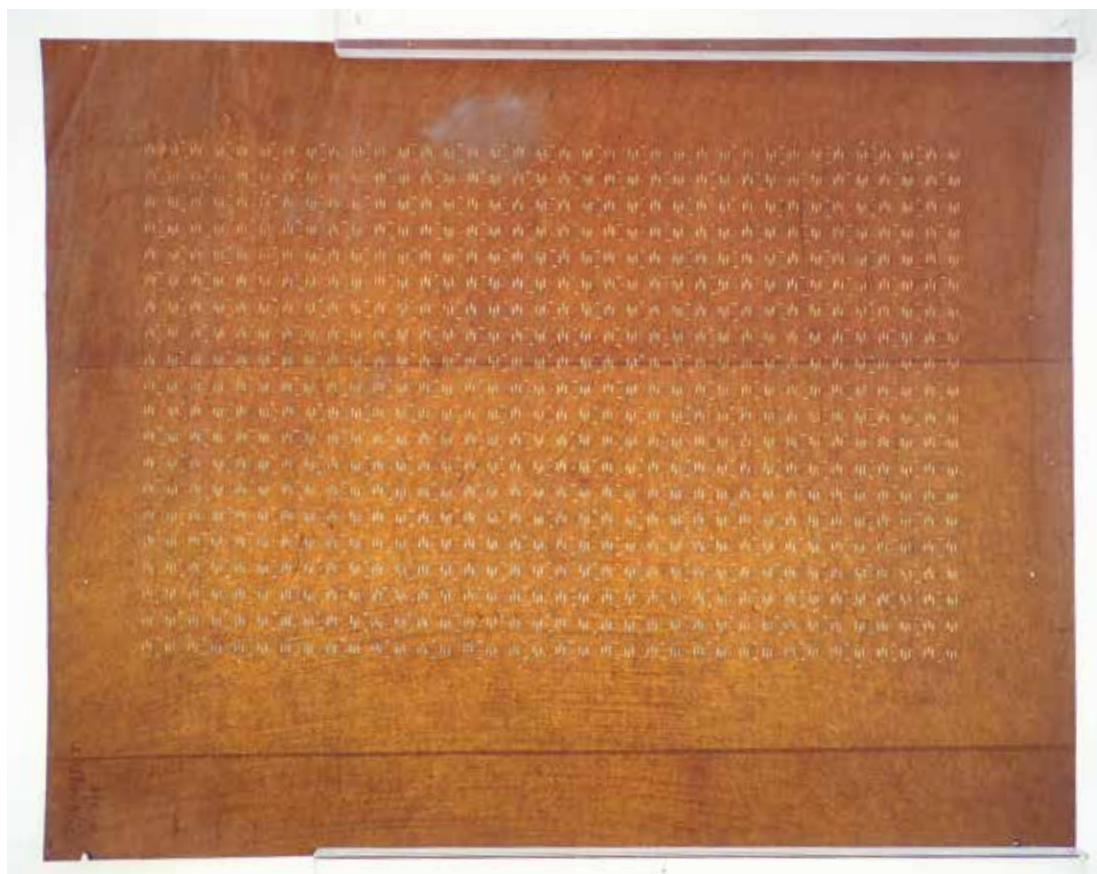
1-19



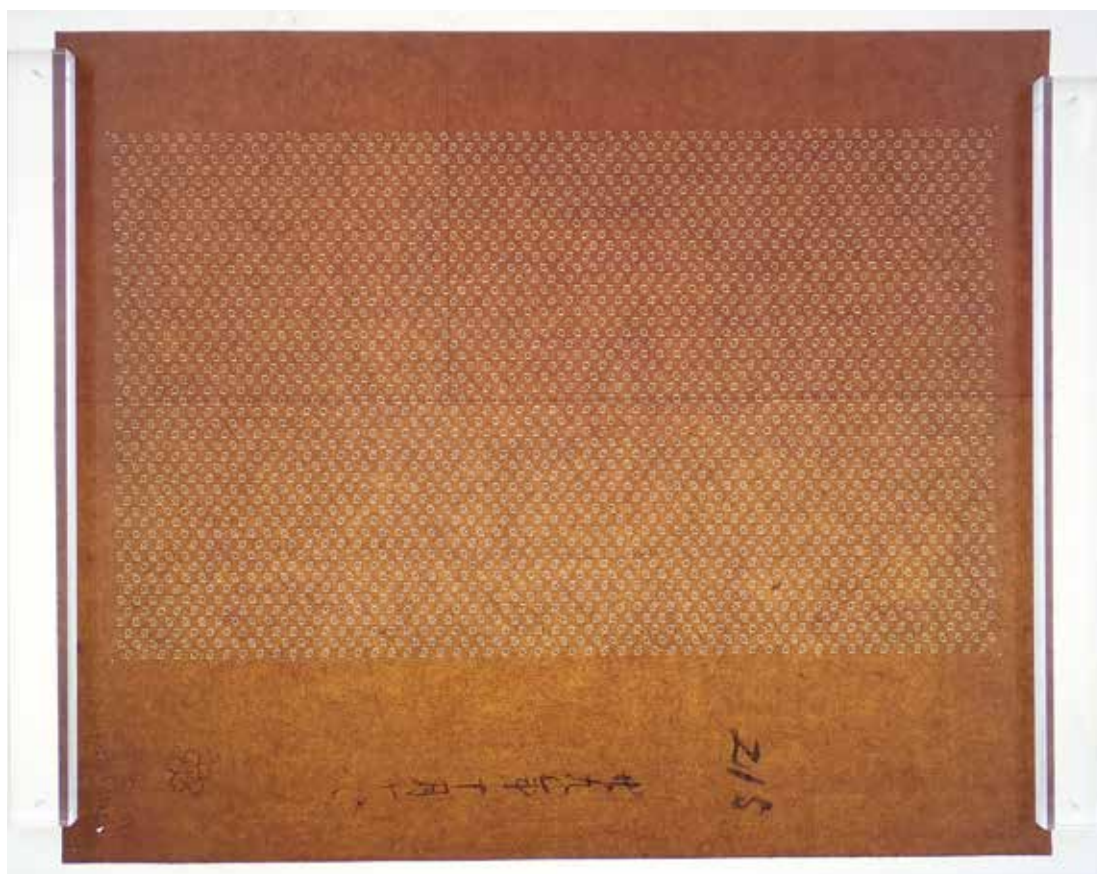
1-20



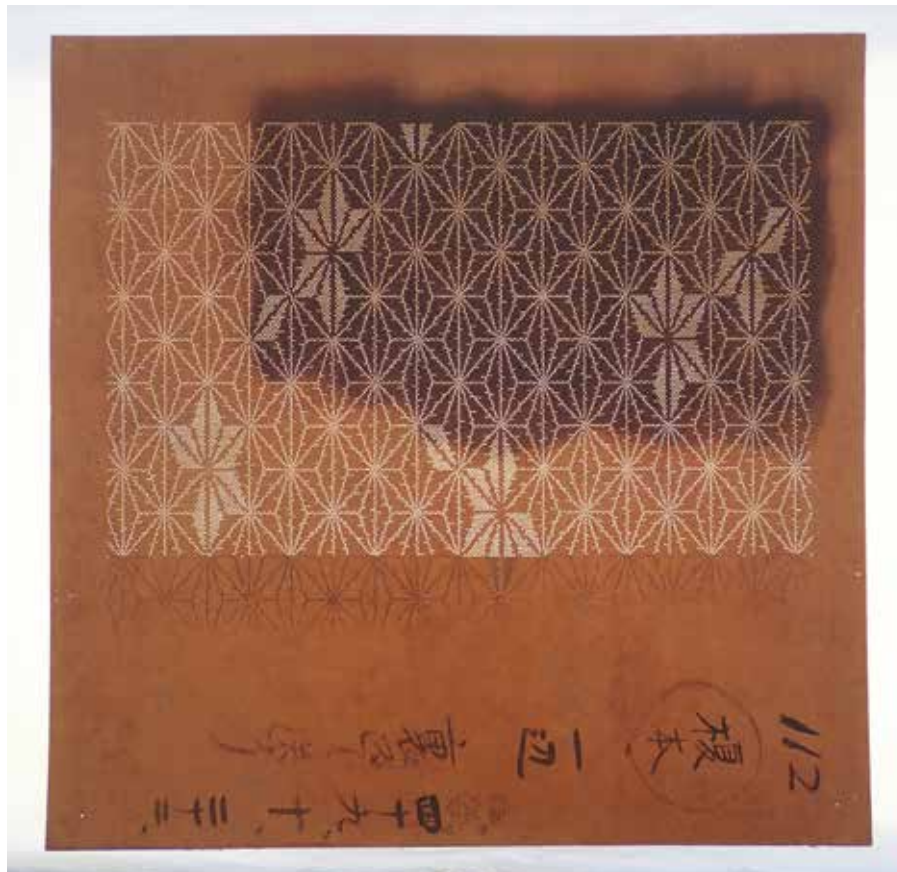
1-21



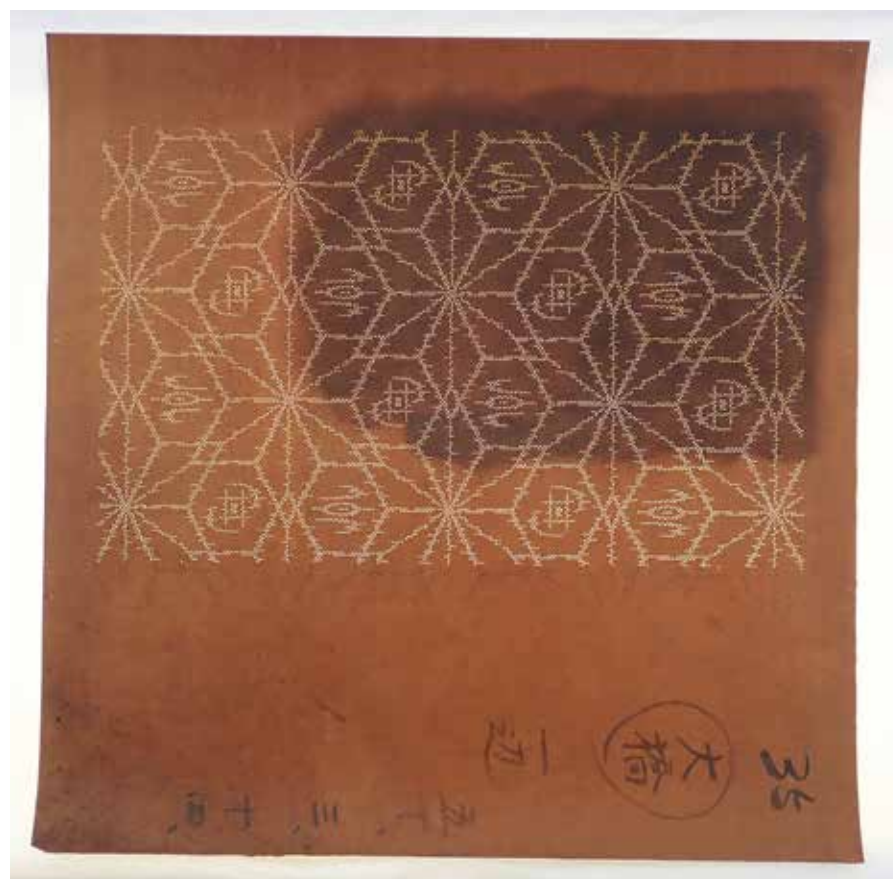
1-22



1-23



1-24

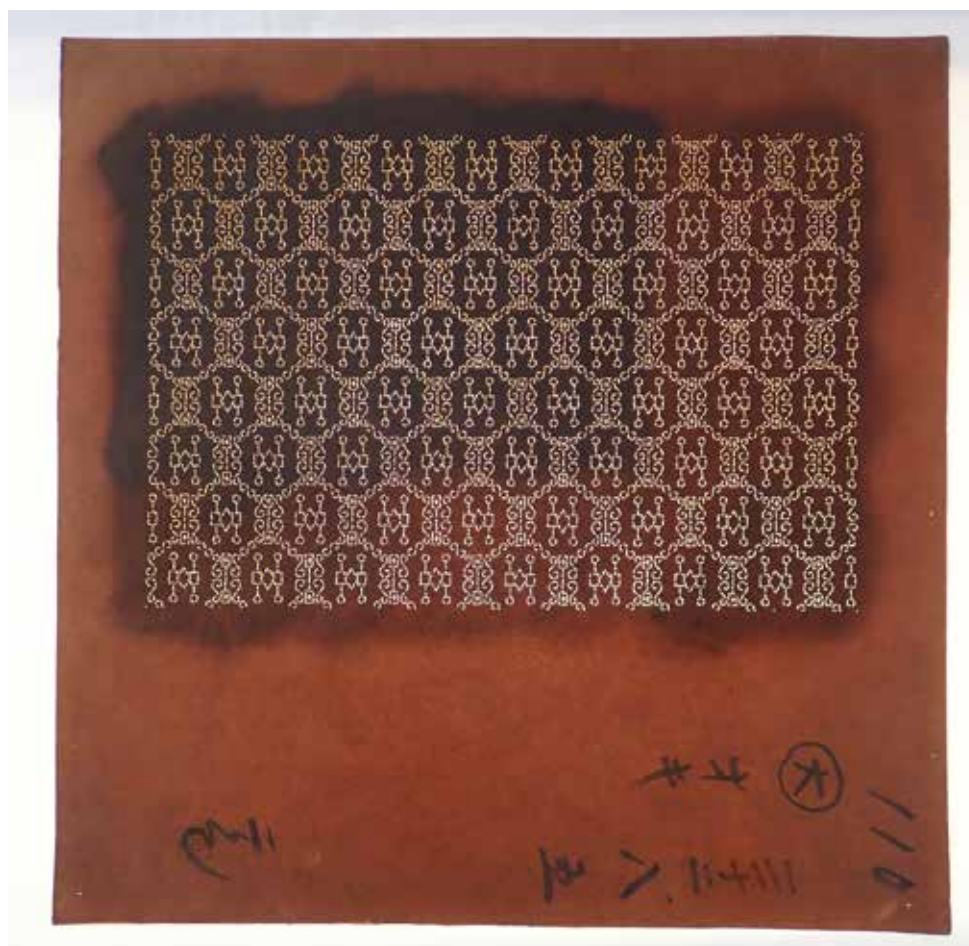




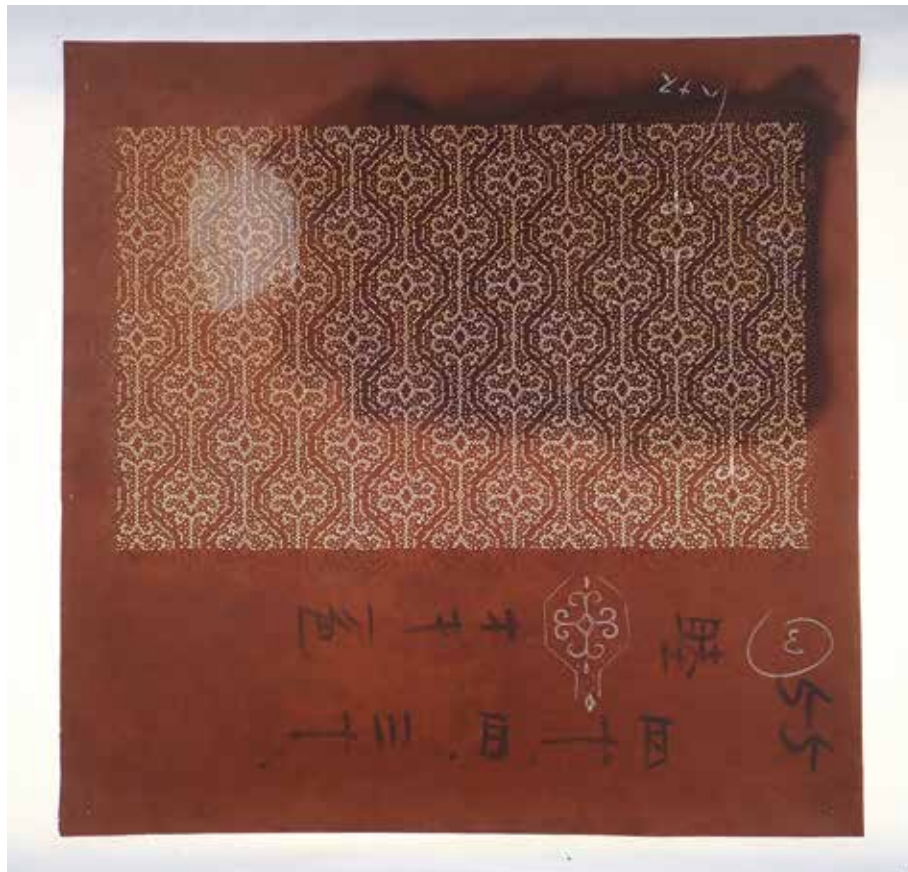
1-25



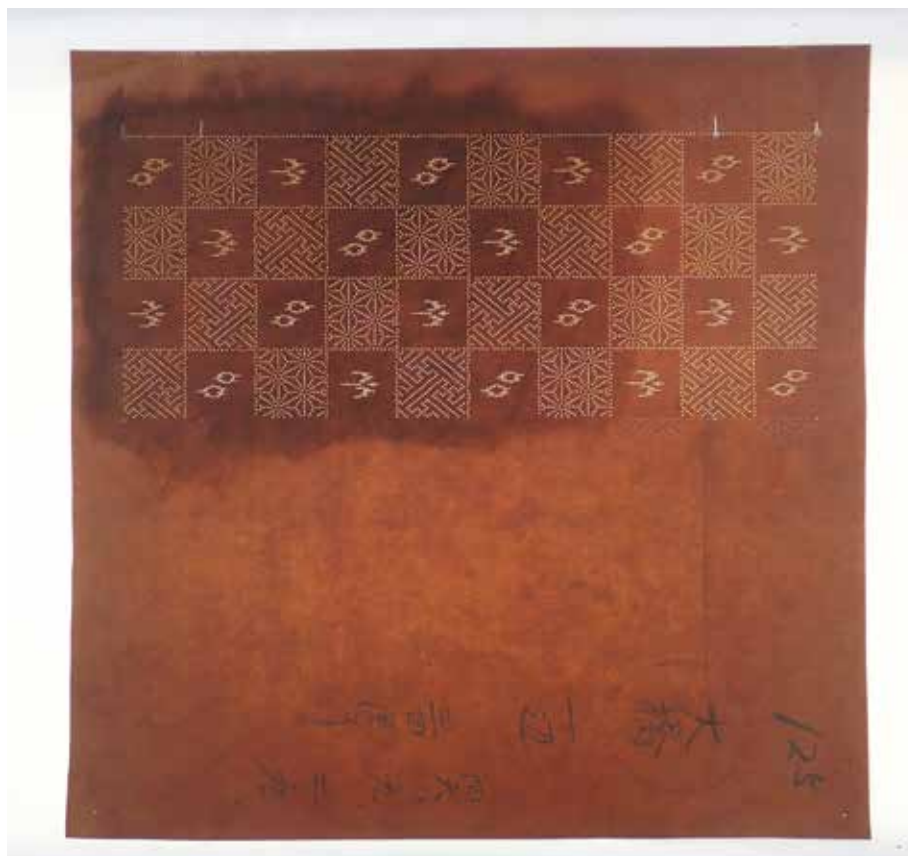
1-26



1-27

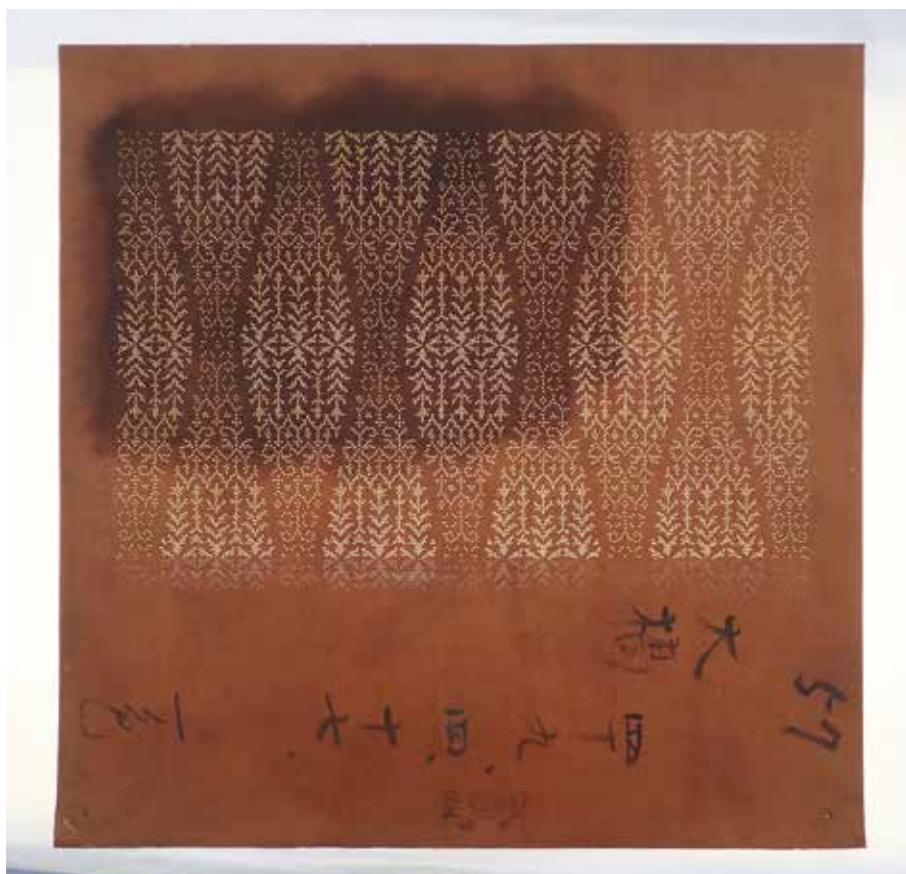


1-28

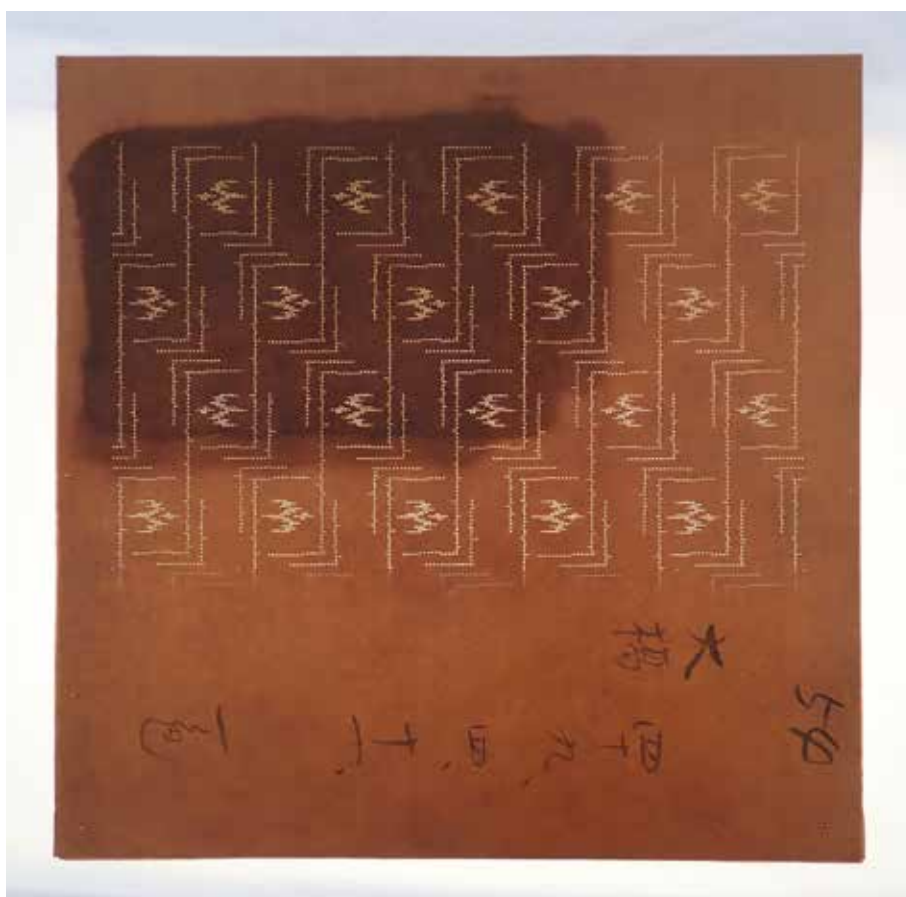




1-29



1-30

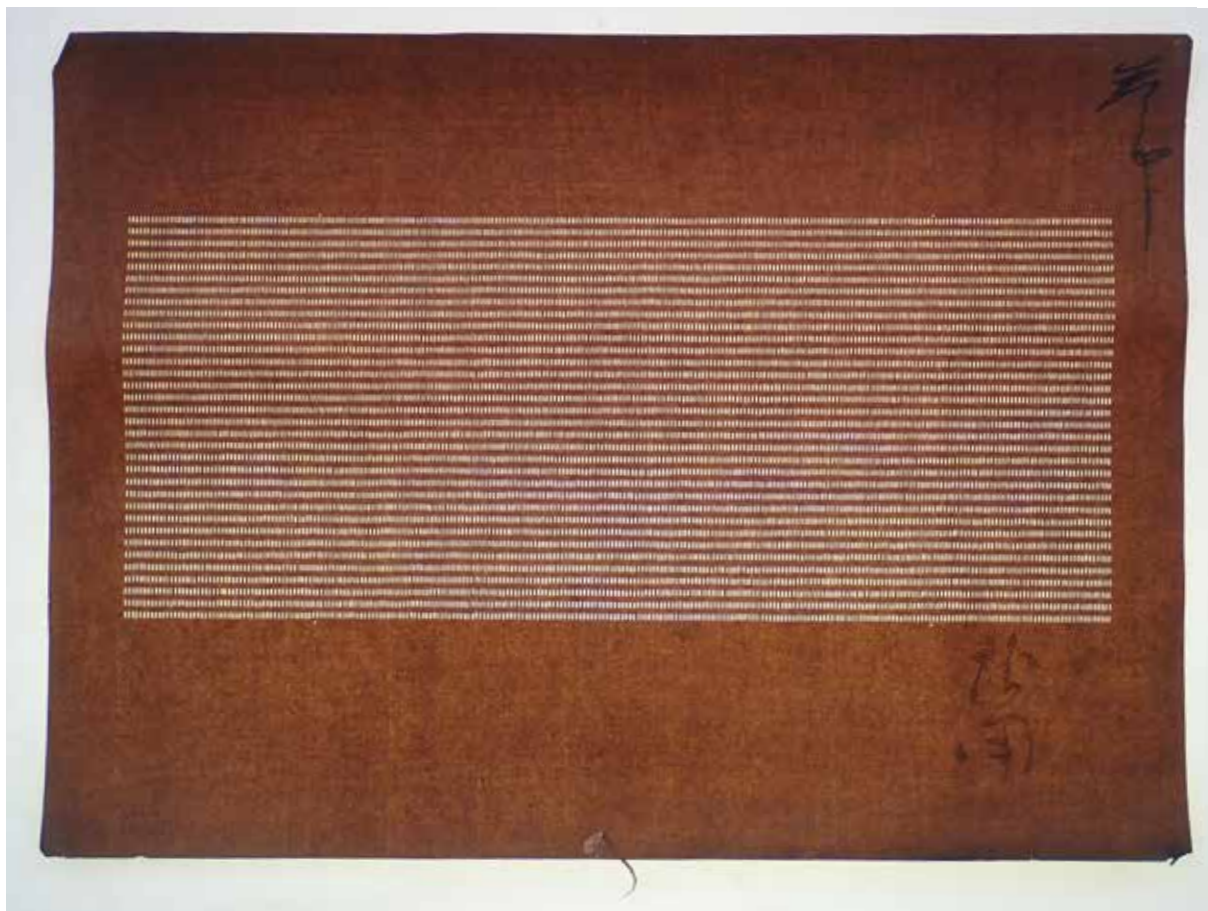


1-31

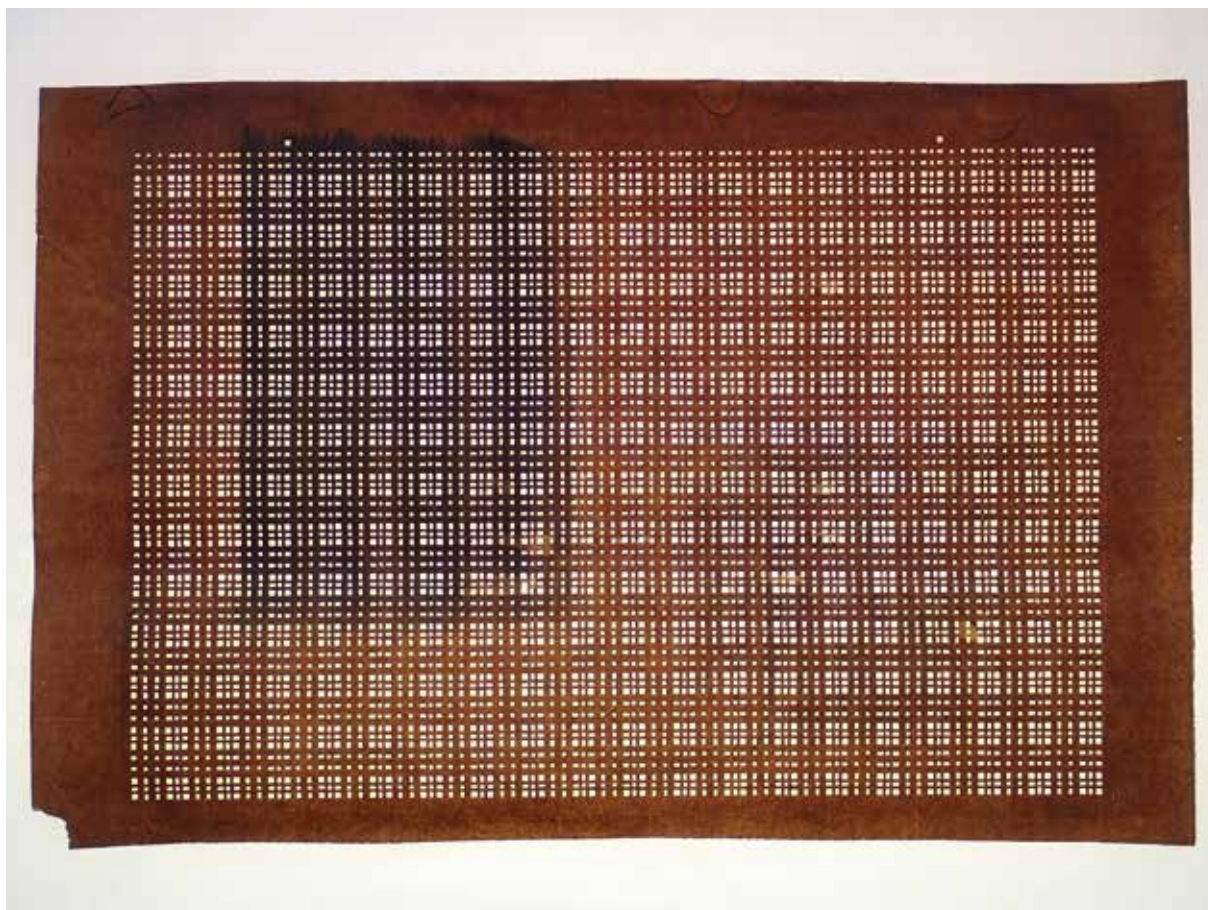




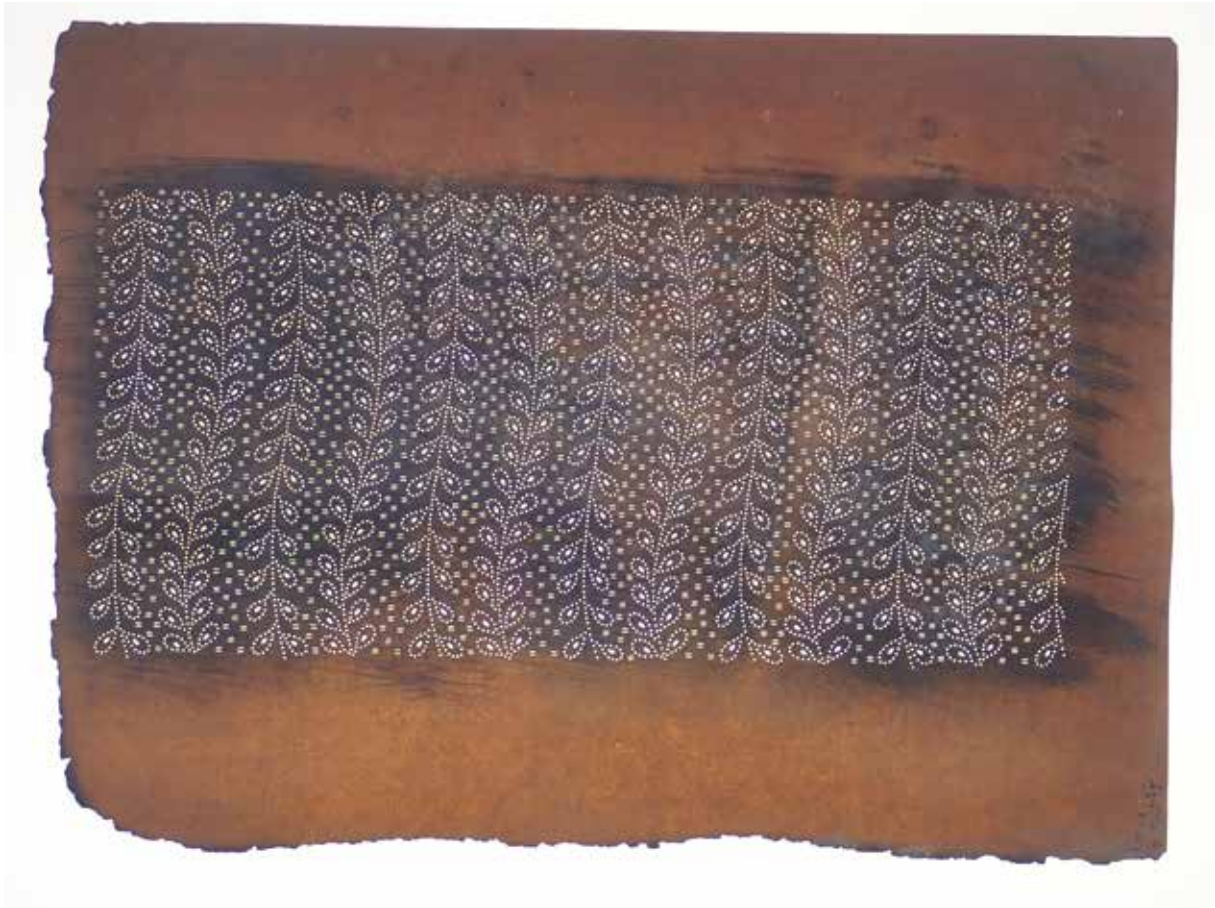
1-32



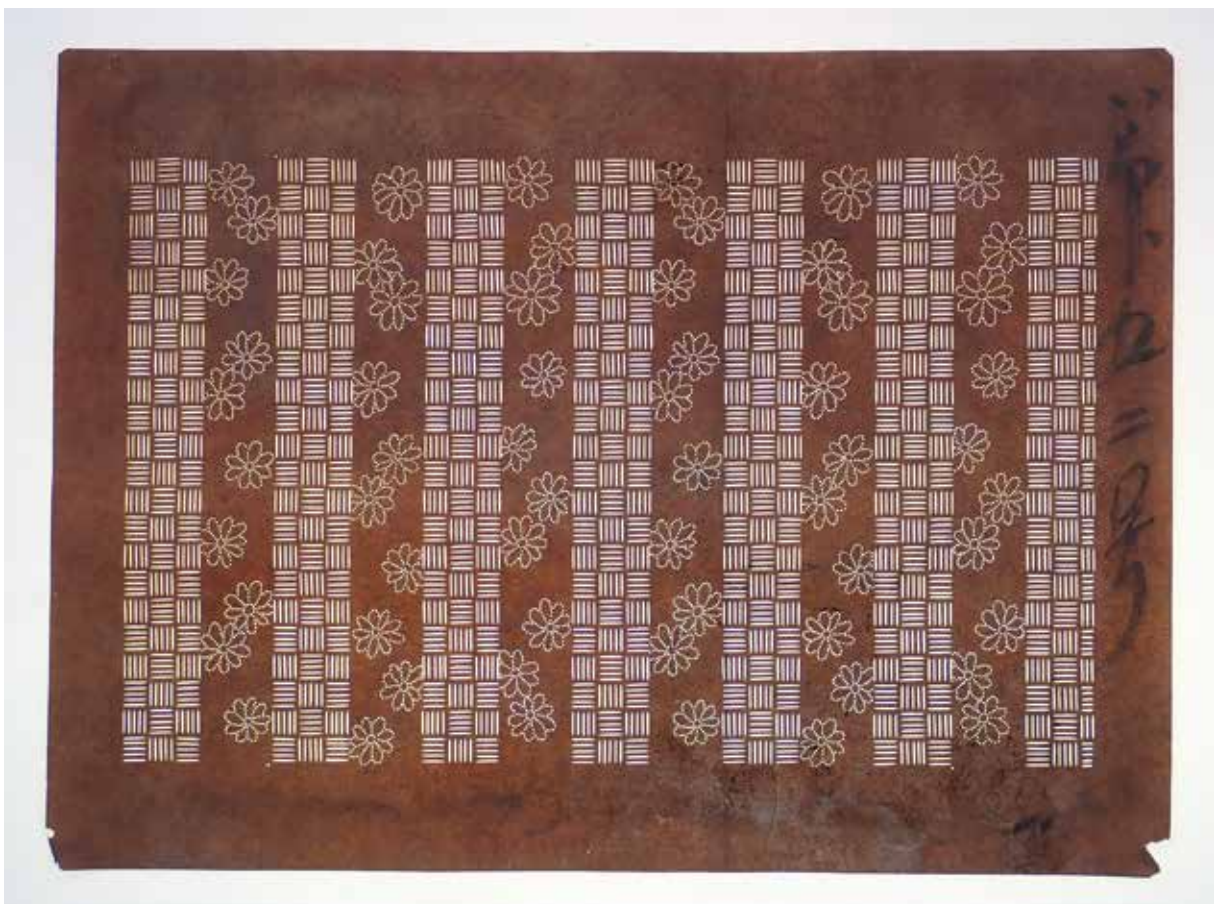
1-33



1-34

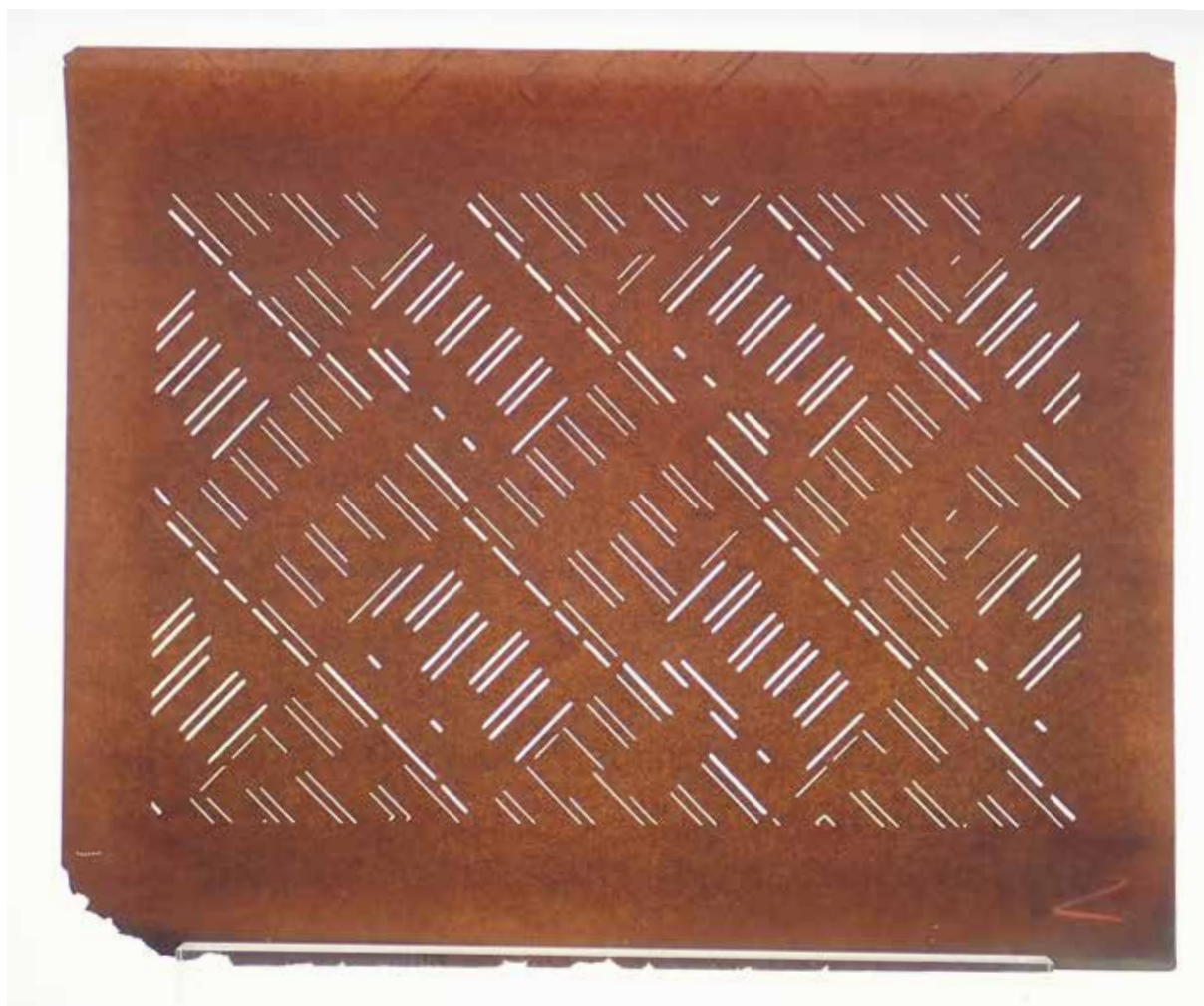


1-35





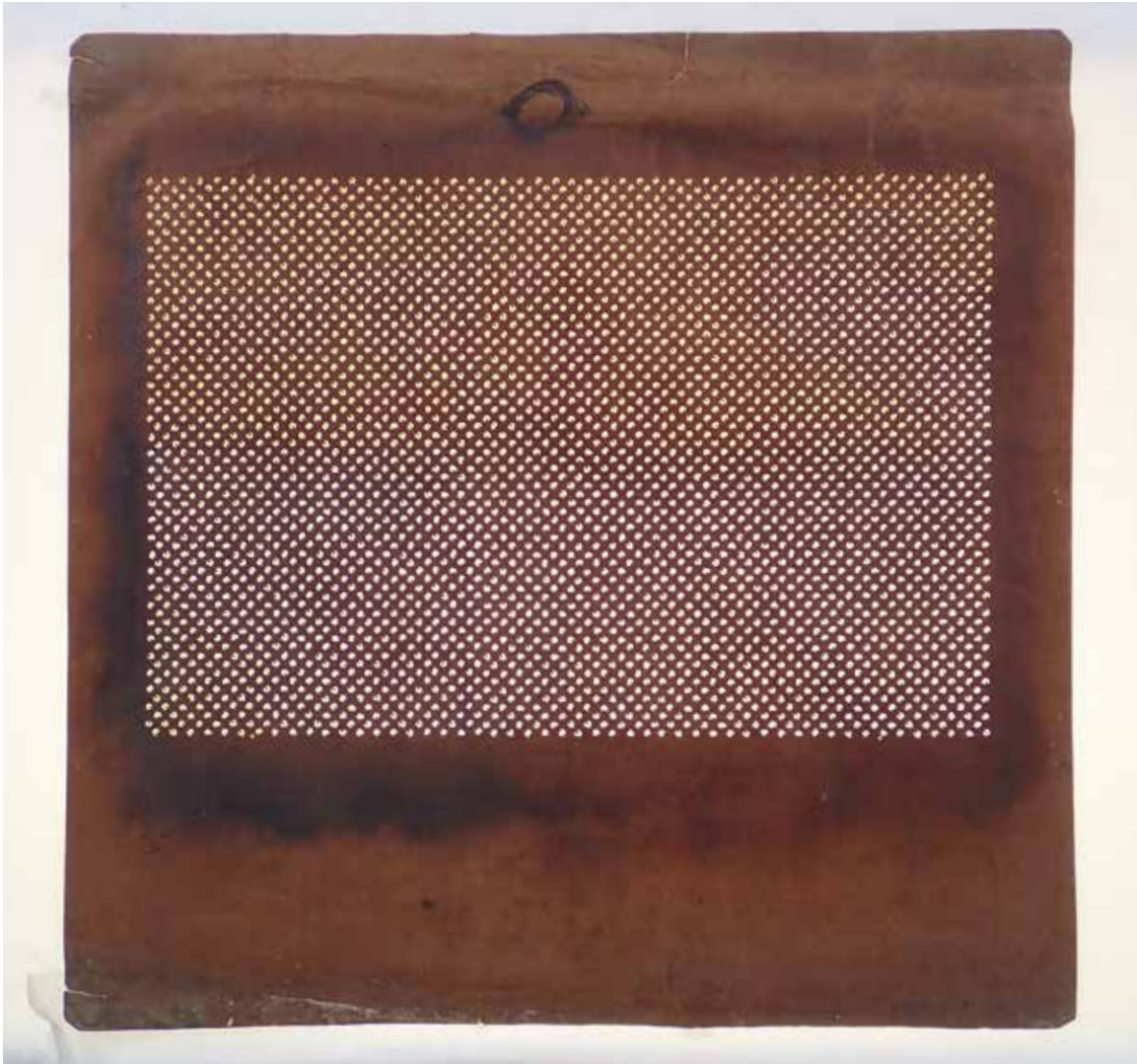
1-36



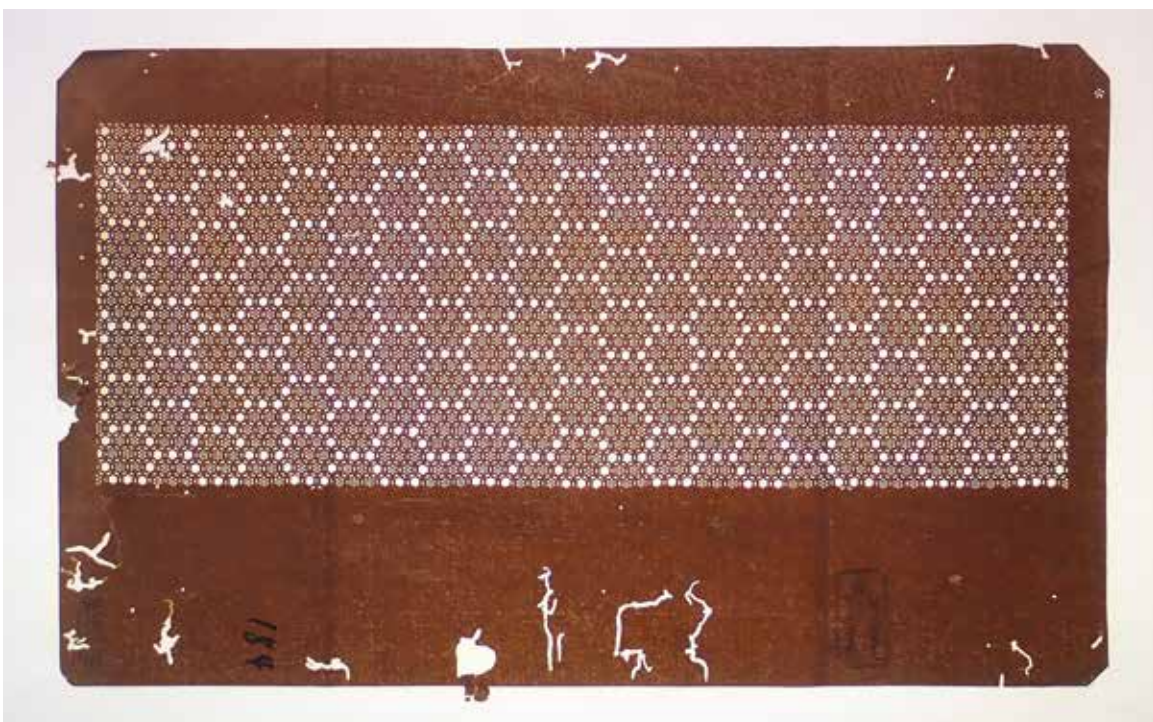
1-37



1-38

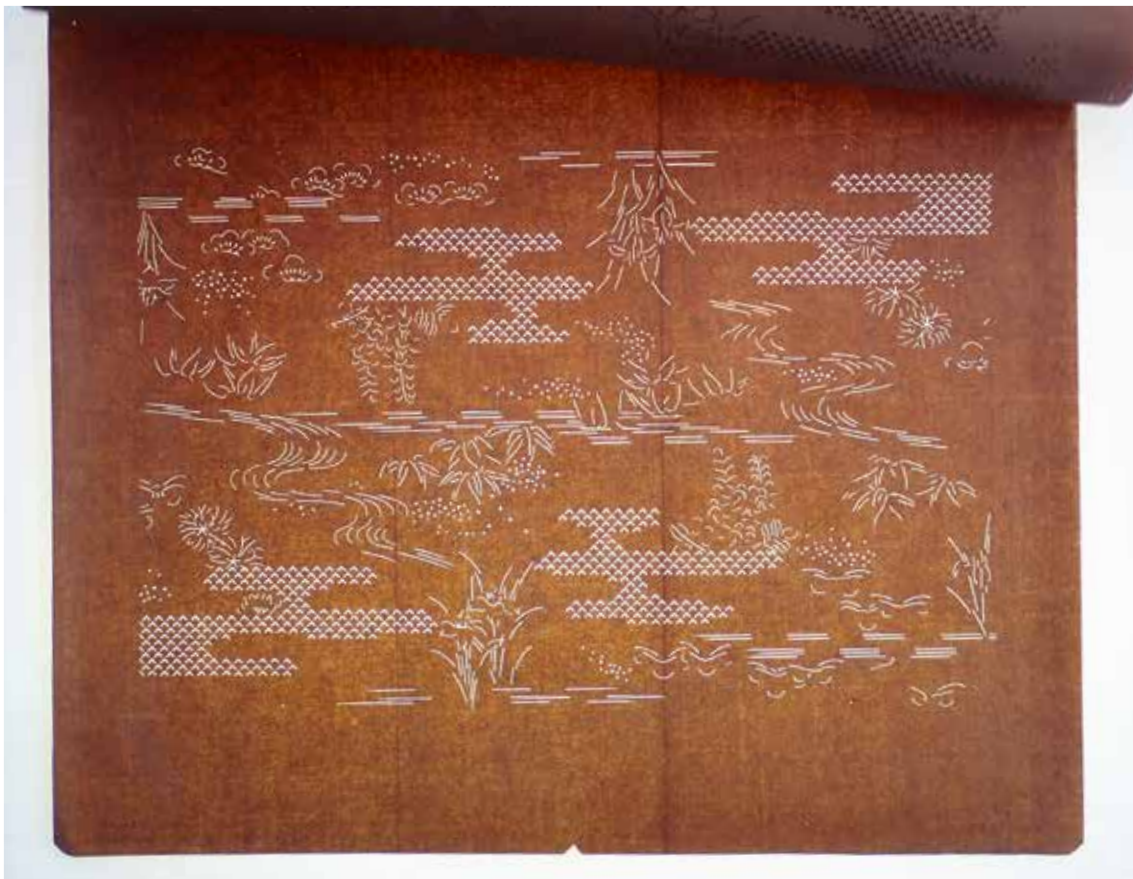


1-39

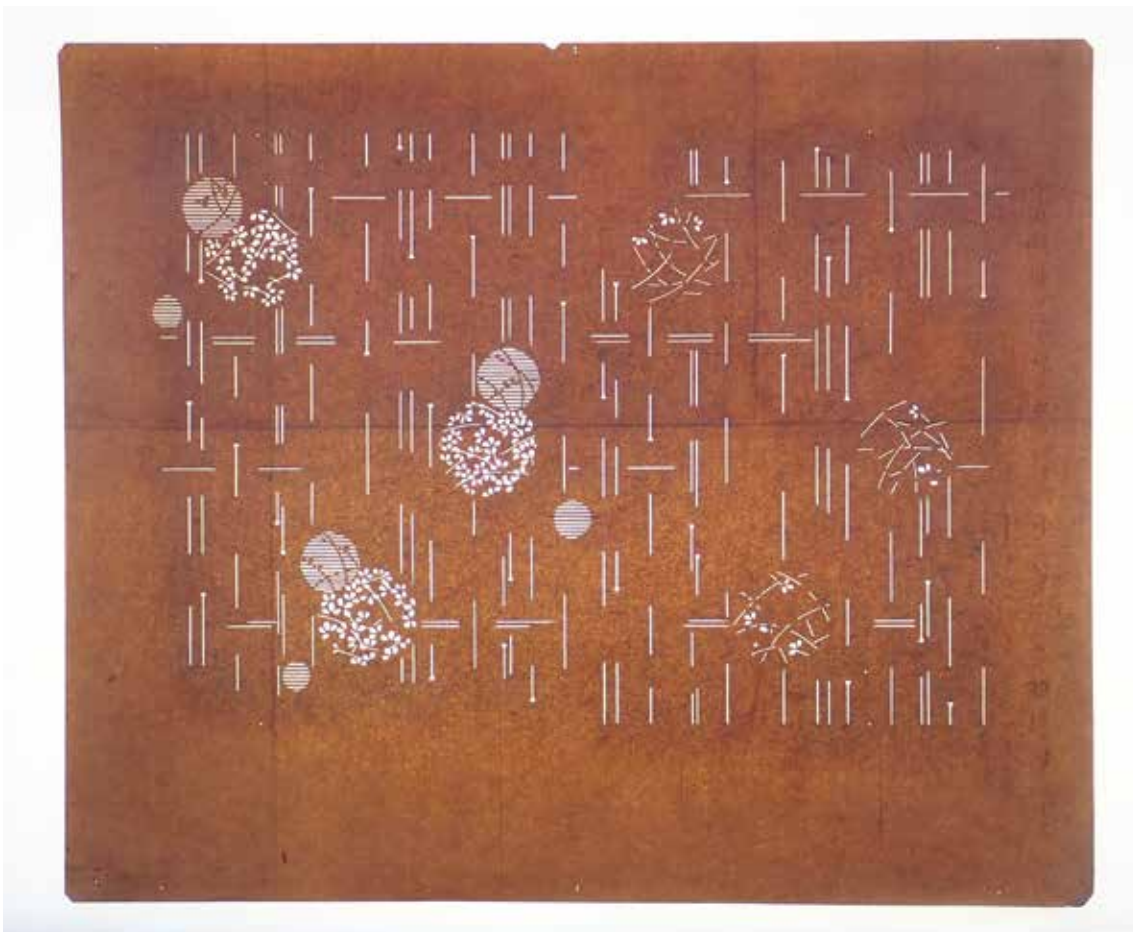




1-40

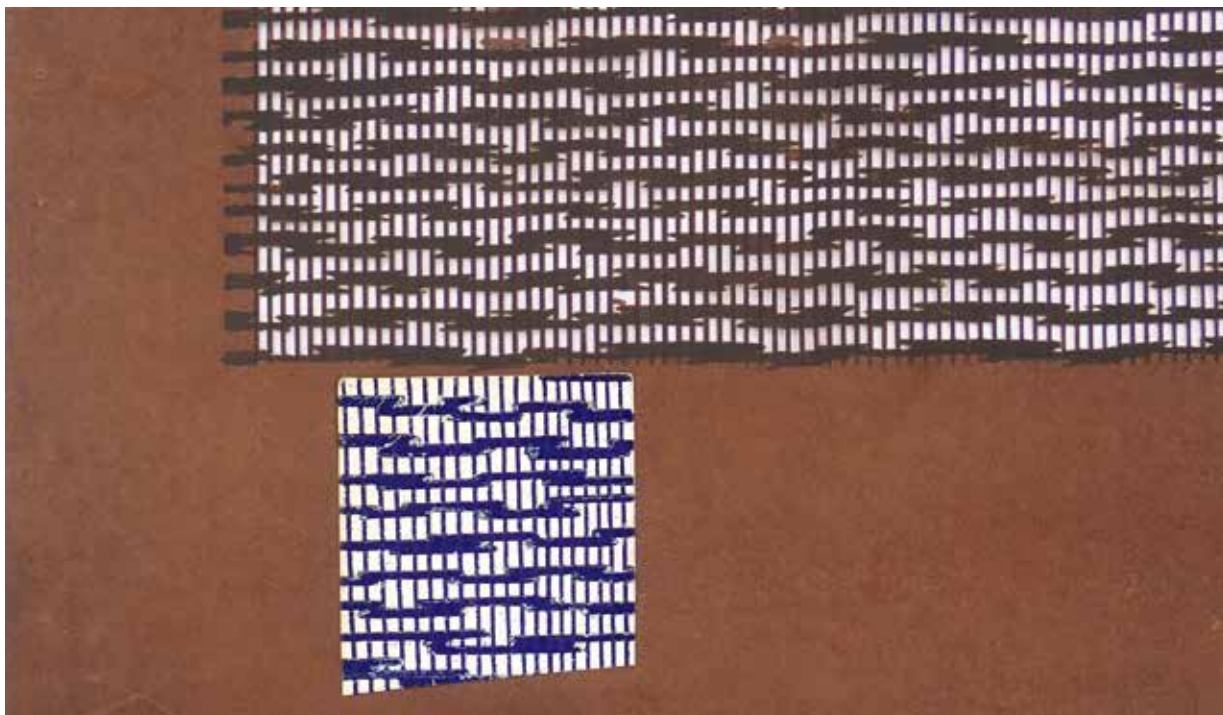


1-41



資料編 第2章 図案と絵刷

2-1



1. 図案と型紙

写真2-1、2-20、5-31は、図案が型紙に糊付けされたり、糸で綴じられたりした、わずかな例である。2-1の図案は、縦56mm、横52mmで直線の縦縞に短い単位の横方向の柄を重ねた縞柄である。2-20の図案は、縦92mm、横61mmで、4-30にも見られる水面の表現と思われる単位を並べて、横縞を構成している。5-31の図案は縦139mm、横136mmで、縦18mm、横16mmの割り付け線を基にして四半の格子を割り付け、格子の中にはそれぞれ亀甲模様と琉球柄を配した割り付け柄である。

写真2-2～2-15は、どれもマンガン染色の型紙と重ねて箱に収められていた図案で、マンガン染色による緋柄の図案と考えられる。2-2と2-3は微塵柄の白緋の図案である。2-5には、縦60.0mm、横45.5mmの割り付け線が観察できる。2-6は鉛筆書きの下絵の台紙に貼付けられている。花柄の太い輪郭からは、かすれた線を表現するアシの細い線が出ている。

写真2-1と2-16～2-21は、近代の型紙に重ねられていた図案である。2-16～2-18と2-21は緋の縞柄や十字緋を表現している。

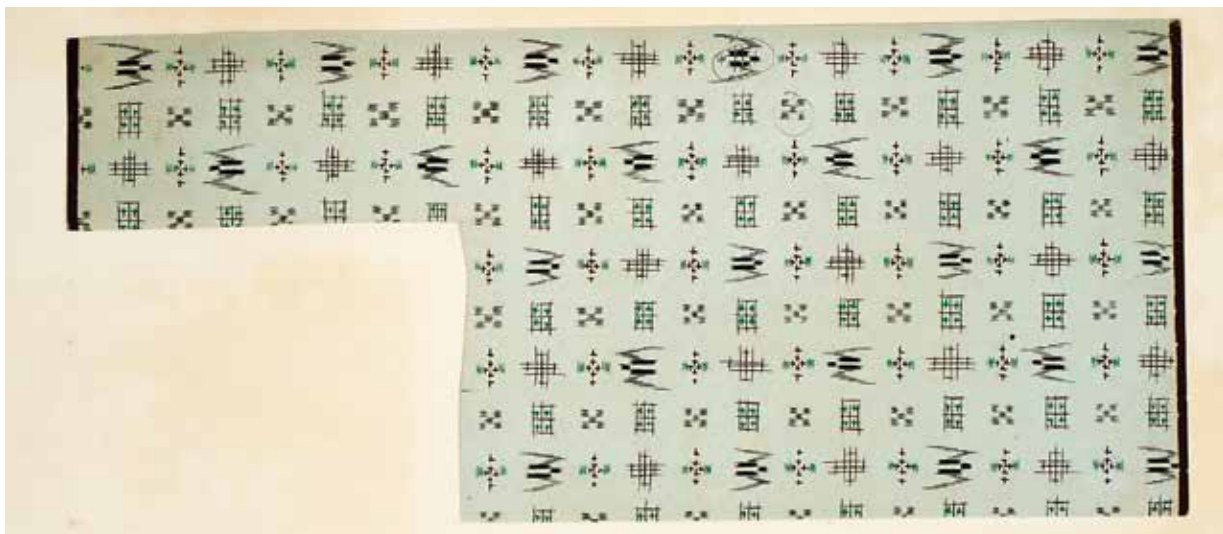
2. 型紙からの絵刷り

写真2-22～2-27は、彫刻した型紙から刷った絵刷りである。2-22は林型紙彫刻所から相曽形染に納められた納品絵刷りである。2-24は林型紙彫刻所から相曽形染への納品通い帳で、「31.3～31.6 相曽様 林型紙店」(2-25)とある。2-26、2-27は「型紙上絵刷 日付 林型紙彫刻所 彫刻者氏名」とあり、元彫刻師によると、彫刻が仕上がると社長に金額を書き入れてもらったものだそうである。2-23は煙山形染に納めた微塵柄の一覧であろうか。

このような絵刷りをした墨の痕跡が残る型紙(1-17、1-18、1-23など)も多く見られる。1-23にはコホンから絵刷りをした下絵も見られる(資料3参照)。



2-2



2-3



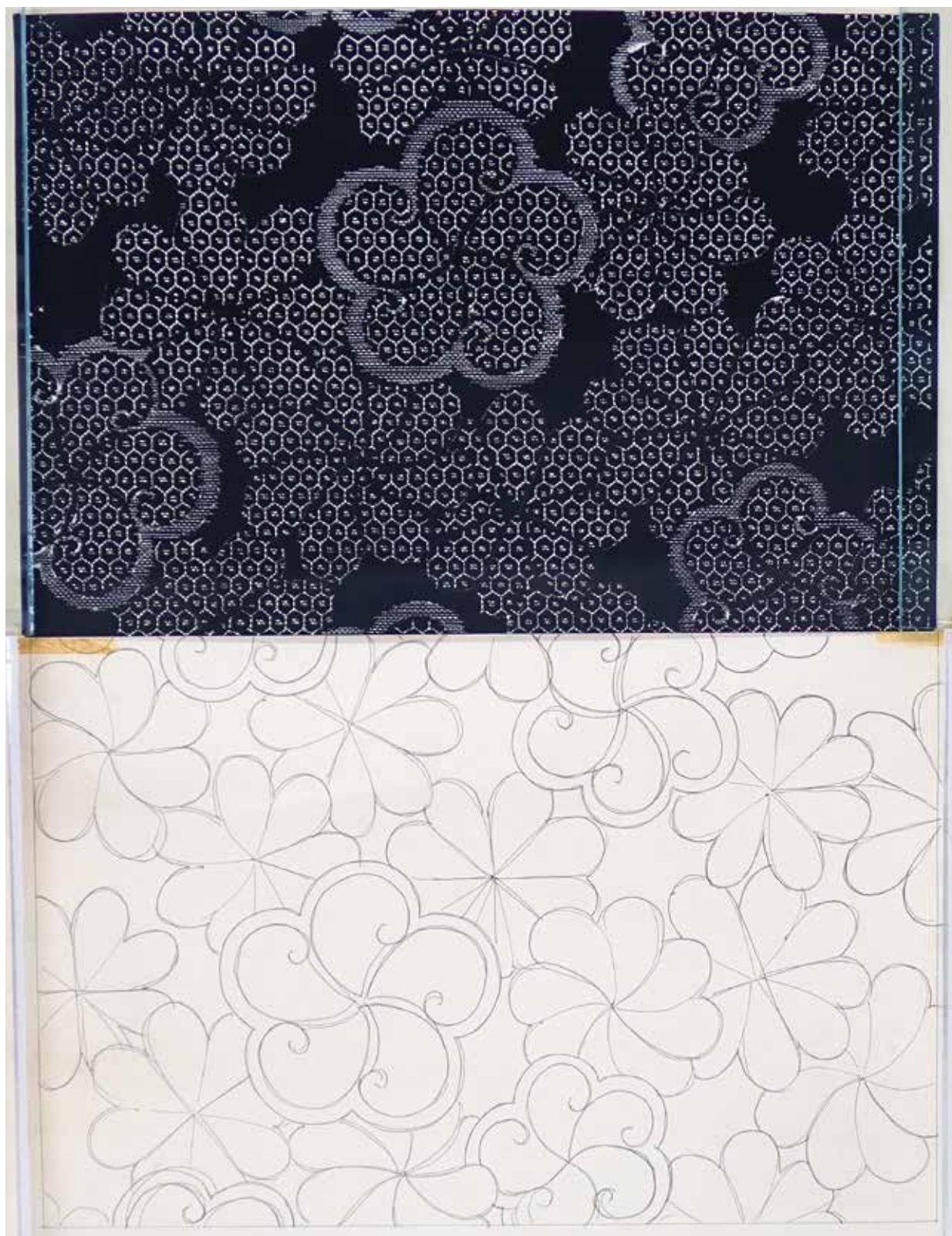
2-4



2-5



2-6





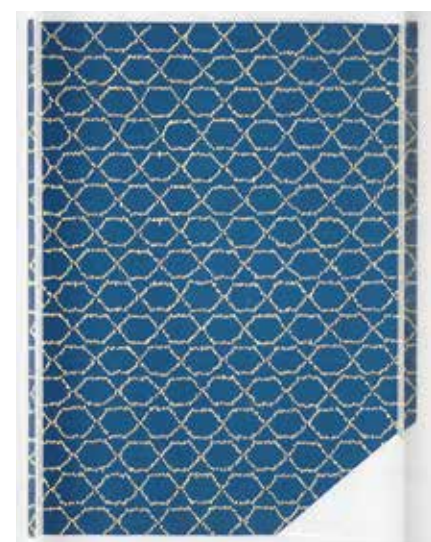
2-7



2-8



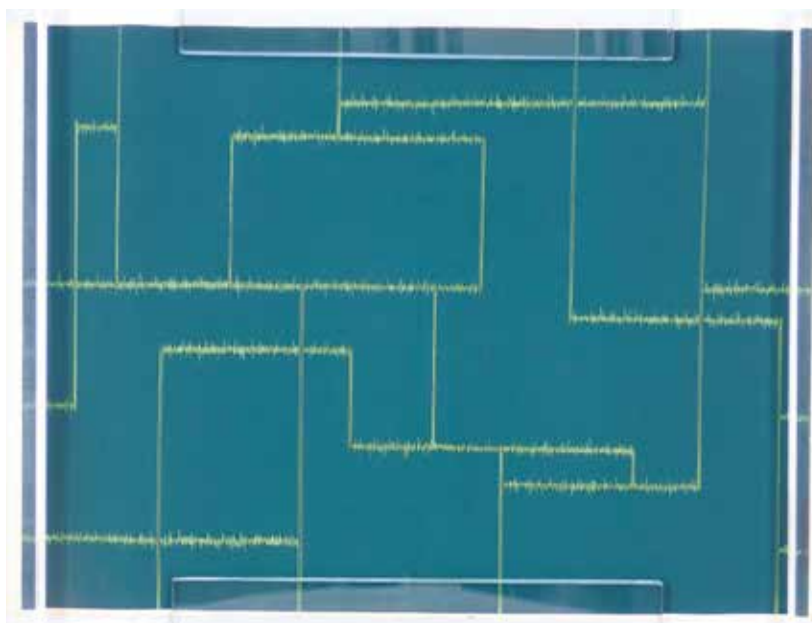
2-9



2-10



2-11



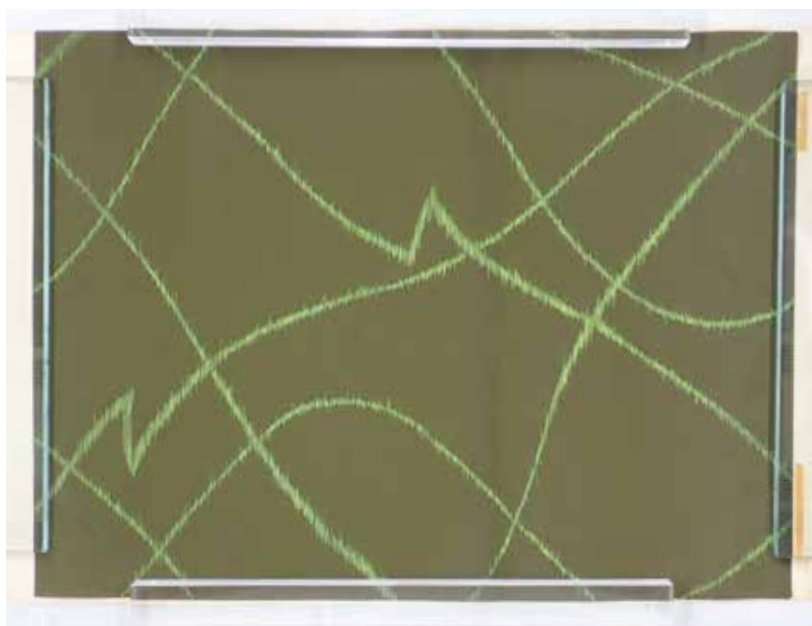
2-13



2-14



2-12



2-15

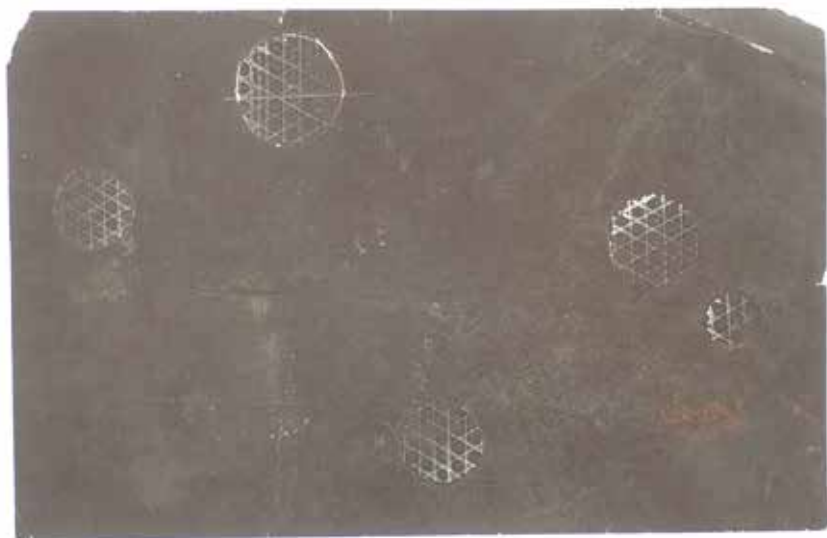




2-19



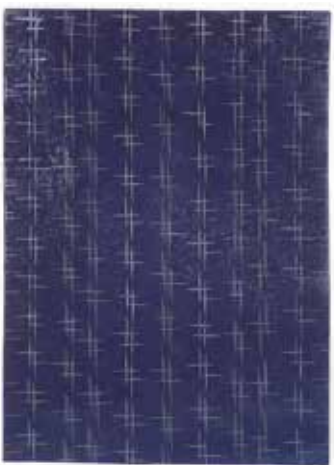
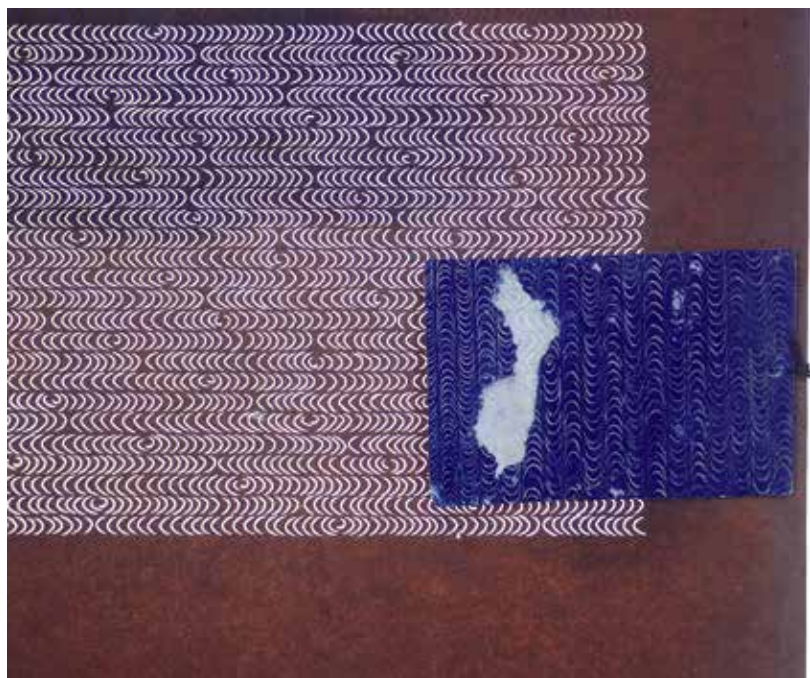
2-16



2-20



2-17



2-18

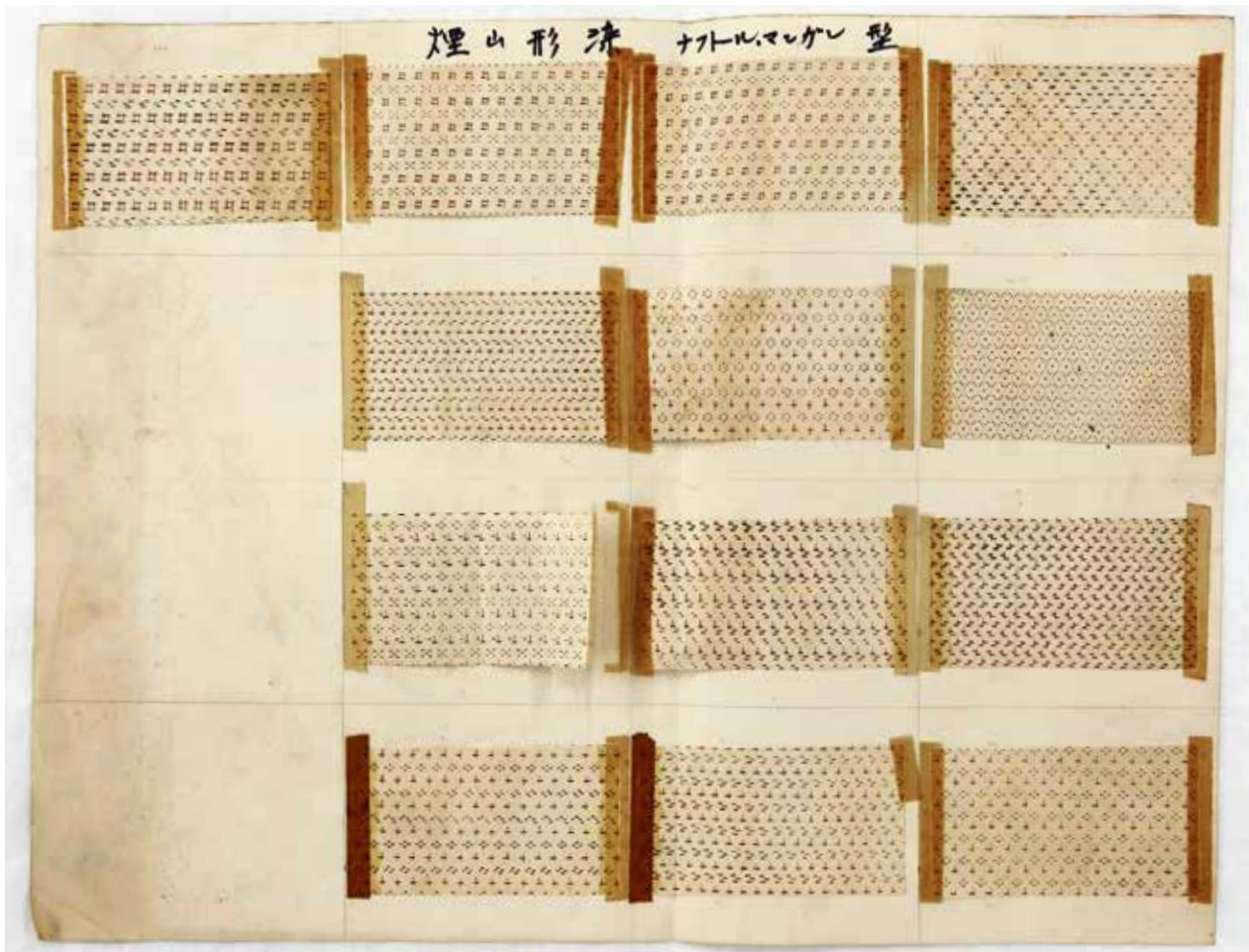
2-22



2-21



2-23



2-24



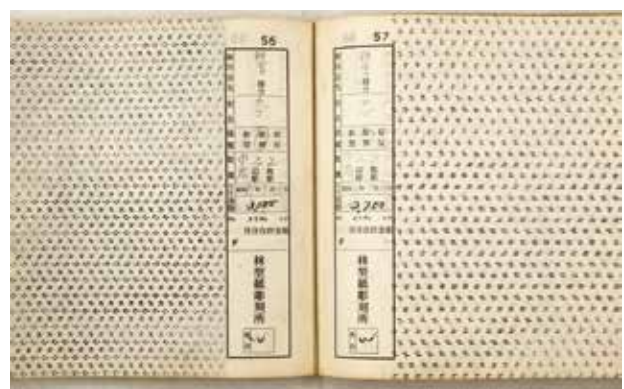
2-25



2-26



2-27





1. **型地紙** 型紙の用紙は型地紙、あるいは地紙と呼び、良質の和紙2～3枚を柿渋で貼り合わせ、これを室で燻煙して枯らして作られる。“1950年代以降の型紙”には、「大杉型紙」と「中辰」という、三重県鈴鹿市の型地紙製造工場の商印（資料編7章参照）が押された型紙がしばしば見られる。彫刻師は、型地紙7～8枚を重ねて紙縫りで綴じて、彫刻刀で型紙を彫刻するのである。

2. **彫刻の道具** 3-1～3-6は彫刻台と彫刻刀である。3-1と3-2は道具彫りの台、3-3は錐彫りの台である。3-4は突き彫りの台、3-5はその裏側で、突き彫りの彫刻刀を突き通す穴の広がっている様子が分かる。3-6の錐彫りの台（3-1）の上に並ぶ彫刻刀は、左側が錐彫りと道具彫り、右側手前2本はケン引き、奥2本は2重引きである。

3. **林型紙彫刻所の道具** 3-7は彫刻刀を研ぐための水桶と砥石である。1950年台以降のマンガン染色の型紙の周縁部に、錐彫りの丸い穴がびっしりと連ねて彫られていることがよくある。これは研いだ彫刻刀の切れ味を確かめるため、試し彫りをした穴である。3-8は林形紙店の創業者の法被である。

4. **絵刷りで下絵を描く道具コホン** 3-9～3-21はコホンである。コホンは、柄の単位が彫られていて、これを型地紙に当ててチョークや墨で絵刷りをして、型紙の下絵を描く道具である。いわば型紙のひな形である。事業報告編第1章の写真1-14は、コホンで地紙に絵ずりをして、下書きを描く工程を再現したものである。林型紙彫刻所の元彫刻師が再現して下さった。

型紙の周縁部には、1-23のように型の下縁に絵刷りをした痕跡が残っているものもある。これは、型の上縁を彫刻する時に地紙に重ねて挟んでおいた「口紙」で、下縁を彫刻する際に絵刷りしたものである。型の送りが正確にできるように、型の上下の彫刻を合わせるための技術（杉原1968、資料編1参照）である。

3-2



3-4



3-3



3-5



3-6

3-8

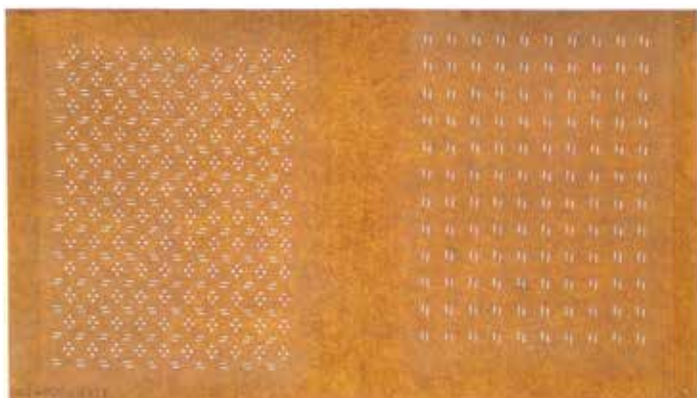


3-7





3-9



3-11



3-12



3-10



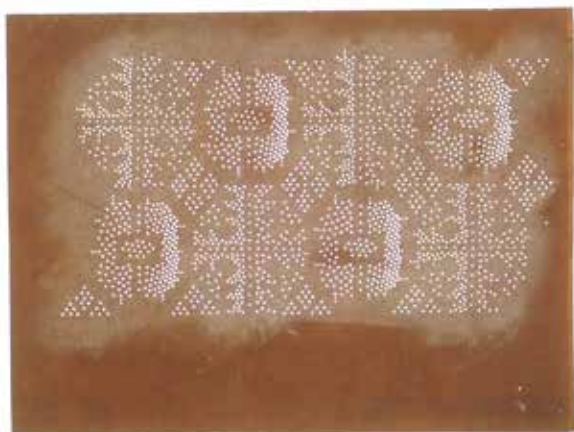
3-13



3-15



3-14



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21





資料編 第4章 カゴヅケの製品



4-1



4-3

4-2

相曽形染を始めとする寄贈資料の中には、カゴヅケの製品もある。端切れが大半ではあるが、反物や仕立てられた浴衣、半纏などもあり、全て1950年台以降のマンガン染色による染め緋である。

1. 縞の織物にカゴヅケ

4-1の半纏の生地は、マンガン先染め糸を織り交ぜた縞柄の織物に、段々縞風の細かな縦縞をカゴヅケで染めた（栗原2019）という、手間のかかったものである。煙山形染の製品である。

2. マンガン先染め糸を織り交ぜた布地

4-2はマンガン先染め糸を織り交ぜた反物である。4-3はその拡大写真で、マンガン染料で先染めされた褐色の糸と、そうでない白い糸が、規則正しく織り交ぜられていることがわかる。

マンガン染料は酸化力を持っているので、アニリンやナフトールといった酸化されて発色する染料をこの布地に糊付けすると、マンガン先染め糸にだけ発色する。その後還元剤でマンガン染料を抜染すると、白地に織物のような緋柄が染め上がるのである。

3. 株式会社相曽形染の製品

4-2～4-8は相曽形染の製品である。4-5は木綿生地、4-4と6はウール、4-8は木綿の白緋（4-7は部分写真）である。「浜松特産白緋マンガン」という1965年前後の株式会社相曽形染のパンフレットによれば、若き日の創業者相曽光太郎は、東京の竹村形染で微塵柄の原型作りを修行し、1954（昭和29）年、新たなプレス彫刻機を完成させ、新柄の白緋が「浜松白緋マンガン」として好評を得たという。白緋が相曽形染の看板商品だったことが伺える。

さらに動物製繊維には不向きと考えられていたマンガン染色だが、1960（昭和35）年、塩素処理（クロリネーション）によるウールのマンガン染色を、カゴヅケでも可能にした。（相曽形染、池川2019、菊池1983）

4. 三幸株式会社の製品

4-9～4-11は白緋、4-12は縞柄の織物にカゴヅケで細かな縦縞を染めたものである。三幸株式会社は老舗の産元の一つで、相曽形染や煙山形染の製品も扱っていた。カゴヅケの工場が煙山形染1社となった時、後継者を育てカゴヅケを継承するために奔走したという。

5. 株式会社煙山形染の製品

4-13～4-15は微塵柄の絹の反物、4-16は白緋である。相曽形染はウールを得意とし、そして煙山形染は絹のマンガン染色を得意とした。

6. 林型紙彫刻所の生地見本

4-17～4-30は生地見本と思われる。林型紙彫刻所の創業者は栃木県出身で、足利で型紙彫刻の修行をした職人である。1924（大正13）年、当時の西遠染色株式会社に招かれ浜松に来て、大正の終わるか昭和の初め頃、型紙彫刻店を始めたそうである。相曽形染の型紙の内、1950年台以降の型紙はほとんどが林型紙彫刻所によるものと思われる。

【参考文献】

池川恵子2019「相曽形染の思い出～鈴木啓仁一人語り～」『浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館

相曽光太郎『浜松白緋マンガン』株式会社相曽形染（株式会社相曽形染の自社紹介パンフレット、社長相曽光太郎の著作と思われる、発行年不詳）

菊池昌治1983「遠州の籠染め白緋」『月刊染織 a』No.26 株式会社染織と生活社

栗原雅也2019「型屋と染色工場と問屋と」『浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館



4-4



4-5



4-6



4-9



4-7



4-10



4-8



4-11

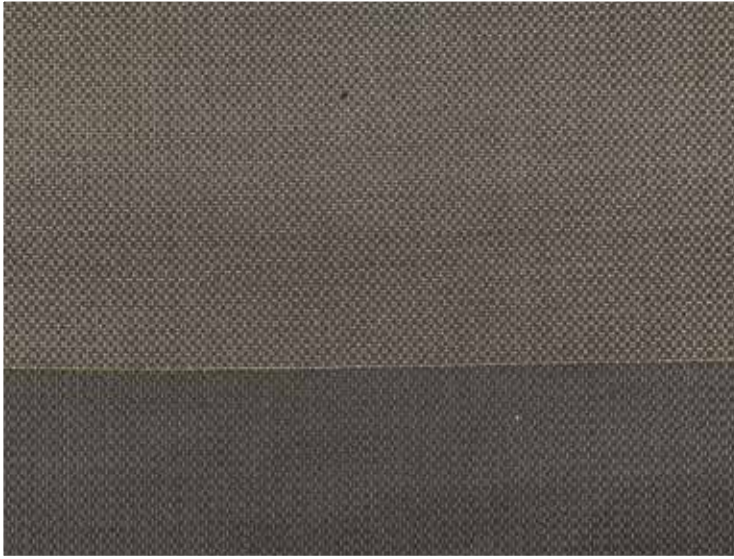


4-12





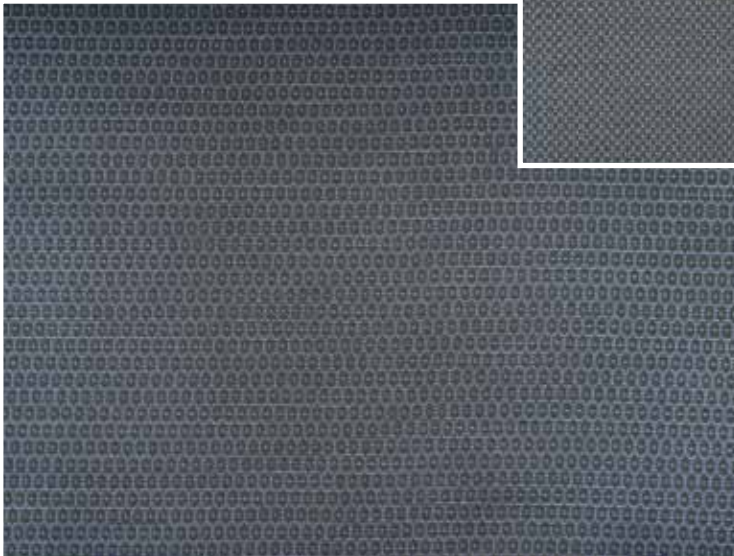
4-13



4-14



4-15



4-16





4-17



4-18



4-19



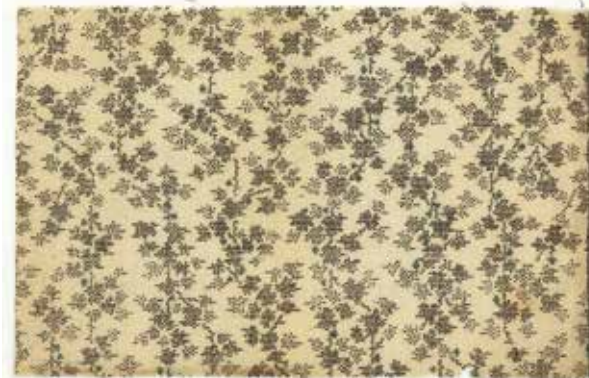
4-20



4-21



4-22



4-23



4-24



4-25



4-26



4-28



4-27



4-30



4-29



1. 柄の分類方法

(1) 類型分類と構成要素

型紙の多くを見渡した中で、型の柄を構成する共通の特徴や性質を抽出し、「類型」として分類の項目とした。さらに一枚一枚の型の柄の類型を構成する紋様や紋様の単位を「構成要素」として分類した。

(2) 類型分類の概要

類型は、微塵柄、割付柄、連続柄、小紋、縞柄、絵画風の柄の6種類に分類した。

①微塵柄：白緋に用いられる細かな柄。

②割付柄：紋様の単位が縦横、或は斜めに、規則正しく並べられた柄。

③連続柄：一枚の型の中で紋様の単位や規則性が認められない柄。規則性は認められなくても着尺の柄として連続する柄。

④小紋：伝統的な小紋の柄、或はそれに準ずるような柄。

⑤縞柄：線で構成される縞柄。及び紋様や紋様の単位の並びが縞を構成する柄。

⑥絵画風の柄：一枚の型に収まる絵画のような柄。

2. 彫刻技法と構成要素の概要 ー近代のものと思われる型紙ー

①割付柄 (5-2～5-5)

5-2、5-3、5-5は菱形紋様を単位とする割付柄、5-4は格子を単位とする割付柄である。彫刻技法は5-2と5-3は突き彫り、5-4は単位を錐彫りで描き、5-5は突き彫りで画された単位の内側を錐彫りで満たす。「竹村」の書き付けがある。

②連続柄 (5-6、5-7)

5-6は草が風になびくような様を、突き彫りで彫刻する。「カゴ723」の書き付けがある。5-7は三重の枳形模様を、突き彫りの桜の花びらで描く。

③小紋 (5-8)

一見格子模様のようなだが、四半と格子を組み合わせた小紋。彫刻技法は突き彫りと道具彫り。

④縞柄 (5-1、5-9～5-17)

5-1と5-17は格子縞をベースとして、鶴が舞う景色やカタバミが竹垣に絡む様を描く。彫刻技法は突き彫りと、鶴とカタバミの茎の背景は錐彫りと「角」(杉原 1968)の道具彫りである。5-9は錐彫りと「角」の道具彫りの段々縞である。5-10～5-16の彫刻技法も突き彫りと錐彫りが主体で、15は錐彫りと「角」の道具彫りで縦縞を描く。井桁縞が斜め方向に重なり合う様はいかにも染め縞である。5-10と5-11、5-16も縦縞で、5-11は2本の筋と網代紋様で縦縞を描く。5-12は流れるような横縞と直線的な縦縞を組み合わせる。5-13は南天の木であろうか、幹と細い枝を組み合わせ縦縞が構成されている。5-14は広い斜めの縞を、細かな波のような縦縞で満たしている。チョークで「キカイ中」の書き付けがある。機械(カゴヅケ)の中形の意味だろうか。

⑤絵画風の柄 (5-18、5-20、5-21)

5-18の絵柄は竹垣に絡むハギかユキヤナギだろうか。枝の背景は錐彫りと「角」の道具彫りである。5-20は夏の流水の庭、5-21は冬の流水の庭だろうか。5-20の霞は「棒」を組み合わせた道具彫り、5-21の雪華のような紋様は「釣鹿の子」の道具彫りである。

3. 彫刻技法と構成要素の概要 —1950年台以降の型紙—

彫刻技法は、5-22～5-40の全て錐彫りで彫刻している。5-26～29と5-34、5-38は、「緋」の道具彫りも使用している。

①微塵柄（5-22～5-29）

白緋の微塵柄である。

②割付柄（5-30～5-34）

5-30、5-31、5-34は菱形紋様を単位とする割付柄である。5-31の菱形紋様の中には、琉球柄風の鳥の図柄が配されている。5-32は分銅紋様を単位とし、5-33は紗綾形（万字結び）を単位とする。

③連続柄（5-35）

行儀の小紋で満たした長方形の単位と、花唐草が描かれた長方形の単位が不規則に配置されているが、ホシを合わせて送れば連続する柄となる。

④縞柄（5-36～5-38）

5-36と5-38は立湧風の縞柄、5-37はよろけ縞である。

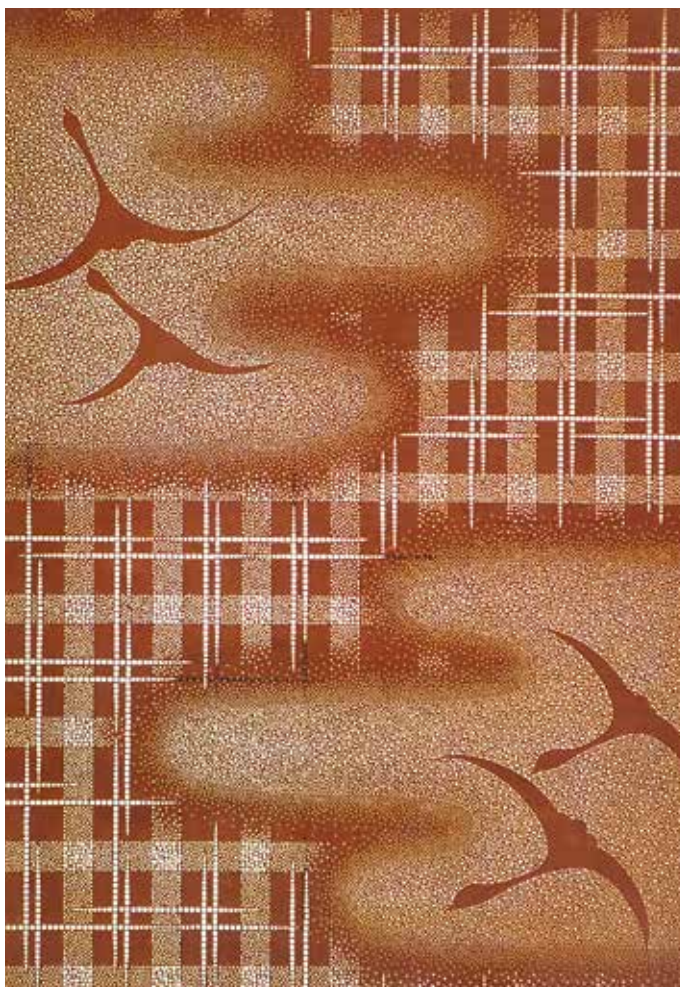
⑤絵画風の柄（5-39、5-40）

5-39は、草木の間に垣根が配置された庭園を描いているようだ。5-40は、唐草を絡めて、円形を連ねた柄を描いている。連続柄と捉えることもできる。

【参考文献】

杉原信彦 1968「資料9 道具彫 彫口見本」

『染の型紙』京都国立博物館



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5

5-6

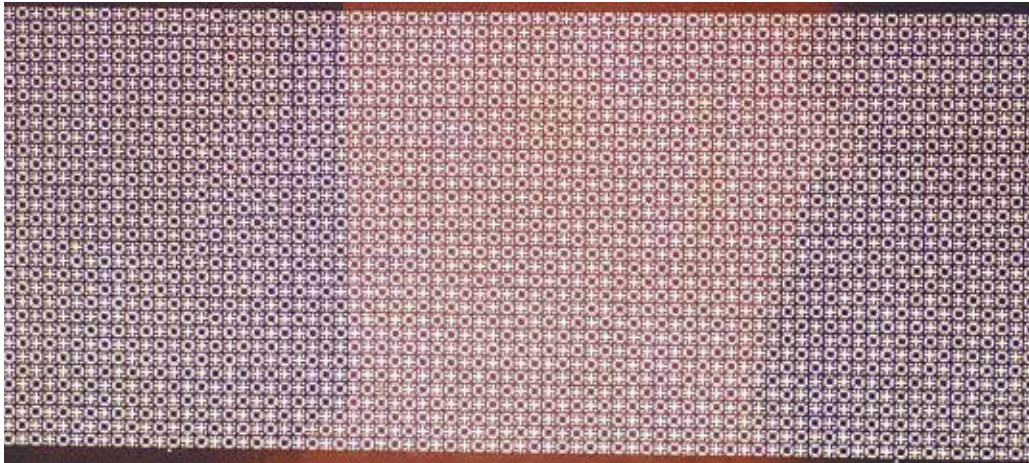


5-7

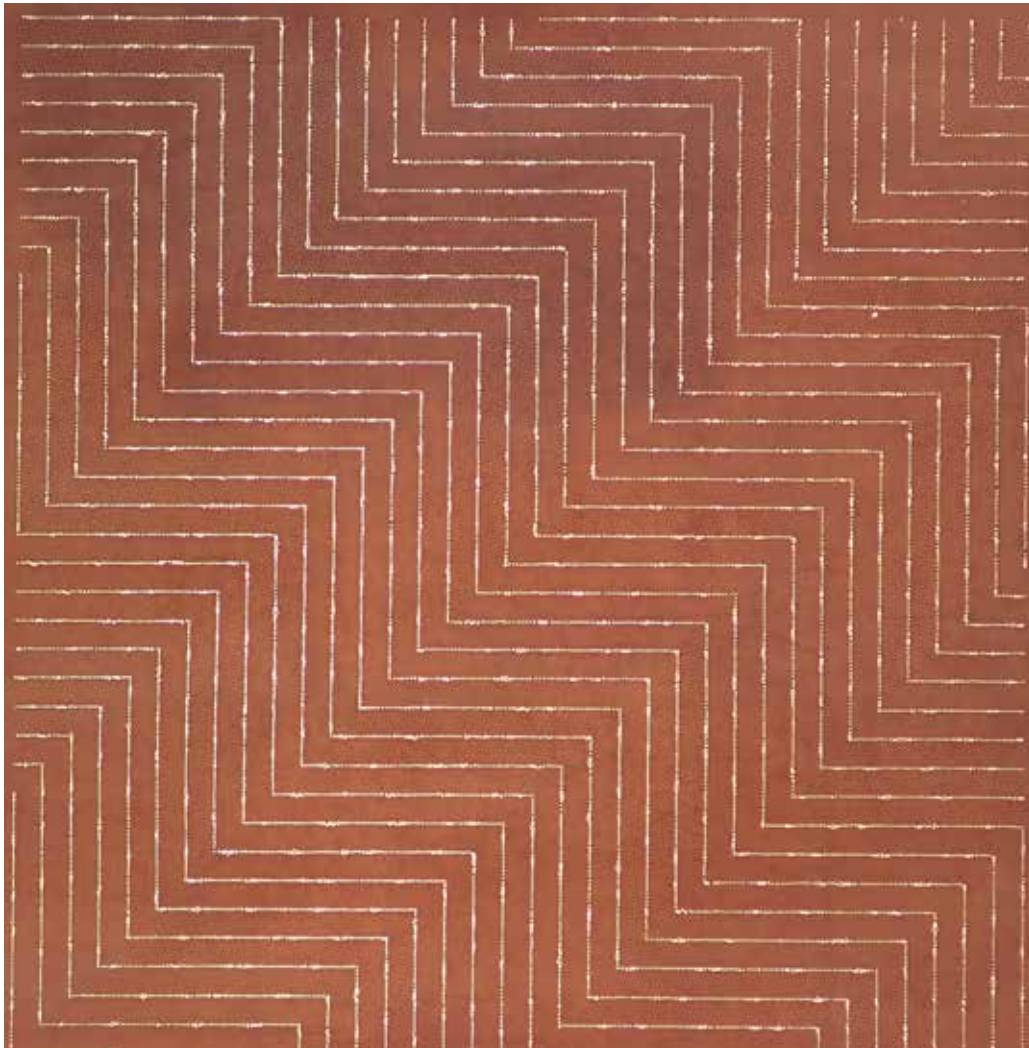




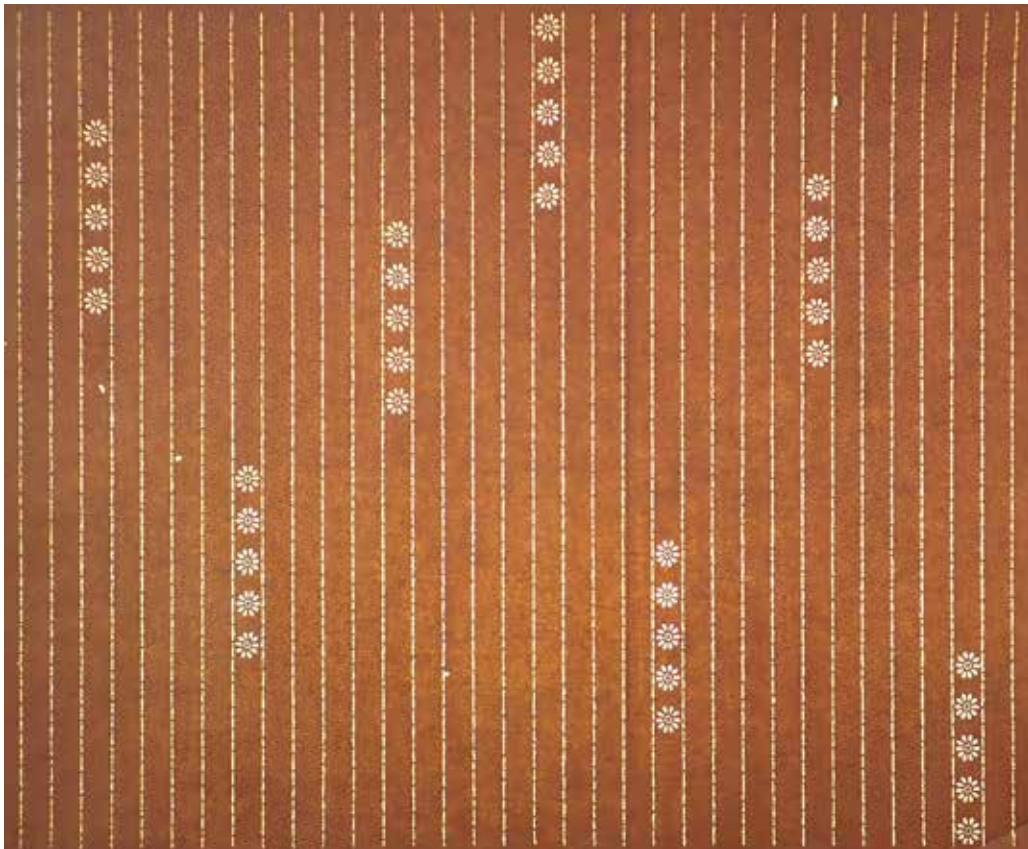
5-8



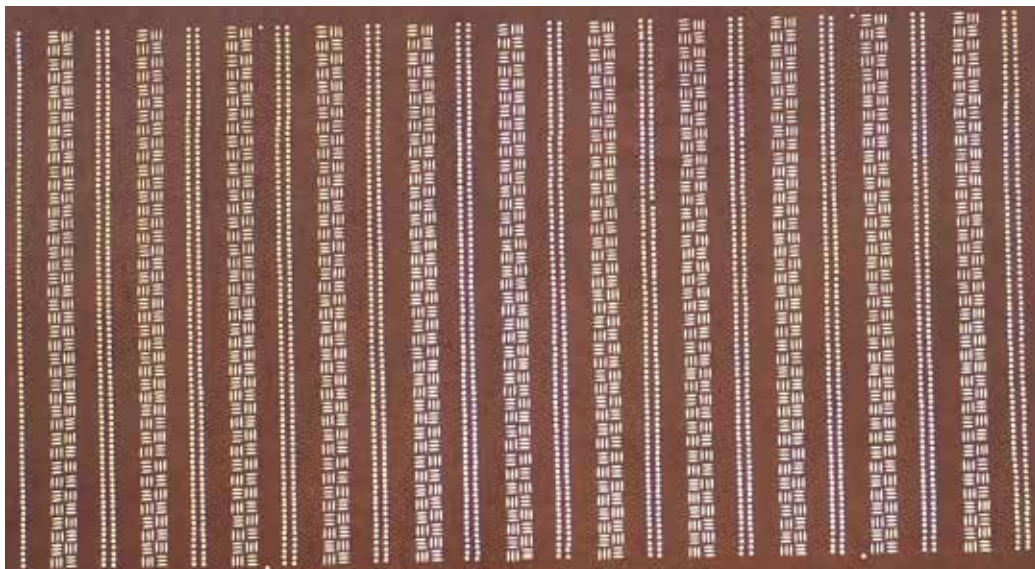
5-9



5-10

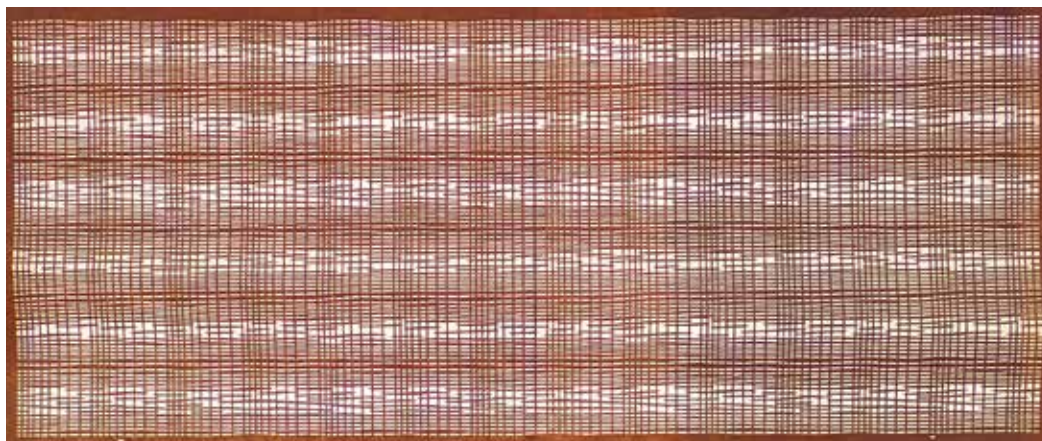


5-11





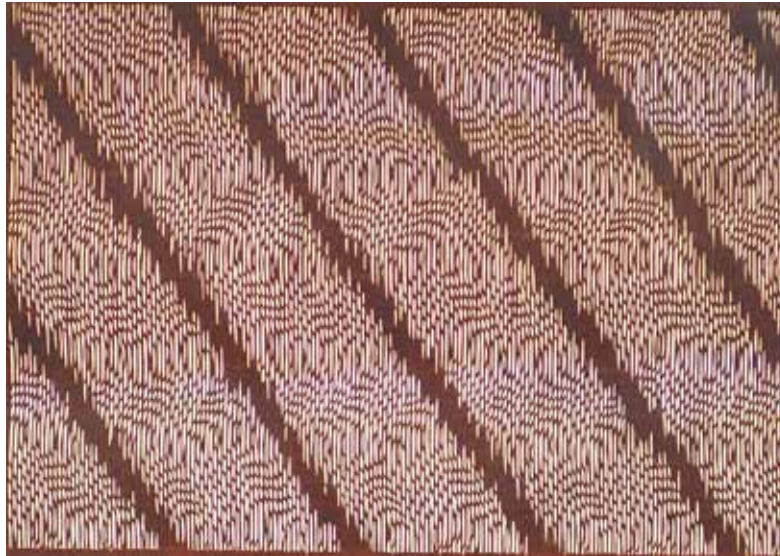
5-12



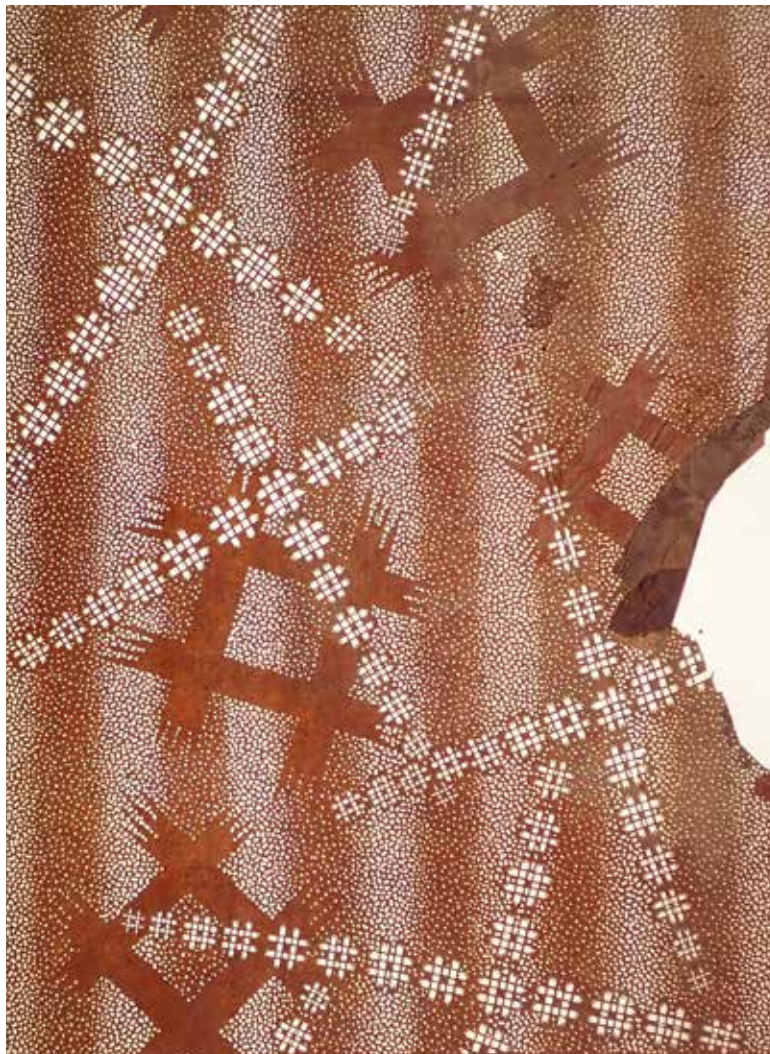
5-13



5-14

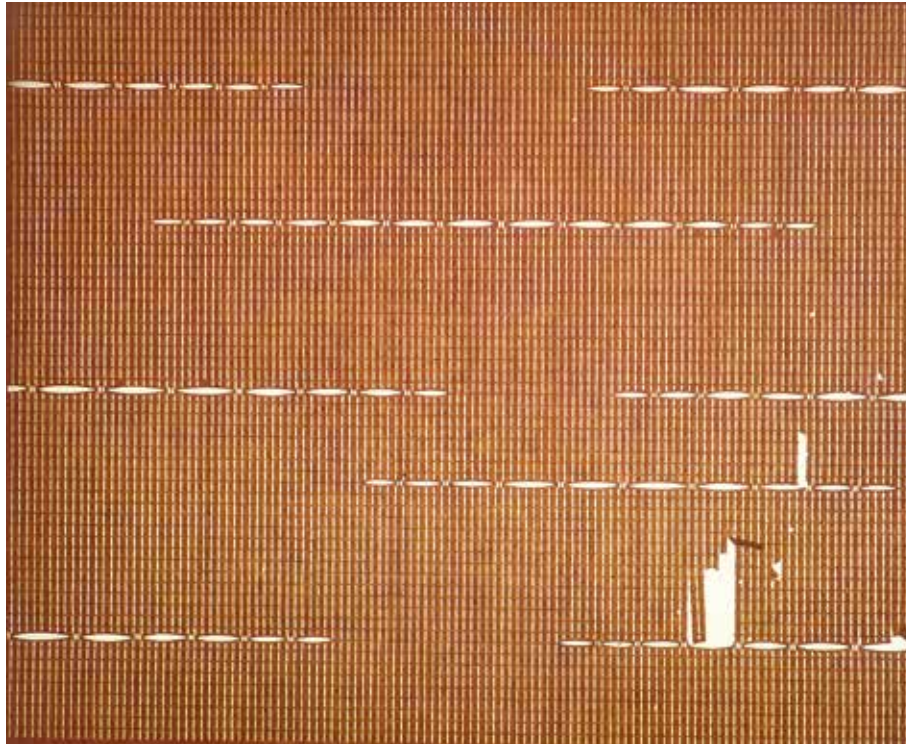


5-15

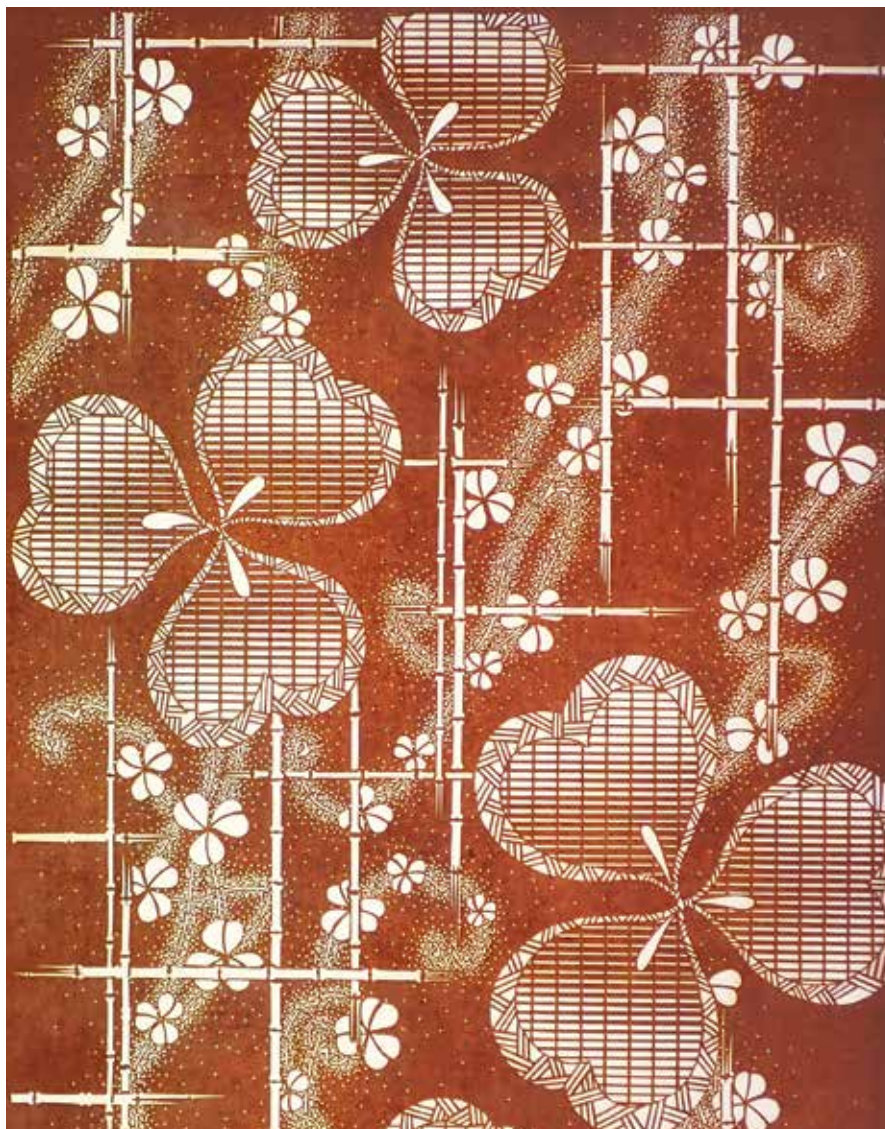




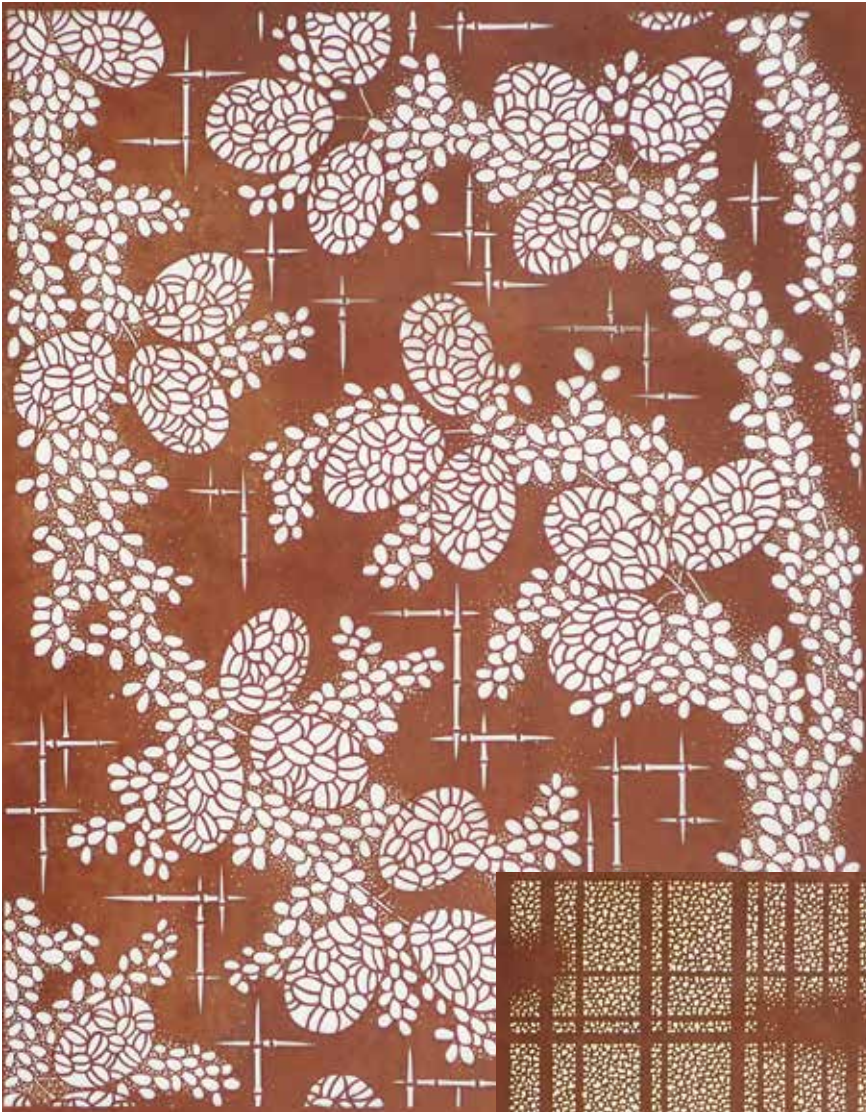
5-16



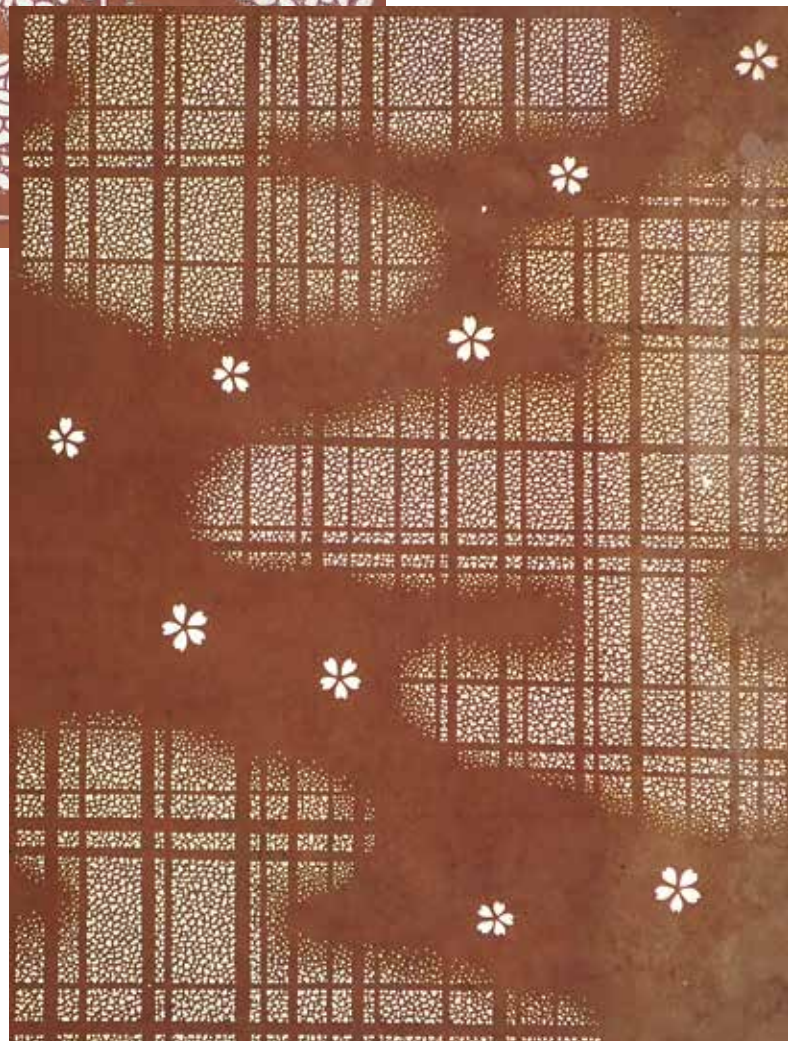
5-17



5-18

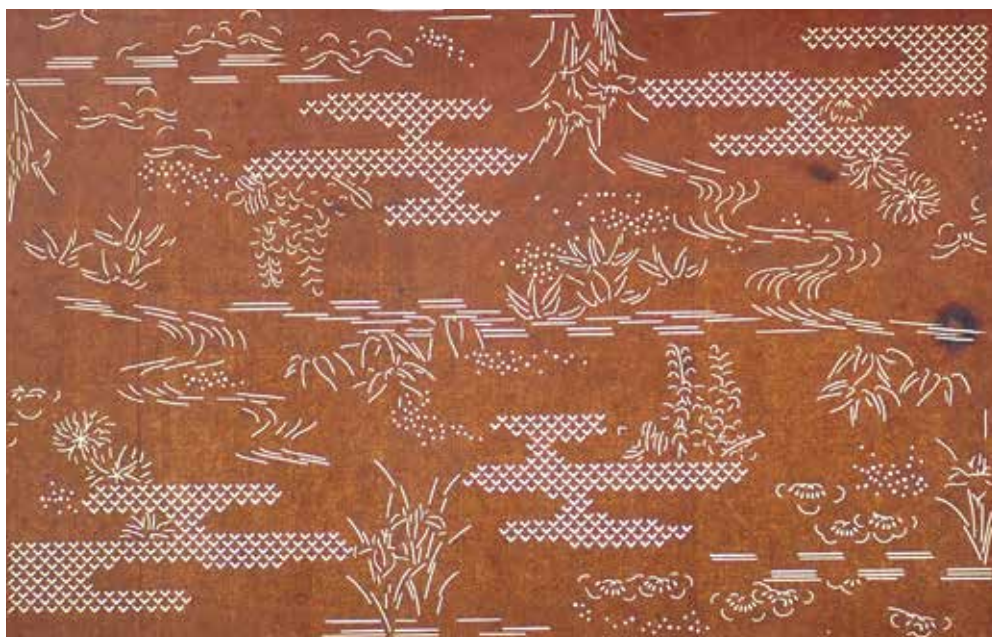


5-19

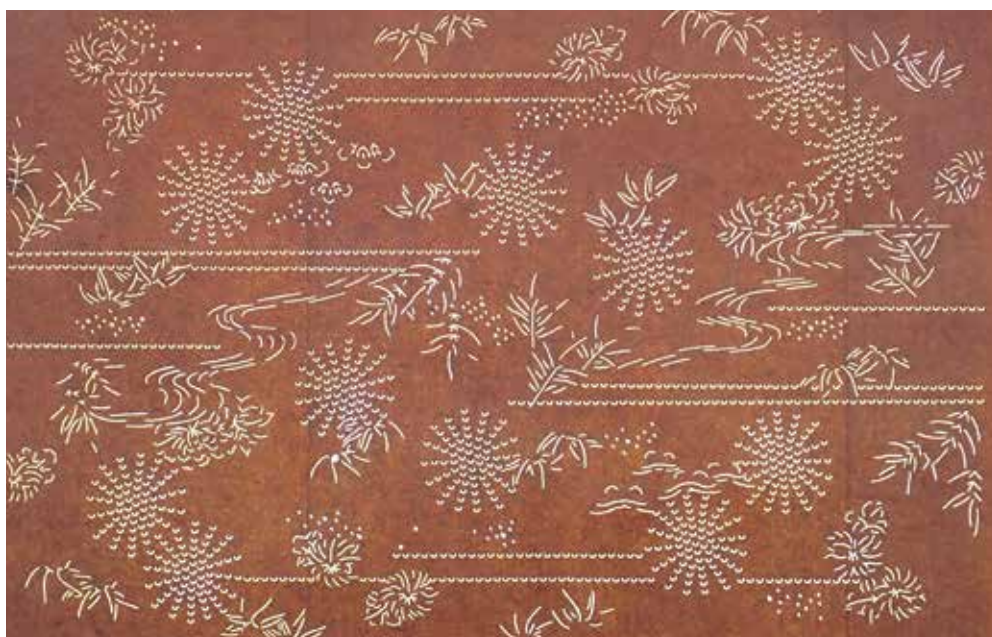




5-20



5-21



5-22





5-23



5-24



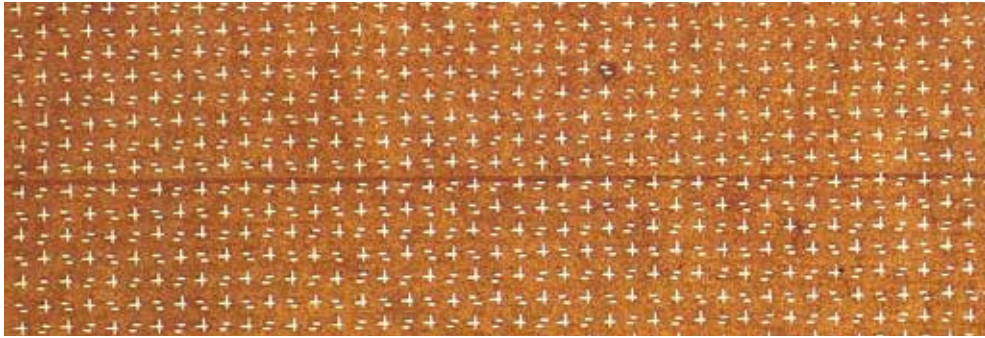
5-25



5-26



5-27



5-28

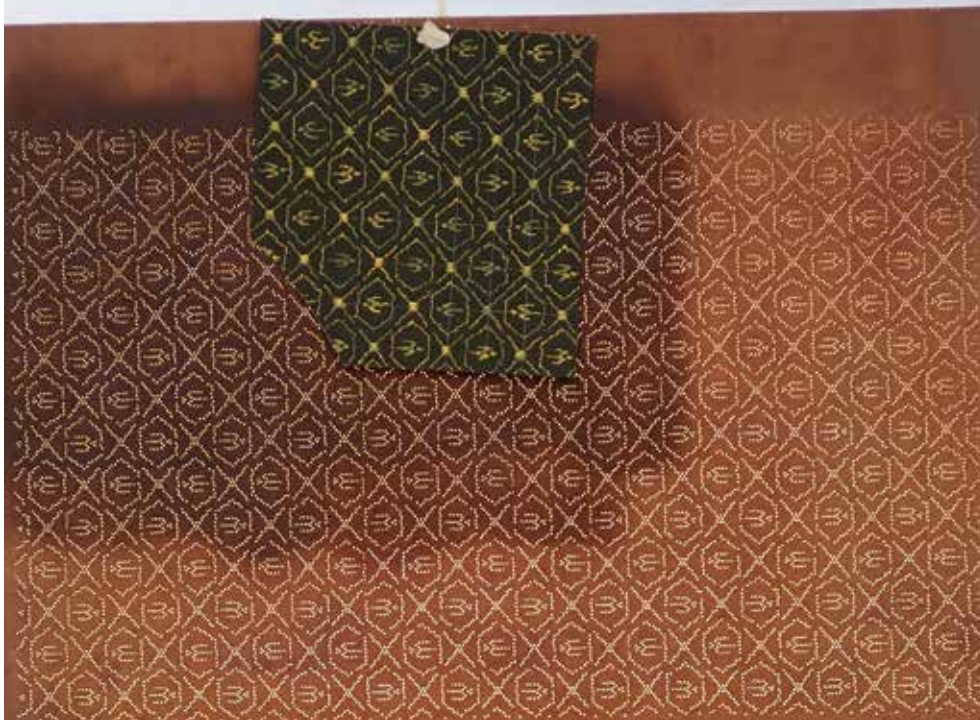


5-29



5-30





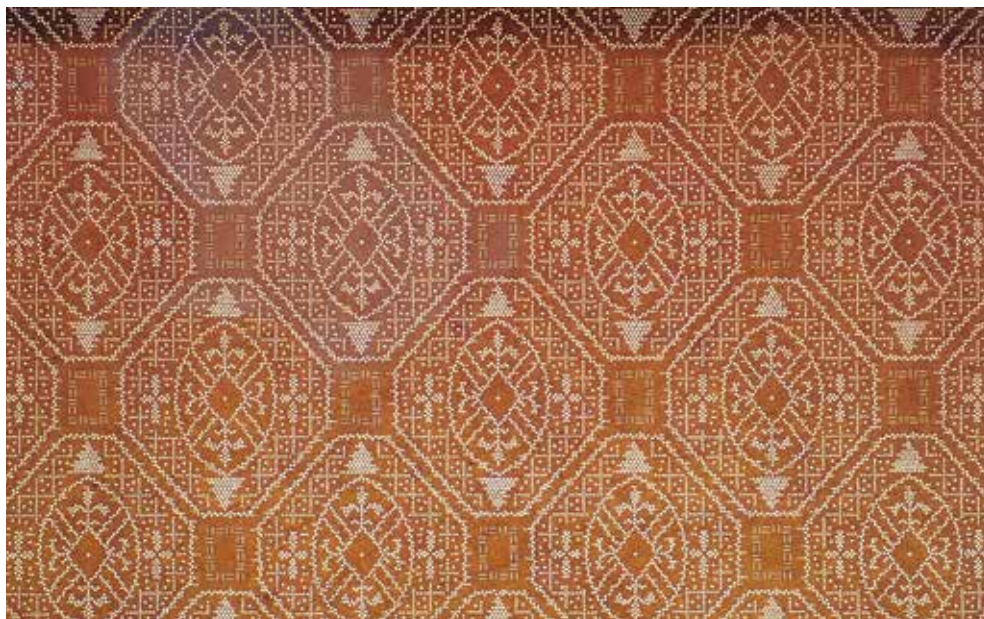
5-31



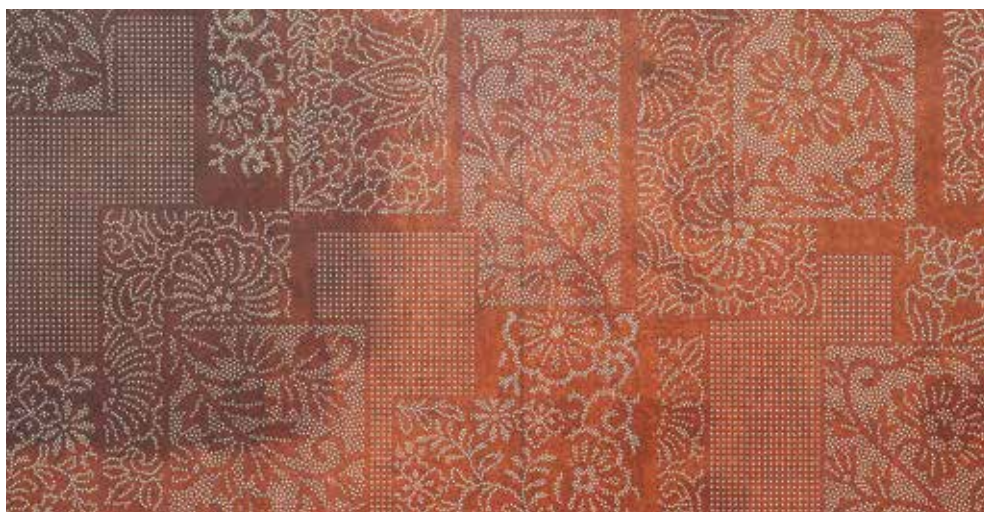
5-32



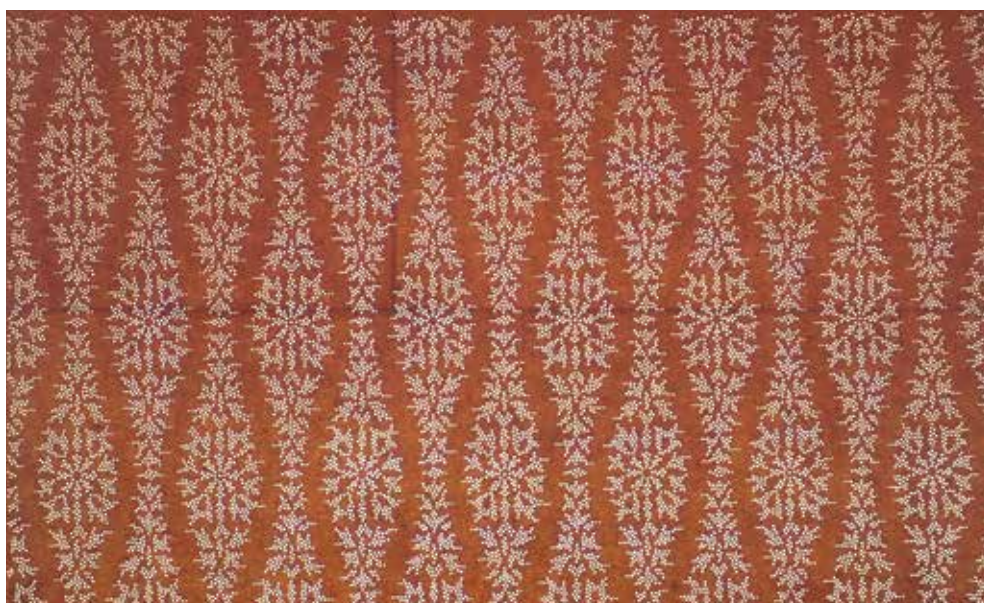
5-33



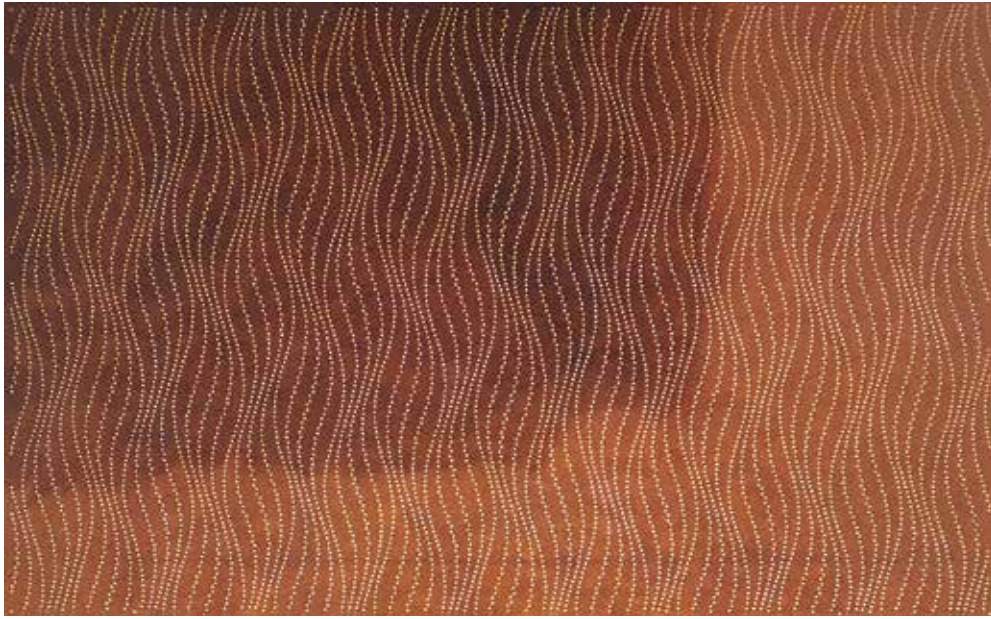
5-34



5-35



5-36



5-37



5-38



5-39



5-40

資料編 第6章 書き付けの分類と集成

6-1



6-2



6-3



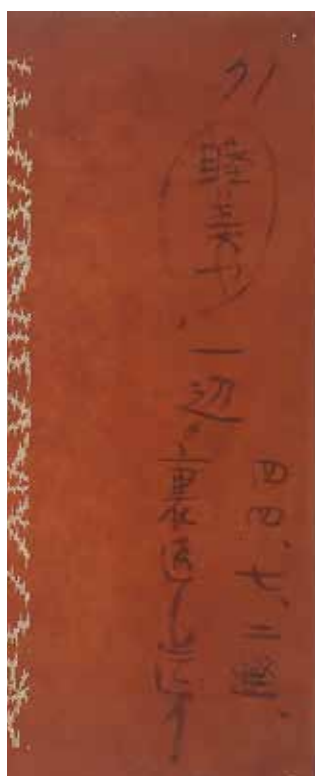
6-4



6-5



6-6



6-7



6-8



1. 1950年台以降の型紙の書き付け

①定型的な書き付け (6-1～6-8) 6-2は「昭和式拾八年二月十二日 式色二枚堀 (彫)」、6-5は「2 2 大橋 四一、五、一四 マンガン 二色」、6-8は「1 8 大橋 五十五、二、二十二 裏返し送り」と墨書されている。このように(番号)(産元)(年月日)(染料の種類や色)(色数あるいは遍数)(送りの方法)(彫刻所)が定型的に並ぶ。

②1.8尺の書き付け 6-9は「1 2 8 二八、十一、二十四 裏返し送り 林 二色 1.8尺」、6-10は「1 2 9 二八、十一、二十四 裏返し送り 林 二色 1.8尺」と墨書されている。「林」は林型紙彫刻所である。浜松のこの時期のカゴの送り幅(外周)は大半が1尺6寸で、彫刻師からの聞き取りでもカゴヅケの型紙は1尺6寸になるように彫ると話していたが、外周1尺8寸のカゴもあるという例である。

③彫刻の指示をする書き付け 6-11には「此の輪かくを消す」と墨書されている。

6-9



6-10



6-11



2. 近代のものと思われる型紙の書き付け

1950年台以降の書き付けのような、定形の書式のようなものは認められないが、屋号のようなものは型の左肩、カゴヅケに関わる書き付けや用途を示すようなものは型の下が多いようである。

①屋号のような書き付け（6-12～6-17） 6-14は「竹村 ⊕ 拾八柄入」、6-15は「竹印見本□付」、6-17は「七六三号 竹印」と墨書されている。

②記号のような書き付け（6-18～6-22） 6-18は墨書で「舎 2 4 並」、6-21はペン書きで「グ 3 5」、6-22もペン書きで「竹印十六 1 7」と書かれている。

③カゴヅケに関わる書き付け（6-23～6-31） 6-24はペンで「□□□ 籠」と書かれ、6-26は「5 5 9 越 手付籠付両用」、6-27は「1 2 7 8 籠」、6-28は「竹（ムラ）古型紙（カゴ）」と墨書されている。6-31はチョークで「キカイ中 山印」と書かれている。

④用途を示す書き付け（6-32～6-34） 3点とも「店用」と墨書され、用途を示す書き付けだろうか。

⑤柄に関する書き付け（6-35） 6-35は墨書で「大柄」と書かれている。

⑥“竹村”の書き付け（6-36、6-37） 6-36と6-37は、型紙を束ねた和紙の帯に「竹村様 一〇三一号」「竹村様 一〇二七号」と墨書されている。カゴのエッチング加工を開発した（相曽 発行年不詳）といわれる竹村形染の竹村松三郎と関わりがある型紙なのか、前出のカゴヅケに関わる書き付けとともに興味深い書き付けである。

⑦彫刻の指示をする書き付け（6-38～6-43） 6-38は墨書で「寸法□□ガヘシ為尺七寸」と書かれている。6-39から6-41はペン書きで、6-39は「半分切テ下サイ」、6-40は「御面倒様デスガ竹の伏（節）の細キ所少し筆ヲ入レテ頂キタイノデス」、6-41は「コノ先の吊刃モ今少シ白ク成ル様タタキ入レテ下サイ」、6-42は「上□□バ□サ二分位イ」と書かれている。6-43は墨書で「九六〇 至急」である。

3. 1950年台以降の型紙の定型的な書き付けの意義

2018（平成30）年、浜松市博物館ではカゴヅケに携わった人々を訪問して聞き取り調査を行い、技術やカゴヅケにかけた思いを記録（池川2019、栗原2019）することを試みた。話を伺う中で、産元、染色工場、型紙彫刻所、彫刻師が口を揃えたように言ったことがある。「産元と染色工場と、彫刻所とデザイナーが揃って流行の調査に行き柄を作り、マンガン染色の紺を染めるためにマンガン先染め糸の織り込み方を織物屋と相談し、織物のように染め上がるように彫刻をした」と。型紙一枚一枚に書かれた（番号）（産元）（年月日）（染料の種類や色）（色数あるいは遍数）（送りの方法）（彫刻所）という定型的な書き付けがその記録のように見え、型紙一枚一枚の調査と保存の必要性を感じるのである。

【参考文献】

相曽光太郎 発行年不詳『浜松白緋マンガン』株式会社相曽形染

池川恵子 2019「相曽形染の思い出～相曽泰子一人語り～」『浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館

池川恵子 2019「相曽形染の思い出～鈴木啓仁一人語り～」『浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館

栗原雅也 2019「型屋と染色工場と問屋と」『浜松の染色の型紙－機械染色の型紙を中心として－』浜松市博物館



6-12



6-13



6-14



6-15



6-16



6-17

6-18



6-19



6-20



6-21



6-23



6-22



6-24





6-25



6-26

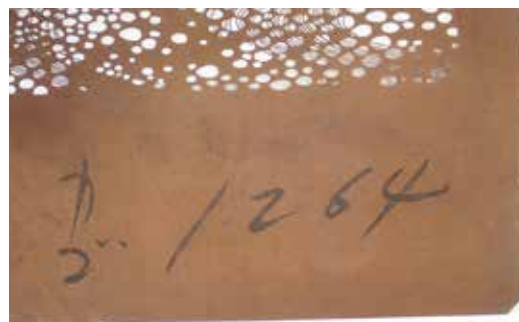


6-27

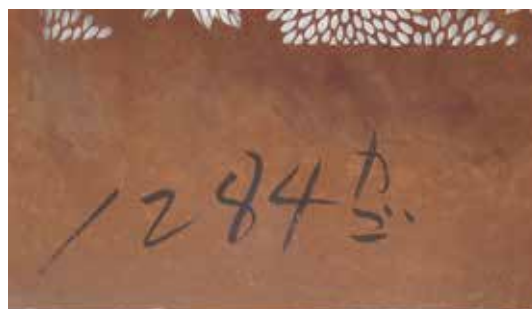
6-29

6-31

6-28



6-30



6-32



6-33



6-34



6-38



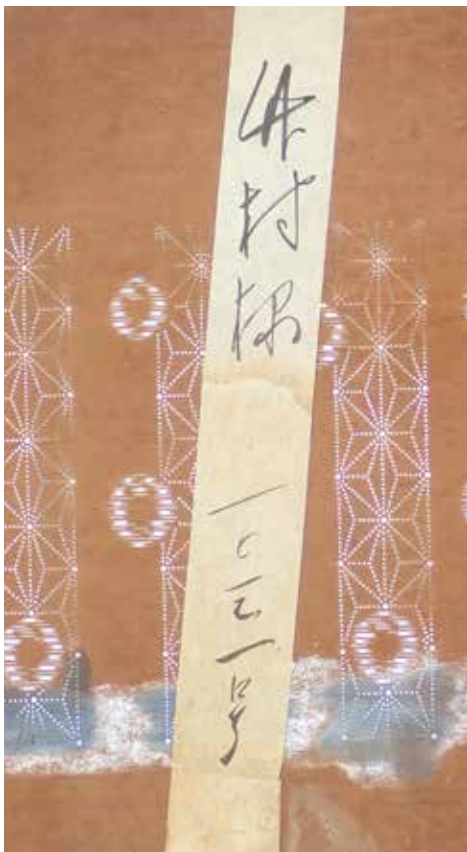
6-35



6-37



6-36



6-39



6-40



6-41



6-43



6-42



資料編 第7章 商印の分類と集成

1. 近代のものと思われる型紙に捺された商印など

①**検印** 「桜のマークに検」(7-1、7-2)は「検」一文字、「壹等印」(7-3、7-4、7-5)も長円形の枠に3文字だけである。帰属はわからない。

「ヤマ(富士)エ壹等印」(7-31、7-32)の捺された位置は、型紙の長辺の縁の中央で、次の節に紹介する型地紙製造業者であるナカ辰や大杉型紙工業の商印も同じ位置に捺されている。

②**組合の印** 3種類の組合印と思われる印が確認でき、内二つには「伊勢」の文字が入っている。

「伊勢染型紙商業組合検査証」(7-6)

「染型商検」(7-7、7-8)

「共販検査印 伊勢□□工業組合 検」(7-9、7-10)

型紙業界組織の変遷について「伊勢型紙業界産地診断報告書」(三重県1978)に詳しいが、この三つの組合については、名称や年代を特定することができなかった。

③**型紙商の商印** 型紙商の所在は、伊勢をはじめ、東京、足利、京都の名が見られる。

「東京市東両国横綱町一―五 萬型紙店 河合柳三郎」(7-11、7-12)

「伊勢形紙北村□□店足利市 ㊦ 梅橋商店入」「北□製」(7-13、7-14)

「白子田島特製」(7-15)

「勢州白子ヤマヒ□□□」(7-16)

「三重縣白子町宮佐特製」(7-17、7-18)

「京堀川二条下ル かたや茂右衛門」(7-19)

「形甚仕入改」(7-20)「形甚」は白子の「和田甚兵衛」の商印(一戸町教育委員会1992)である。「かたや茂右衛門」と「和田甚兵衛」は「東北歴史資料館資料集21型紙」(東北歴史資料館1988)にも紹介されている。

「星合彫製」(7-21、7-22)

「㊦ 特製」(7-23)

「桜のマークにエ」(7-24、7-25、7-33)

「南部特製」(7-34)

2. 1950年台以降の型紙に捺された商印

①型地紙製造業者の商印

「桜のマークに辰」(7-26、7-27、7-28) 鈴鹿市白子の型地紙製造業者ナカ辰の商印である。

「純生別製10番」(7-29) 純生別製9.8番」(7-30) 鈴鹿市白子の大杉型紙工業の商印である。10番、9.8番は型地紙の厚さの規格で、柿渋で貼り合わせた和紙の枚数や用途(三重県1978)が異なる。

【参考文献】

一戸町教育委員会1992「一戸町文化財調査報告書第31集 いちのへの型紙」
東北歴史資料館1988「東北歴史資料館資料集21 型紙」
三重県商工労働部1977「伊勢型紙業界産地診断報告書」三重県



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



7-8



7-9



7-10



7-11



7-12



7-13



7-14



7-15



7-16



7-17



7-18



7-19



7-20



7-21



7-22





7-23



7-24



7-25



7-26



7-27



7-28



7-29



7-30



7-31



7-32



7-33



7-34

資料編 第8章 掲載作品目録

写真番号の見方：【0－00】は事業報告編の写真番号、
カッコのない0－00は資料編の写真番号である。

2016-052-1 株式会社相曽形染機械染色関係資料 カゴ

写真番号	資料番号	寸法 (mm)				歯車の 歯数	柄	書き付け		その他
		直径	外周	幅	型巾			外面	内面	
1-2、1-6	1	154	489	458	396	53	絵画	54 △		
1-3、1-6	2	154	488	457	395	53	割付柄	130	387	
1-4	3	153	489	501	441	53	微塵柄	1	53.10	
1-5	4	153	488	501	446	53	微塵柄	1	53.10	
1-7	7	154	488	458	394	53	微塵柄		53.2	
1-8	8	154	488	458	399	53	微塵柄		53.2	
1-9	9	154	488	501	444	53	微塵柄	84	52.8	
1-10	10	153	487	501	440	53	微塵柄	2	53.4	
1-11	29		縦 595	横 403			微塵柄			未製品銅版
1-12	31		縦 586	横 367			微塵柄			未製品銅版
1-13	35		縦 606	横 405			微塵柄			未製品銅版
1-14	58		縦 335	横 460			微塵柄			未製品銅版

2016-052-2 株式会社相曽形染機械染色関係資料 型紙 近代のものと思われる型紙

写真 番号	整理番号		寸法 (mm)				文様		技法				
	箱番号	番号	横	縦	型巾	送り巾	類型	構成要素	鋸彫り	突き彫り 引き彫り	道具彫り (鉋、棒)	道具彫り	
1-1 6-29	18	333	443.0	650.0	379.5	480.0	連続柄	流水、水玉		○			
1-15	14	103	440.5	650.5	369.0	480.5	連続柄	菊、流水、うちわ		○			
1-16	14	105	443.0	652.5	370.5	480.0	連続柄	クモの巣、水玉、落ち葉	○	○		○	
1-32	19	063	444.0	323.0	385.0	161.5	縞柄					○	
1-33	19	062	452.5	299.0	377.0	253.0	縞柄	格子縞		○			
1-34	19	048	—	—	375.5	180.0	縞柄	ハギ	○		○	○	
1-35	19	132	440.0	324.0	381.0	240.5	縞柄	菊 算木くずし	○	○			
1-36	17	010	453.0	374.0	378	256.0	割付柄	紺格子		○			
1-37	17	074	488.0	289.5	390	161.0	割付柄	紺格子	○	○			
1-38	17	068	436.0	436.0	369	244.5	小紋柄	鈴		○			
1-39 7-19 7-20	17	564	402.0	245.0	372.0	138.5	小紋柄	亀甲 その他(七宝つなぎで亀甲を構成)	○	○			
1-40	17	049	447.5	373.5	372.5	242.0	絵画風	流水、霞、菖蒲	○	○			
1-41	17	238	446.5	373.5	359.5	257.5	絵画風	竹垣 その他(丸窓のようなもの)		○			
2-1	17	1035	448.0	246.5	357.5	120.5	縞柄			○			
2-20	17	1002	452.5	288.0	379.0	127.5	縞柄	流水		○			
5-1 6-19	15	134	433.0	646.0	355.0	513.5	縞柄	ガン、 格子縞	○	○		○	
5-2	17	101	440.5	317.5	363.5	180.0	割付柄	紺		○			
5-3	17	102	494.0	292.5	396.0	160.0	割付柄	菱		○			
5-4	17	123	436.0	295.0	363	175.0	割付柄	市松模様	○	○			
5-5	17	918	439.0	316.5	384	160.0	割付柄	七宝繋ぎ	○	○			
5-6 6-23	17	788	470.0	286.5	393	120.5	連続柄	風になびく草		○			
5-7	18	192	446.5	654.0	354.5	481.5	連続柄	桜の花びら		○			
5-8 7-16	17	1032	407.5	260.0	356.5	146.0	小紋柄	市松模様 四半格子		○		○	
5-9	15	288	440.5	543.0	370.0	392.0	縞柄	段々縞	○			○	
5-10	15	342	502.5	652.0	393.0	482.0	縞柄	菊	○	○			
5-11 7-23	17	096	433.5	326.0	336.0	181.0	縞柄	網代模様	○	○			
5-12	19	012	493.0	288.0	389.0	160.0	縞柄			○			
5-13 6-38	15	293	440.0		355.5	511.5	縞柄	櫛か 縞状にからまり合った 櫛の枝に葉を配す		○			
5-14 6-31	19	096	442.5	443.0	366.0	256.0	縞柄	波模様		○			
5-15	18	163	438.5	646.5	352.0	480.0	縞柄	井桁紺	○	○		○	
5-16	15	343	446.0	655.9	392.6	483.2	縞柄			○			
5-17	15	64	441.0	647.0	375.0	481.5	縞柄	カタバミ 竹垣の格子縞	○	○		○	
5-18 7-12	15	188	439.5	648.5	377.0	482.5	絵画風	萩、竹垣	○	○		○	
5-19	15	245	445.5	658.0	353.5	479.5	縞柄	桜、格子縞	○	○		○	
5-20	17	048	447.5	373.5	372.5	242.0	絵画風	流水、霞、菖蒲	○	○			
5-21	17	201	371.5	375.0	371.5	241.5	絵画風	笹、花。流水		○		○	
6-12	17	741	448.5	242.0	364.0	128.0	縞柄			○			
6-13 7-8	17	921	448.5	218.5	378.5	128.5	縞柄	竹		○			
6-14	15	226	445.5	652.5	375.0	480.5	縞柄			○		○	
6-15	15	340	441.0	661.5	355.5	513.0	連続柄	菊	○	○		○	
6-16	17	866	448.0	217.0	375.5	128.5	縞柄	網代風		○			
6-17	15	295	448.0		355.0	482.0	連続柄	網目文様の地に百合の花を配す	○	○			
6-18	19	025	449.0	314.5	371.5	128.0	縞柄					○	
6-20	15	137	443.5	655.5	356.5	510.0	縞柄	アヤメ	○	○		○	
6-21	15	244	439.5	645.5	342.0	481.5	縞柄	網代文	○	○			
6-22	17	230	453.0	372.0	362.5	256.5	縞柄	四方花菱		○			
6-24	18	104	—	655.5	392.5	481.5	縞柄	流水		○			
6-25	17	066	447.0	329.0	378.0	239.5	縞柄	桔梗		○			
6-26	17	067-2	447.5	329.5	376.0	241.0	縞柄	桔梗		○			



	書き付け(ペン書きは注記しない) (墨書)(赤鉛筆)(チョーク)	その他 (文様の要素、数もの、スタンプ等)
	"カゴ 1 2 6 4"(墨書)	
		菊慈童
		雨上がり
	"□中"(墨書) "店用"(墨書)	
	"△"	
	"憲 2 0"(墨書)	
	"い印 五二号"(墨書)"力"(墨書)	
	" 2 (赤鉛筆)"	大柄格子、010,011,012、3枚型
	"○(丸、墨書)"	斜格子目風に配置された斜十字罫
		鈴
	" 1 8 4 (墨書)"	"形基□□"(商印)"京□川二条下ル □屋義太夫"(商印)
		初夏の水辺、048と糸綴じ
	"竹印十一17" "御面倒様デスガ竹の伏の細キ所少し筆ヲ入レテ頂キタイノデス"	
		図案貼付
		図案(91mm×61mm)が添付されている
	"竹印 四一三"	絵刷あり(墨) 割付線あり(鉛筆) 鉛筆で書かれた下絵のようなもの(鉛筆、朱色の線)
	"表" "裏"墨書	罫柄
	"用"	
		市松模様、古文書再利用
	"竹村(墨書)" "○用(墨書)"	七宝繋ぎを十字罫でくる
	"カゴ 7 2 3 (墨書)"	カゴツケに適した罫柄
	"グ3537" "一刃"	"星合彫製"(商印) 割付線
	裏側に"第九号(墨書)" "様(墨書)"	表側に"勢州白子 △ ○○○"(商印)
	"い印七〇一号"(墨書)" 7 0 1 "	
	⊕	
		網代模様風の縦罫、"⊗ 特製"商印
	"⊗"(墨書、○で囲まれている)	
	"七六五号 竹印"(墨書)"寸法□□ガヘシ為尺七寸"(墨書)	
	"キカイ中"(チョーク)"山印"(チョーク)" 8 "(墨書)" 7 "(墨書、裏面)	チョークで下書き
		錐彫と細かい方形の道具彫りによるぼかしの縦罫の上に、 リボン状に連ねた井桁罫を、様々な向きに配置する
	" ⊕ "	
	"竹印"(墨書)	
		"東京市東両国横綱町一五 萬形紙店 河合耕三郎"(商印)
	"グ9"	"星合彫製"(商印)
		初夏の水辺、049と糸綴じ
	"竹十一 16"	"桜マークに検(スタンプ)" "壹等印(スタンプ)" 17-202とセット
	"△(墨書)" "上(白チョーク)"	"桜マークに検(スタンプ)"
	"△(墨書)"	"桜マークに検(スタンプ)" "染型商検(スタンプ)" 17-922と同型
	⊕	
	竹印見本□付	全体の下書き
	"⊙(墨書)"	"桜マークに検(スタンプ)" "染型商検(スタンプ)"
	"七六三号 竹印"(墨書)	
	"△(墨書)" " 2 4 "(墨書) "並"(墨書)	
	"竹印 四三八"	
	"グ35"	
	"竹印十六17"	検印
	"□□□ ⊗"	
	" 5 6 0 ⊗ "(墨書) "筆付手付両用"(墨書)	リンドウ(桔梗?)
	" 5 5 9 ⊗ "(墨書) "筆付手付両用"(墨書)	リンドウ(桔梗?)



写真 番号	整理番号		寸法 (mm)				文様		技法				
	箱番号	番号	横	縦	型巾	送り巾	類型	構成要素	錐彫り	突き彫り 引き彫り	道具彫り (鉋、棒)	道具彫り	
6-27	18	099	460.5	652.5	391.5	481.5	割付柄	竹の葉		○			
6-28	18	129	445.0	661.5	378.0	511.0	縞柄	ナデシコの花筏、流水	○	○			
6-30	18	335	441.5	649.5	383.0	480.0	連続柄	菊		○			
6-32	22	289	440.0	317.0	383.0	161.0	縞柄	格子、花	○	○			
6-33	17	819-2	442.5	321.5	383.5	160.5	縞柄	横縞、十字縞	○	○			
6-34	19	067	502.0	296.0	391.0	160.0	縞柄	格子縞		○			
6-35	17	077			365	165.5	絵画風	ツワブキ	○	○			
6-36	17	125	446.0	332.1	337.1	181.0	縞柄	麻の葉	○	○			
6-37	17	013	—	321.5	360.5	181.0	縞柄	琉球風柄	○	○			
6-39	17	834	448.0	266.5	366.5	128.0	割付柄	紺		○			
6-40	17	238	446.5	273.5	359.0	256.5	絵画風	竹垣、円窓		○			
6-41	18	248	446.0	657.0	—	511.5	縞柄	竹	○			○	
6-42	19	207	447.0	338.0	357.0	241.0	縞柄	格子縞				○	
6-43	22	223	440.0	201.0	353.5	119.5	小紋柄	七宝繋ぎ				○	
7-1	17	038	449.0	329.0	363.0	256.5	連続柄	菊	○	○			
7-2	17	127	449.0	372.5	366.0	257.0	縞柄	よろけ縞、千鳥		○			
7-3	17	050	447.0	373.0	372.0	242.0	絵画風	流水、秋草		○		○	
7-4	17	136	456.0	273.0	363.0	256.5	縞柄		○	○			
7-5	17	054	446.0	368.5	370.5	241.0	連続柄			○			
7-6	17	430	455.5	267.0	372.5	120.5	小紋柄	カタバミ		○			
7-7	17	708	448.5	218.0	376.0	128.5	縞柄	網代風		○			
7-9	17	449	448.5	224.0	362.5	128.0	連続柄	十字縞		○			
7-10	17	503	442.0	219.5	374	128.5	縞柄	流水		○			
7-11	15	175	443.0	652.5	373.5	483.0	割付柄	その他(井桁模様)		○		○	
7-13	17	835	490.0	222.5	398.0	120.5	連続柄		○				
7-14	17	1085	443.5	229.0	395.0	133.0	小紋柄	雪華	○				
7-15	17	949			390.0	120.5	縞柄		○	○		○	
7-17	19	186	433.5	312.0	361.5	120.5	縞柄	その他(十字縞)		○			
7-18	19	195	440.5	254.5	375.0	120.5	縞柄	流水		○			
7-21	15	231	445.0	655.0		481.5	縞柄					○	
7-22	15	306	453.0	658.0		482.5	連続柄	桜の小紋 かすみ	○			○	
7-24	17	002	444.5	334.5	369.0	241.5	割付柄	亀甲		○			
7-25	17	200	450.0	377.0	379.0	256.5	絵画風	麻の葉、松、竹、ボタン		○		○	
7-31	17	004	450.5	330.0	362.5	256.5	連続柄			○			
7-32	17	495	450.0	223.5	357.0	127.5	割付柄	紺		○			
7-33	17	033	447.5	339.5	372.0	256.5	絵画風	御所車に霞		○		○	
7-34	18	075	440.5	652.0	358.5	483.5	縞柄	蔓草		○			

2016-052-2 株式会社相曽形染機械染色関係資料 型紙 1950～1970年台

写真 番号	整理番号		寸法 (mm)				文様		技法				
	箱番号	番号	横	縦	型巾	送り巾	類型	構成要素	錐彫り	突き彫り 引き彫り	道具彫り (鉋、棒)	道具彫り	
1-17	6	127	605.5	453.5	392.0	484.5	割付柄	植物	○				
1-18	7	053	454.5	602.5	392.5	483.0	縞柄	もみじ	○				
1-19	10	226	451.5	395.0	309.5	241.0	微塵柄				○		
1-20	10	235	457.0	379.0	402.0	240.0	微塵柄	横縞風、井桁縞			○		
1-21	10	238	472.0	374.0	373.0	240.0	微塵柄		○		○		
1-22	10	256	455.5	381.0	407.5	242.0	微塵柄		○		○		
1-23	6	008	456.0	451.0	393.5	242.5	割付柄	麻の葉	○				
1-24	6	095	455.0	455.0	392.5	241.5	割付柄	麻の葉	○				
1-25	8	207	454.5	378.0	362.5	242.0	割付柄	花菱	○		○		
1-26	8	053	453.0		362.0	241.5			○				
1-27	9	009		453.0	392.0	242.0	割り付け	立涌風	○				
1-28	9	040	450.0	447.5	393.5	161.5	割り付け	市松	○				
1-29	7	078	456.5	454.5	392.0	242.5	割り付け	立涌	○				
1-30	7	080	458.0	456.5	393.0	242.5	割り付け		○				
1-31	6	021	604.0	457.0	484.0	394.0	割付柄	亀甲、流水	○		○		
5-22	10	024	506.0	379.0	416.0	241.0	微塵柄	横縞風			○		



	書き付け(ペン書きは注記しない) (墨書)(赤鉛筆)(チョーク)	その他 (文様の要素、数もの、スタンプ等)
	" 1 2 7 8 籠"	
	"竹ムラ古形紙カゴ"(墨書)	
	" 1 2 8 4 カゴ"(墨書)	
	"店用"(墨書)	
	"□用"(墨書)	
	"□用"(墨書)	
	"大柄"(墨書)	花
	"竹村様 一〇三一号"(和紙の帯に墨書)	変わり麻の葉、耕の円
	"竹村様 一〇二七号"(013,014,015を束ねた和紙の帯の墨書)	013,014,015、3枚型
	"半分切テクダサイ"	"㊦ 壹等印(商印)"863-2〜819と同じ耕柄
	"竹□十一 1 7" "御面倒様デスガ竹ノ伏の細キ所少し筆ヲ入レテ頂キタイノデス"	
	"竹印"(白チョーク)	
	"コノ先の吊刃モ今少シ白ク成ル様タキ入レテ下サイ"(ペン)	
	"上エンハ一寸三分位イ"(鉛筆)	
	" 9 6 0 至急"(墨書)	"星合彫製"(商印)
		菊割付柄、039と糸綴じ、"桜マークに検(スタンプ)"
		"壹等印(スタンプ)" "検印"
		流水と秋草、051と糸綴じ、検印"壹等印(スタンプ)" "桜マークに検(スタンプ)"
	"竹四十七 1 7"	"桜マークに検(スタンプ)" " (壹等印のスタンプか)"
		刀の鐔、055と糸綴じ、検印"一等□印(スタンプ)" "桜マークに検(スタンプ)"
	" 1 "(チョーク)	"伊勢染型紙商業組合検査印(スタンプ)"17-430,431糸綴じ
	"□□"(墨書)	"染型商検(スタンプ)" "桜マークに検(スタンプ)"
		十字耕、"伊勢〇〇〇〇組合共販検査印(スタンプ)"17-449,450糸綴じ
		"〇〇工業組合検査印(スタンプ)"、17-502,503糸綴じ
		15-174と15-175とまとめられている
		"東京市東両国横綱町一五 萬形紙店 河合耕三郎"(商印)
		"伊勢松坂北村〇〇〇〇利市 ㊦ 〇〇商店入"(商印)
		"□□型紙□□□□店足利市 ㊦ 梅橋商店入(商印) "北□製"(朱印か)
	"(憲)引"(墨書)	"白子 田島 □製"(商印)
	憲 4 (墨書)	"三重懸宮佐特製白子町"(商印)、割付線
	"勝 7 6"(墨書)	"三重懸宮佐特製白子町"(商印)
		"星合彫製"(商印)
		"星合彫製"(商印)
	"三辺"	亀甲文様、001,002,003糸綴り、"桜マークにエ(商印)"
	"竹一 1 7"	"桜マークにエ(商印)"17-199とセット
	"三辺〇" "〇〇"(赤鉛筆)	耕水玉ちらし、004,005,006糸綴り "□□金印"(商印)
		"㊦ 壹等印"(スタンプ) 17-494,495糸綴じ
		霞に牛車、032,033、糸綴じ、"桜マークにエ"(商印)
	"千印第一五一号 下"	"南部特製"(商印)

	書き付け							その他(文様の要素、数もの、スタンプ等)
	番号	産元	年月日 S00.00.00	送り	色数 辺数	彫刻所	その他	
	8	大橋	S50.1.20		一辺			「ICH」純生別製9番のスタンプ 割付線 絵刷り 下描き
	82	榎本	S49.6.19		一辺		"No.819号"	
	143		S29.1					
	201		S29.10.1					"桜マークに辰"(商印)
	215		S29.10.18				"中止"赤鉛筆	"桜マークに辰"(商印)
	112	榎本	S49.10.22	裏返し送り	一辺			「ICH」純生別製98番のスタンプ 割付線 絵刷り(墨)
	35	大橋	S50.3.14		一辺			割付線 絵刷り(墨)
	236		S29.10.30		2色	林		8-209とセット
	110	㊦	S33.8.5		2色		"オキ"	"桜マークに辰"(商印)
	55	睦	S40.4.30		1色		"オキ"	縞風にも見える
	125	大橋	S46.9.29	三回送り				紗綾形、麻の葉、琉球風で埋める
	57	大橋	S49.4.17		1色			"ICH"絵刷り、下絵刷り
	54	大橋	S49.4.11		1色			段々縞風の割付柄に琉球柄をアレンジ、割付線、絵刷り、下絵刷り
	101	榎本	S32.2.2		一辺			割付線 絵刷り(墨)
	7		S32.2.2		2色	林		"桜マークに辰"(商印) 10-025とセット



資料編

写真 番号	整理番号		寸法 (mm)				文様		技法				
	箱番号	番号	横	縦	型巾	送り巾	類型	構成要素	錐彫り	突き彫り 引き彫り	道具彫り (鉋、棒)	道具彫り	
5-23	10	213	461.0	378.0	397.5	241.5	微塵柄		○				
5-24	10	215	456.5	378.0	331.5	240.5	微塵柄	横縞風	○				
5-25	7	008	543.0	487.0	445.5	242.0	白紺柄	幾何学	○				
5-26	10	223	450.0	330.0	331.5	242.5	微塵柄	横縞風			○		
5-27	10	231	455.0	377.0	394.5	242.0	微塵柄	十字紺			○		
5-28	10	236	455.0	373.0	376.5	241.0	微塵柄	十字紺			○		
5-29	10	255	455.0	380.0	408.0	242.0	微塵柄	十字紺、亀甲			○		
5-30	10	091	452.0	378.0	391.5	240.5	割り付け	モダン、大柄	○				
5-31	7	092	457.0	451.0	392.5	241.5	割り付け	四半、琉球柄	○				
5-32	9	023	450.0	454.0	394.0	242.0	割り付け	分銅、斜格子	○				
5-33	9	028	452.5	447.0	393.5	196.0	割り付け	紗綾形	○				
5-34	10	178	454.0	380.0	389.5	241.5	割り付け		○		○		
5-35	13	299	455.5	401.5	393.0	484.5	連続	華唐草	○				
5-36	10	043	450.0	376.0	392.0	241.0	縞	立涌	○				
5-37	9	041	453.5	456.0	393.0	242.5	縞	よろけ縞	○				
5-38	10	008	453.0	375.5	362.0	240.5	縞	立涌	○		○		
5-39	9	072	454.0	453.3	393.0	242.5	絵画	芭、楓、菊 しきり	○				
5-40	11	2086	454.5	362.5	278.5	272.5	絵画風	唐草	○				
6-1	10	207	453.5	392.0	408.0	241.0	微塵柄	割り付け風	○				
6-2	10	005	467.0	382.0	397.5	240.5	微塵柄		○		○		
6-3 7-28	11	2205	454.0	391.5	396.0	241.5	割付柄		○				
6-4	8	010	455.0	377.0	392.0	241.5			○		○		
6-5	9	002	455.0	451.0	395.0	240.0	連続	唐草	○				
6-6 7-26	6	001	452.0	452.0	392.5	241.5	割付柄	植物	○				
6-7	7	056	451.5	605.3	393.0	484.0	連続	華唐草	○				
6-8	13	230	455.0	454.5	393.0	242.5	小紋柄	独楽	○				
6-9	11	2095	455.5	376.5	362.5	272.5	縞柄	花、唐草	○				
6-10 6-11	11	2096	456.0	378.0	362.5	272.0	小紋柄	花	○				
7-27	11	2202	452.5	390.0	405.0	242.0	割付柄	花	○				
7-29	7	047	548.5	457.0	445.5	242.0	割付柄		○				
7-30	7	114	455.5	458.0	392.5	194.0	割付柄	琉球柄	○				

2016-052-3 株式会社相曽形染機械染色関係資料 その他の資料

写真 番号	資料番号		名称	柄の類型	位置	図案・端切れ		
	箱番号	番号				縦 mm	横 mm	
2-1	17	6	図案		型紙1035の図案、1035に貼り付けられている	56	52	
2-2	1	1	図案	割付柄		143	324	
2-3	1	2	図案	割付柄		144	323	
2-4	5	38	図案	割付柄		189	113	
2-5	12	1	図案	割付柄	型紙3076と3077の間	182	123	
2-6	21	1	図案	連続柄		243	363	
2-7	21	7	図案	連続柄		212	360	
2-8	21	6	図案	連続柄		241	210	
2-9	21	8	図案	割付柄		136	181	
2-10	21	2	図案	連続柄		483	358	
2-11	21	3	図案	連続柄		482	359	
2-12	21	4	図案	連続柄		484	360	
2-13	21	9	図案	縞柄		151	182	
2-14	21	10	図案	割付柄		133	181	
2-15	21	5	図案	連続柄		209	362	
2-16	17	2	図案	縞柄	型紙553と554の間	163	115	
2-17	17	3	図案	縞柄	型紙533と534の間	162	118	
2-18	17	4	図案	縞柄	型紙547と548の間	160	115	
2-19	17	1	図案	連続柄	型紙004、005、006の図案	166	257	
2-20	17	5	図案	縞柄	型紙1002の図案、1002に糸でくくられている	92	61	
2-21	20	1	図案	縞柄	型紙1153と1154の間、型紙1156の図案か	171	115	
4-2 4-3	32	1	マンガン染布地			幅 385mm	長 11.48m	
4-2 4-3	32	2	マンガン染布地			幅 385mm	長 11.48m	
4-4	1	3	端切れ	縞柄		215	368	
4-5	5	26	端切れ	小紋		120	350	
4-6	16	35	端切れ	割付柄		172	175	



	書き付け							その他(文様の要素、数もの、スタンプ等)
	番号	産元	年月日 S00.00.00	送り	色数 辺数	彫刻所	その他	
			S27.2.17	二枚彫				
			S27.8.28					"桜マークに辰"(商印)
	83	相曽	S50.10.7		一辺			割付線 絵刷り(墨)
								"宮佐特製"(商印)
	139		S28.12.23		1色	林		
			S29.9				"太い目"	10-027とセット
	216		S29.10.18				"昭三十.十一.二整理" 白チョーク	"桜マークに辰"(商印)
	74		S34.7.22		2色			"桜マークに辰"(商印) 10-091,092セット
	29	藤田	S49.2.26		1色			糸綴じされた図案の縦138.5mm、横135.5mm、図案の割付線の縦 17.5mm、横15.5mm "ICH純生別製98番"商印
	130	大橋	S46.10.5		一辺			絵刷り、下絵刷り、割付線
	74	睦美屋	S46.5.29	二回半送り				"桜マークに辰"(商印) 絵刷り、下絵刷り、割付線
	2	㊥	S34.1.8		2色	林	"テン ナフトール ヨコ ナフトール タテ マンガン"(チョーク)	10-178,179セット
	16	大橋	S53.2.6		一辺			絵刷り、下絵刷り、割付線
	102	大橋	S39.4.17		2色			植物柄で埋める、"桜マークに辰"(商印)、10-144とセット
	124	大橋	S46.9.29		一辺			絵刷り、下絵刷り、割付線
	148		S32.9.28		2色	林		
	107	藤田	S46.9.3	裏返し送り	一辺			"桜マークに辰"(商印)、鉛筆の下書き、絵刷り、下絵刷り
	124		S28.11.21	裏返し送り	2色	林	" 6"(白チョーク) "1.8尺"(赤鉛筆)	
	115		S28.10					"桜マークに辰"(商印)
			S28.2.11		2色			
	94		S28.8.26		1色	林		中辰スタンプ
	6	相曽	S41.2.10		1色		"マンガン一色"	下絵刷り
	22	大橋	S41.5.14		2色		"マンガン二色"	"桜マークに辰"(商印)、絵刷、下絵刷
	71	睦美や	S44.7.23	裏返し送り	一辺			"桜マークに辰"(商印)、割付線、絵刷り(墨、赤鉛筆、鉛筆)
	79	榎本	S49.6.17		一辺		" 8 2 0"	絵刷り、下絵刷り
	18	大橋	S55.2.22	裏返し送り				
	128		S28.11.24	裏返し送り	2色	林	「1.8尺」墨書	唐草と波の縞柄に大きな花の区画を割り付ける
	129		S28.11.24	裏返し送り	2色	林	1.8尺 「比の輪かくを消す」墨書	四角のマス目を散らしてあり、あえて小紋と呼ぶ。小紋ベースに、大 きな花の区画を2ヶ所配する
	90		S28.8.26		1色	林		中辰スタンプ
	97	相曽	S49.9.17		二辺			「ICH」純生別製10番のスタンプ 割付線、絵刷り(墨、白)
	4	大橋	S49.1.10	二回半送り	1色			"ICH"、絵刷り、下絵刷り、割付線

	台紙		解説
	縦 mm	横 mm	
	694	393	白地に十字罫、井桁罫、琉球柄、台紙に鉛筆のスケッチ、マジックで「マンボウ ナフトールマンガン 相曽」
	694	392	白地に井桁罫と琉球柄、台紙に鉛筆のスケッチ、マジックで「マンボウ ナフトールマンガン 相曽」
	321	198	グレーの地
	377	270	紺地に井桁罫、台紙に鉛筆で「大印」「3」「此の通り」
	787	390	紺地に罫の花柄を亀甲の小紋で描く、台紙の表と裏に送り幅482mmの下書きをペンで描く、「藤田」「相曽」、
	717	391	罫の雪輪と風、雪輪の中は亀甲の小紋で満たす、台紙の表と裏に送り幅481mmの下書きをペンで描く
	718	391	亀甲の小紋の地に大柄な唐草を染め抜く、台紙の表と裏に送り幅481mmの下書きをペンで描く
			罫の亀甲、「大橋商店 相曽」
	786	364	罫、「E160」「榎本」「相曽」
	787	364	罫、「E161」「榎本」「相曽」「小倉」印
	787	364	罫、「E159」「榎本」「相曽」
			罫の段々縞、「大橋商店 相曽」
			罫、「相曽」
	718	391	紺地に亀甲の小紋でボタンの花を染め抜く、台紙の表と裏に送り幅481mmの下書きをペンで描く
			縦縞、十字罫、「140 天地尺七寸ノ三分ノ一」
			縦縞、十字罫、「1218 天地尺七寸ノ三分ノ一」
			縦縞、井桁罫、「124 天地尺七寸ノ三分ノ一」
			罫
			罫の縦縞、「126 天地尺七寸ノ三分ノ一」
			末端にマジックで「15」、包み紙にマジックで「38.8.23マンガン」
			末端にマジックで「13」、包み紙にマジックで「38.8.23マンガン」
			段々縞
			白地に細かい格子縞の地に、松葉の小紋
			黒地に井桁罫

資料編

2017-011 相曽泰子寄贈株式会社相曽形染の絵刷

写真番号	資料No.	種類	名称	年代	差出	受取	形態	寸法			点数	備考
								縦 (mm)	横 (mm)	高さ (mm)		
【1-6】 【1-7】 2-22	1	絵刷		1959	林型紙彫刻所	相曽形染	冊	75	77		1	「34.9月分 納品絵刷 林型紙彫刻所」、14枚つづり

2018-023 林茂寄贈林型紙彫刻所資料

写真番号	資料No.	種類	名称	年代	差出	受取	形態	
【1-8】 【1-9】	478	絵刷り	型紙之通（型絵刷り）	昭和25年2月	林文一	睦美屋	冊	
【1-10】	504	彫刻台	突き彫りの台					
【1-11】 3-1	505	彫刻台	道具彫りの台					
【1-12】	499	曲尺		昭和28年				
【1-12】	500	曲尺		昭和46年				
【1-12】	501	鯨尺						
【1-12】	502	鯨尺		昭和46年				
【1-12】	699	定規						
【1-12】	700	定規						
【1-13】 4-20	486	カゴで染めた布地見本						
2-23	482	絵刷り	煙山形染の型絵刷り					
2-24	480	絵刷り			林型紙店	相曽形染	冊	
2-24	481	絵刷り			林型紙店	相曽形染	冊	
2-25	479	絵刷り	型絵刷り	昭和31年3月～6月	林型紙店	相曽形染	冊	
3-4 3-5	503	彫刻台	突き彫りの板					
3-3 3-6	506	彫刻台	錐彫りの板					
3-7	702	水桶						
3-7	703	砥石						
3-7	704	砥石						
3-8	695	半被		大正14年				
4-17	483	カゴで染めた布地見本						
4-18	484	カゴで染めた布地見本						
4-19	485	カゴで染めた布地見本						
4-21	487	カゴで染めた布地見本						
4-22	488	カゴで染めた布地見本						
4-23	489	カゴで染めた布地見本						
4-24	490	カゴで染めた布地見本						
4-25	491	カゴで染めた布地見本						
4-26	492	カゴで染めた布地見本						
4-27	493	カゴで染めた布地見本						
4-28	494	カゴで染めた布地見本						
4-29	495	カゴで染めた布地見本						
4-30	496	カゴで染めた布地見本						

2018-007 竹内重行寄贈型紙彫刻資料

写真番号	資料番号	種類	名称	年代	差出	受取	形態	
【1-14】	1140	彫刻刀	突き彫り	現代				
【1-14】	1142	彫刻台	錐彫りの台	現代				
【1-14】	1144	型地紙		現代				
【1-14】	1145	コホン		現代				
【1-14】	1146	文鎮		現代				
【1-14】	1147	ピン		現代				
【1-15】	1132	絵刷り		現代				
【1-15】	1133	絵刷り		現代				
【1-15】 【1-16】	1134	絵刷り		現代				
2-26	1135	絵刷り		現代				
2-27	1137	絵刷り		現代				
3-2	1138	彫刻台	道具彫りの台	現代				
3-9	201	コホン		現代				
3-10	206	コホン		現代				
3-11	197	コホン		現代				
3-12	004	コホン		現代				
3-13	045	コホン		現代				
3-14	096	コホン		現代				
3-15	230	コホン		現代				
3-16	064	コホン		現代				
3-17	188	コホン		現代				
3-18	101	コホン		現代				
3-19	179	コホン		現代				
3-20	029	コホン		現代				
3-21	185	コホン		現代				



2017-012 鈴木啓仁寄贈株式会社相曽形染関係資料

写真番号	資料№	種類	名称	年代	差出	受取	形態	寸法			点数	備考
								縦 (mm)	横 (mm)	高さ (mm)		
4-7 4-8	1	布地	白紵	現代			反物		356		1	相曽形染に勤めている時に貰った物

	寸 法			点数	備考
	縦	横	高さ		
	全長	柄の先端の太さ			
	250	178	18	1	編数もの、紗張りのものなど
	245	147		1	
	585	295	12	1	桜の板
	313	26		1	カゴ用、「昭和28年吉日 林型紙店」
	313	28		1	カゴ用「金300円也 昭和46年元旦 林」
	759	21		1	注染用、書き付けの判読不明
	757	22		1	注染用「金200円也 手話46年元旦 林型紙彫刻所」
	244	37		1	弾き彫りに使う鉄製の定規
	457	47		1	引き彫りに使う鉄製の定規
	236	360		1	ウール
	363	470		1	ナフトール、マンガンによる型染の型絵刷り、13種類
	253	178	5		相曽様
	253	178	5		㊦
	253	178	5	1	
	288	127		1	「林型紙」
	53	446	53	1	朴の板
	303	235	124	1	
	206	39	14	1	
	218	45	36	1	
	身丈 810	桁丈 645		1	初代、林文一氏のもの。明治32年生まれ。足利で修業し19歳で独立、東京へ出た後、大正13年、浜松で型紙店を始めた。戦後は昭和27、8年頃から再開。
	196	148		1	ウール
	465	370		1	ウール
	191	366		1	ウール
	238	370		1	木綿
	238	372		1	木綿
	238	372		1	木綿
	238	370		1	木綿
	238	370		1	木綿
	166	375		1	絹
	379	373		1	絹
	646	367		1	絹
	595	366		1	絹
		340		1	一反

	寸法				点数	備考
	縦 (mm)	横 (mm)	高さ (mm)	(mm)		
	160				1	
	491	395	6		1	
	448	454			1	
	190	152			1	
	152	27	20		1	
	113				1	
	245	175			1	
	245	175			1	
	245	175			1	
	173	260			1	
	173	260			1	
	645	256	12		1	
	148	267			1	
	146	183			1	
	189	152			1	
	189	154			1	
	182	201			1	
	160	214			1	
	146	228			1	
	338	226			1	
	147	207			1	
	121	335			1	
	300	182			1	
	154	138			1	
	88	371			1	

2019-006 三幸株式会社寄贈資料

写真番号	資料No.	種類	名称	年代	差出	受取	形態	寸法			点数	備考
								縦 (mm)	横 (mm)	高さ (mm)		
【1-17】 4-9	1	布地	白かすり	現代				2m	383		1	「300円 2m 綿100%」ビニル袋入り、 催し物の販売品として作られたもの
【1-17】 4-10	2	布地	白かすり	現代				2m	383		1	
【1-17】 4-11	3	布地	白かすり	現代				2m	383		1	
【1-18】	4	布地	縞柄	現代				1003	388		1	縦縞の先織にカゴヅケをするためのサン プル布
4-12	5	布地	縞柄	現代				830	356		1	

2019-007 煙山稔寄贈株式会社煙山形染関係資料

写真番号	資料No.	種類	名称	年代	差出	受取	形態	寸法				点数	備考
								縦 (mm)	横 (mm)	身丈 (mm)	袖丈 (mm)		
【1-19】	5	布地	ウールの 着尺	現代					371			1	煙山形染の製品、紺地に白抜きの花柄、 秋田整理(有)の「染ムラ」のラベル付
【1-20】 4-14	2	布地	絹の着尺	現代					384			1	煙山形染の製品、紺地の微塵柄
【1-21】	8	着物	半纏	現代						775	680	1	煙山形染の製品、横縞柄
【1-22】 4-16	10	着物	白紬の浴衣	現代						1440	700	1	煙山形染の製品、「御仕立ゆかた」ラ ベル付き
4-1	7	着物	半纏	現代						805	肩幅 340	1	煙山形染の製品、縦縞柄、袖なし
4-13	1	布地	絹の着尺	現代					380			1	煙山形染の製品、茶色地の市松柄
4-15	3	布地	絹の着尺	現代					410			1	煙山形染の製品、紺地の亀甲柄

型紙調査整理参加学生名簿

年度ごとの参加者、五十音順

2017年度	縣 美勇士 大石 桃子 中村 夢 山崎 遥香 渡辺 葵	荒井 亮 小川 果歩 松島うらら 山谷 智美 渡部 碧唯	池川 恵子 岸端 愛美 松場 晴歌 吉田 麻美	池田 恭子 小林 恵 宮澤 千夏 米倉 希	内山 優花 利光 正恵 山際 悠輔 若森 玲奈
2018年度	荒井 亮 内山 優花 小林 恵 下川原李音 鈴木 好姫 中村 駿一 安江 颯斗 渡辺 葵	安齋 瑛梨 大井 昌宏 佐々木優海 下田 阿子 高橋 未来 中山 はな 山崎 遥香 渡部 碧唯	池川 恵子 奥村ひかる 篠原 由衣 下畑 颯哉 田中 理子 野田 海生 吉田 麻美	石川 春佳 片山 葵 清水 苑子 鈴木 朋代 利光 正恵 林田 孝生 米倉 希	乾 友梨香 久保田瑞希 清水 遥香 鈴木 光世 内藤 雅菜 三輪 春名 若森 玲奈
2019年度	渥美 芳紀 乾友 梨香 久保田瑞希 清水 遥香 鈴木 朋代 内藤 雅菜 三輪 春菜 米倉 希	荒井 亮 内山 優花 小杉 勇人 下河原李音 鈴木 光世 中村 俊一 谷河 綾野 若森 玲奈	安齋 瑛梨 大井 昌宏 小林 恵 下田 阿子 高橋 未来 中山 はな 安江 颯斗 渡辺 葵	池川 恵子 笠井 美瑠 佐々木優海 下畑 颯哉 田中 理子 廣瀬 慎 山崎 遥香 渡部 碧唯	石川 春佳 片山 葵 篠崎 真実 鈴木 好妃 利光 正恵 福沢 海帆 吉田 麻美
2020年度	大井 昌宏 谷河 綾乃	関 成海 安江 颯斗	篠崎 萌香 山崎 霽奈	高橋 悠花	福沢 海帆
2021年度	井伊谷 尚 大木 泉水 渋谷佳緒里 財部 優織 畑 菜月 三浦 風音 吉田 優里	伊藤 鈴木 大澤 清香 砂原 涼帆 瀧口和佳奈 林 里奈 宮内ゆふり 立石 芽生	伊藤日菜子 大須賀真奈 角 颯希 中島 由乃 平田 紗千 三和愛仁花	岩倉 柚奈 大坪あいり 関 成海 中楯 愛 福井 健吾 望月 知実	岩崎 秋里 甲斐 千尋 高橋 悠花 能勢 柚乃 前田 朱里 安江 颯斗

2022年度	MUHAMMAD ILHAM RAIHANUR	石原 瑠奈	大澤 佳子	大友 綾乃
	小野寺 凜	河原崎 茜	久保 輝明	桑野 茅咲
	阪本 淑恵	酒巻 鼓	佐藤 琴萌	鈴木 夢由
	砂原 涼帆	高田 桃花	滝戸さらさ	中楯 愛
	永田 みう	中土居和奏	長沼かほり	萩原 彩吹
	東村 歌恩	福田日菜多	古田 摩耶	増田 瑞希
	村松 悠加	角 颯希	鷹森 千佳	
2023年度	新井 美宇	有馬 和輝	石山 渚結	一ノ瀬龍星
	岩辺 紗希	小野 怜那	小林 楓	齋藤 咲季
	砂原 涼帆	竹内 詩音	冨永 鈴ん	中楯 愛
	日馬 楓花	藤井 智美	堀井 楓花	松葉 百香
	森平 風花			丸山 華帆
2024年度	浅川こころ	阿部壮太郎	伊藤 実紅	香村 英里
	鮫島 海里	杉山あいり	土井 優莉	中川 紗菜
	藤井 智美	藤川 知紗	松葉 百香	松本 南泉
	岩村 遥波	宮澤 朋孝	原田 陽菜	戸川 里野
	佐久間 藍	姉崎 文音	杉山明日香	鎗井 友花
	馬場 友結	福本 あい	齊藤 そら	藤田俊太郎

相曽形染機械染色関係資料 共同研究 報告書 [事業報告編] [資料編]

静岡文化芸術大学 教員特別研究費

「浜松を結実点とする機械染色型紙の近代産業と美術における重要性の研究 ―国内外の影響を探る―」

研究代表 元静岡文化芸術大学教授 立入正之 2017年4月から2023年3月まで

研究代表 静岡文化芸術大学准教授 田中裕二 2023年4月から2025年3月まで

発行：静岡文化芸術大学 2025年3月

編集：田中裕二 栗原雅也

印刷：松本印刷株式会社

